# II．遺跡調査の概要

# 調査の理由と工程

## 1．発掘調査

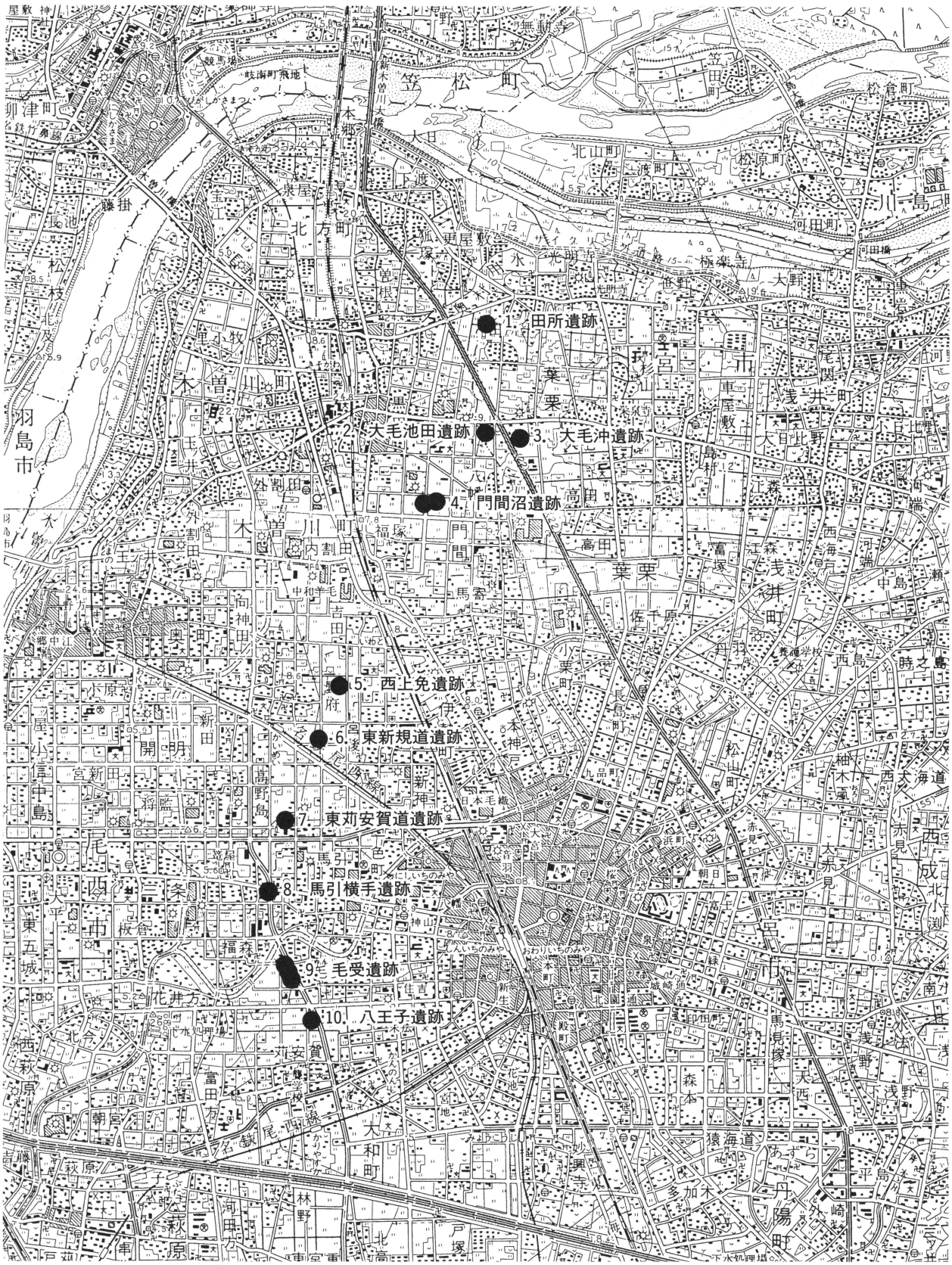
| 調査委託者 | 調査の理由 | 遺跡名 | 面積(㎡) | | 調査の期間 | 調査担当者 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 建設省<br>(名四国道)<br>日本道路公団 | 伊勢湾岸道路建設 | NA335号古窯跡群<br>(900㎡) | 900 | | 95．8～95．11 | 水谷・松田・加藤 |
| | 伊勢湾岸道路建設 | 円通寺古墓<br>(1,500㎡) | 1,500 | | 95．4～95．8 | 水谷・松田・加藤・堀木 |
| 日本道路公団<br>愛知県土木部<br>(道路建設課) | 東海北陸自動車道建設 | 田所遺跡 | A | 600 | 95．11～95．12<br>96．1～96．3 | 前田・小澤・小池・早野 |
| | | (2,300㎡) | B | 1,700 | 95．7～95．12 | 前田・小澤・小池・早野 |
| | | 大毛沖遺跡<br>(400㎡) | 400 | | 95．7～95．9 | 前田・小澤・小池・早野 |
| | | 大毛池田遺跡 | A | 5,300 | 95．4～96．1 | 前田・伊藤秀・武部 |
| | | | B | 3,200 | 95．6～95．12 | 前田・北村・大崎 |
| | | | C | 600 | 95．6～95．9 | 前田・小澤・小池・早野 |
| | | | D | 800 | 95．6～95．9 | 前田・小澤・小池・早野 |
| | | | E | 1,000 | 95．4～95．6 | 前田・小澤・小池・早野 |
| | | | F | 600 | 95．4～95．6 | 前田・北村・大崎 |
| | | (13,400㎡) | G | 1,900 | 95．12～96．1 | 前田・北村・大崎 |
| | | 門間沼遺跡 | A | 3,740 | 95．4～95．7 | 神谷・坂倉・石黒・栗林・西原・酒井・小川・中野 |
| | | | B | 3,526 | 95．4～95．7 | 神谷・坂倉・石黒・栗林・西原・酒井・小川・中野 |
| | | | C | 4,319 | 95．8～95．12 | 神谷・坂倉・石黒・栗林・西原・酒井・小川・中野 |
| | | | D | 5,300 | 95．8～95．12 | 神谷・坂倉・石黒・栗林・西原・酒井・小川・中野 |
| | | | E | 8,600 | 95．10～96．3 | 神谷・坂倉・石黒・栗林・西原・酒井・小川・中野 |
| | | | F | 1,200 | 96．2～96．3 | 神谷・坂倉・石黒・栗林・西原・酒井・小川・中野 |
| | | (28,440㎡) | 立会調査 | 1,755 | | 神谷・坂倉・石黒・栗林・西原・酒井・小川・中野 |
| | | 西上免遺跡<br>(2,788㎡) | 2,788 | | 95．4～95．7 | 赤塚・今西・牧 |
| | | 東新規道遺跡 | A | 3,100 | 95．8～95．10 | 赤塚・今西・牧 |
| | | | B | 2,300 | 95．8～96．1 | 赤塚・今西・牧 |
| | | | C | 942 | 95．11～96．1 | 赤塚・今西・牧 |
| | | (7,294㎡) | D | 952 | 95．11～96．1 | 赤塚・今西・牧 |
| | | 東苅安賀道遺跡 | A | 3,300 | 95．4～95．9 | 赤塚・小泉・伊藤太 |
| | | (4,424㎡) | B | 1,124 | 95．4～95．9 | 赤塚・小泉・伊藤太 |
| | | 馬引横手遺跡 | A | | 95．9～96．3 | 赤塚・小泉・伊藤太 |
| | | | B | 2,529 | 95．9～96．3 | 赤塚・小泉・伊藤太 |
| | | (2,529㎡) | C | | 95．9～96．3 | 赤塚・小泉・伊藤太 |
| | | 毛受遺跡<br>(1,446㎡) | A | 1,446 | 95．4～95．6 | 黒田・山本・飴谷 |

| 調査委託者 | 調査の理由 | 遺跡名 | 面積(㎡) | | 調査の期間 | 調査担当者 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 日本道路公団<br>愛知県土木部<br>(道路建設課) | 東海北陸自動車道建設 | 八王子遺跡<br>(8,734㎡) | A | 1,781 | 95. 4～95. 11 | 黒田・増沢・樋上 |
| | | | B | 2,663 | 95. 9～96. 1 | 黒田・増沢・樋上 |
| | | | C | 1,430 | 95. 7～95. 10 | 黒田・山本・飴谷 |
| | | | D | 1,353 | 95. 10～95. 12 | 黒田・山本・飴谷 |
| | | | E | 1,507 | 95. 12～96. 3 | 黒田・増沢・樋上 |
| 愛知県土木部<br>(道路建設課) | 県道名古屋祖父江線建設 | 大縄遺跡<br>(2,200㎡) | A | 2,200 | 95. 10～96. 12 | 水谷・蔭山 |
| | | | B | | 95. 10～96. 12 | 水谷・蔭山 |
| | | | C | | 95. 10～96. 1 | 水谷・蔭山 |
| | 馬飼井堀線建設 | 一色青海遺跡<br>(800㎡) | F | 800 | 96. 1～96. 3 | 水谷・蔭山 |
| 愛知県土木部<br>(河川課) | 五条川改修 | 清洲城下町遺跡<br>(3,000㎡) | A | 1,500 | 95. 11～96. 1 | 水谷・松田・加藤 |
| | | | B | 1,500 | 96. 1～96. 3 | 水谷・松田・加藤 |
| | 日光川上流流域下水道 | 一色青海遺跡<br>(5,000㎡) | A | 750 | 95. 4～95. 10 | 水谷・鈴木・蔭山 |
| | | | B | 930 | 95. 4～95. 10 | 水谷・鈴木・蔭山 |
| | | | C | 2,120 | 95. 4～95. 10 | 水谷・鈴木・蔭山 |
| | | | D | 600 | 95. 9～95. 10 | 水谷・蔭山 |
| | | | E | 600 | 96. 3 | 水谷・蔭山 |
| 愛知県教育委員会<br>(文化財課) | 新資料館建設 | 朝日遺跡<br>(2,774㎡) | 2,774 | | 95. 9～96. 3 | 福岡・宮腰・鈴木 |

## 2．整理報告書

| 調査委託者 | 調査の理由 | 遺跡名 | 調査面積 | 調査年度 |
|---|---|---|---|---|
| 建設省<br>(名四国道) | 国道23号<br>岡崎バイパス建設 | 広坪遺跡 | 4,200 | 平成5年度 |
| 日本道路公団<br>愛知県土木部<br>(道路建設課) | 東海北陸自動車道建設 | 北道手遺跡 | 5,887 | 平成5年度 |
| | | 大毛沖遺跡 | 37,612 | 平成5～7年度 |
| | | 田所遺跡 | (整理) | 平成4～7年度 |
| | | 大毛池田遺跡 | (整理) | 平成5～7年度 |
| | | 西上免遺跡 | (整理) | 平成2～7年度 |
| 愛知県土木部<br>(道路建設課) | 西尾幡豆線建設<br>国道155線建設<br>馬飼井堀線建設 | 鳥羽城跡 | 3,180 | 平成6年度 |
| | | 烏帽子遺跡 | 2,040 | 平成5年度 |
| | | 儀長正楽寺遺跡 | 5,630 | 平成5・6年度 |
| 愛知県土木部<br>(都市整備課) | 清洲新川線建設 | 清洲城下町遺跡 | 500 | 平成5年度 |
| 愛知県土木部<br>(河川課) | 五条川改修 | 清洲城下町遺跡 | (整理) | 平成4～7年度 |

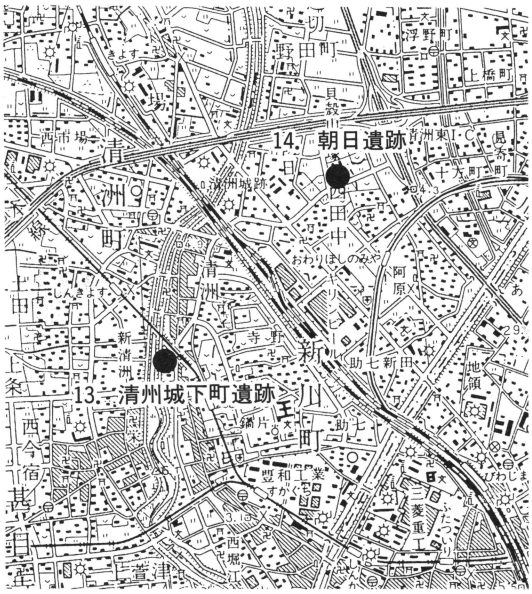
遺跡の位置




1．田所遺跡　2．大毛池田遺跡　3．大毛沖遺跡　4．門間沼遺跡　5．西上免遺跡
6．東新規道遺跡　7．東苅安賀道遺跡　8．馬引横手遺跡　9．毛受遺跡　10．八王子遺跡

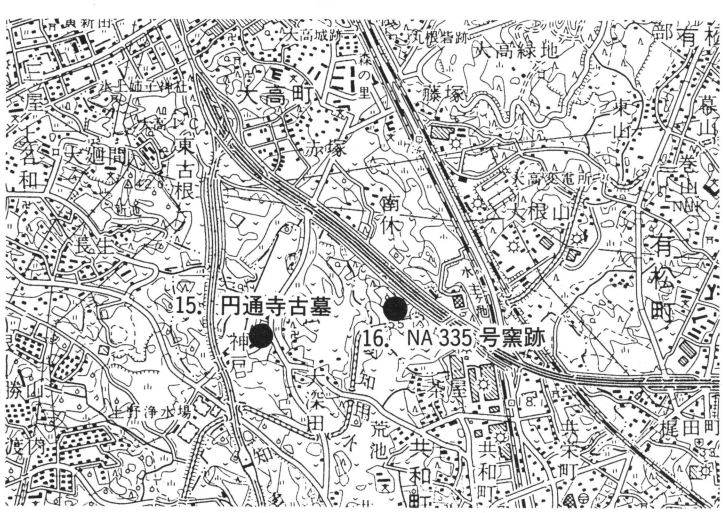



11．一色青海遺跡　12．大縄遺跡




13．清洲城下町遺跡　14．朝日遺跡



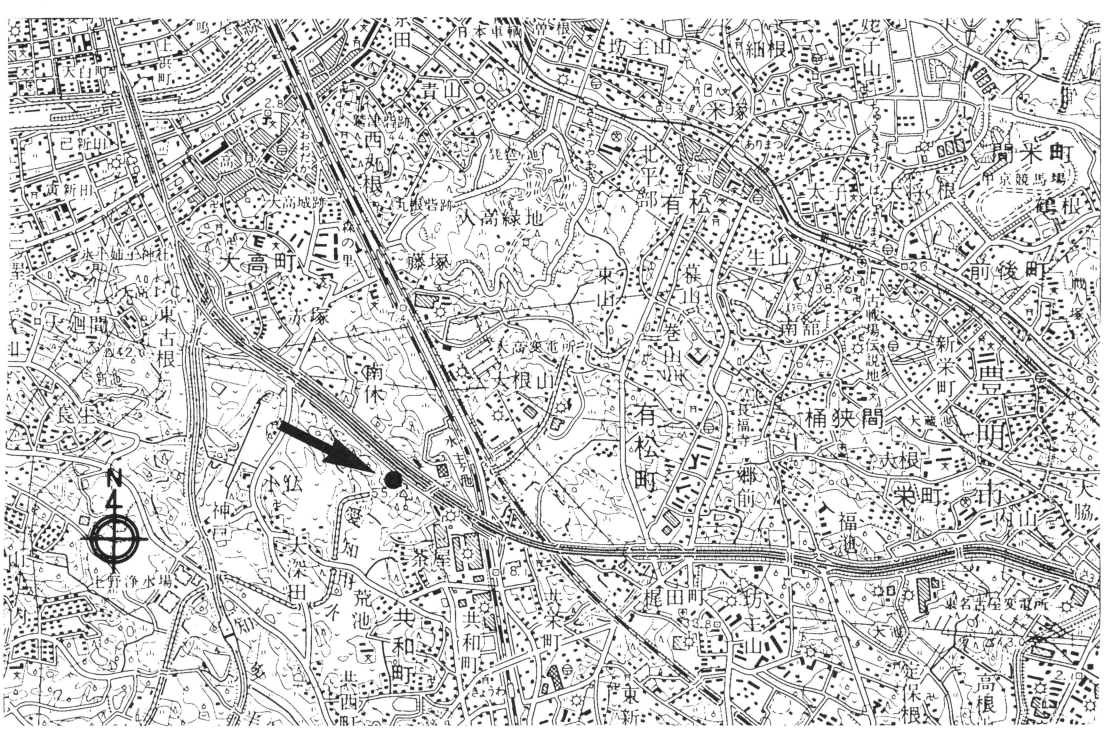

15．円通寺古墓　16．ＮＡ335号古窯跡群

# ＮＡ335号　古　窯　跡　群

**調査の経緯**　本遺跡は、名古屋市緑区大高町高根山地内に所在し、周辺の地形は起伏に富んでおり狭い谷を含む丘陵地である。調査は環状２号線建設工事の事前調査として、平成７年８～11月にかけて行った。調査区の位置する場所は名古屋市域の南東端に位置し、周辺に所在する遺跡も前述の地形を利用した窯跡が圧倒的に多い。本遺跡も含めたこれらの古窯は、古代から中世にかけて日本有数の焼き物生産地であった「猿投山西南麓古窯跡群」に属し、そのうちでは鳴海地区（Ｎ）、有松支群（Ａ）にあたる。本地点の発掘調査面積は、900㎡である。

**調査の概要**　検出した主な遺構は窯跡５基で、同時に灰原も確認できた。出土遺物は灰釉系陶器（山茶碗・皿）で、いずれも12世紀後半から13世紀前半のものと思われる。各窯跡は、傾斜を持たせたこの時期の灰釉系陶器生産窯４基の他、１基のみ床面が平坦で円筒形の窯体構造を呈する。円筒形の窯を除く４基のうち、３基はこの時期の椀を敷き詰めた床面下施設を有し、さらにこの中の１基はこの施設が上下２段に重なっていた。円筒形の窯は炭を生産した可能性もうかがえるが、その目的は不明である。

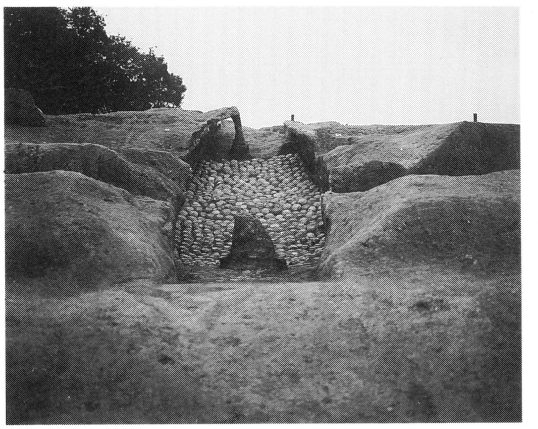
検出された遺構・遺物については、自然科学的分析も含めて現在整理検討中である。本遺跡の調査は、当該期のこの地域における窯業生産体制を検討するうえで一助となるであろう。　（松田　訓）



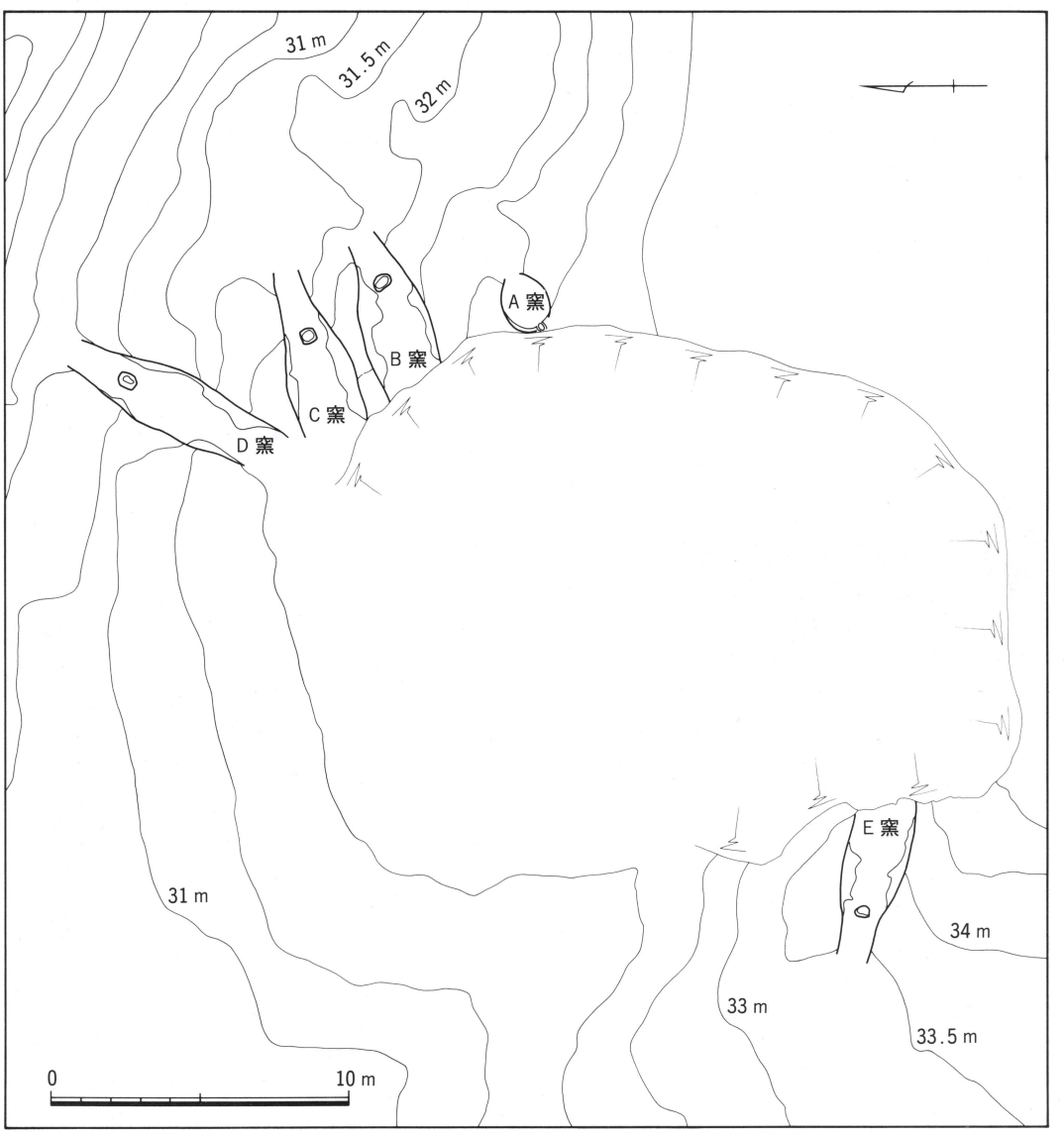

第１図　遺跡位置図（国土地理院１／５万）



第 2 図　B 窯



第 3 図　D 窯




第 4 図　遺構位置図

# 円通寺古墓

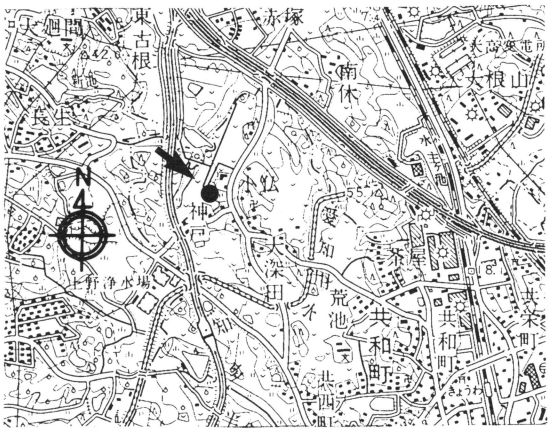
**調査の経緯**　本遺跡は、南北にのびる知多半島の付け根部分、大府市共和町字神戸(こうど)地内に所在する。遺跡周辺は丘陵地のため起伏に富んでおり、調査区は、知多半島全域の丘陵を形成している常滑層群が舌状にのびる末端に位置している。周辺に所在する遺跡には、南北にのびる谷状の地形をはさんだ対岸の丘陵上に、共栄町石器散布地（縄文時代後半）、同一丘陵上の北西部に子安神社遺跡（弥生～古墳時代）などがある。調査は環状２号線建設工事の事前調査として、平成７年４～７月まで行った。調査区の位置する場所は、南北にのびる県道をはさんで東側丘陵上に位置する円通寺の「もとはか」と伝えられ、近世の村絵図において該当する位置には、「三昧(さんまい)（墓地の意）」という字名が記載されている。したがって、調査区には近世墓が遺存している可能性が考えられたため、道路建設工事に先立ち、県教委文化財課によって試掘調査が行われた。その結果近世墓の存在が確認されたため、㈶愛知県埋蔵文化財センターでは、県教育委員会の委託を受け、発掘調査を行うこととなった。発掘調査面積は、1,500㎡である。

**調査の概要**　調査区の基本層序は、表土の下に部分的に黒色土が客土として確認でき、さらに灰黄褐色極細粒砂が堆積し、基板層は赤褐色シルトである。

検出された遺構は、いずれも表土・黒色土（客土）の下から掘り込まれており、これらの層を機械掘削して取り除いた後、遺構検出作業を行った。調査区周辺は大部分が畑地として利用されているが、隣接地は竹林となっており、竹や笹の根が遺構検出面まで到達していて、検出作業を難航させた。遺構は土坑状の掘り込みが圧倒的に多く100基以上を数え、これに最近まで機能していたと思われる溝が３条加わる。これらの土坑の約４分の１は人骨または骨片が出土しており、残存状況の差はあるものの多くの土坑が墓を目的として掘り込まれた可能性が考えられる。

出土遺物は検出面及び遺構から、煙管や六道銭の可能性がうかがえる寛永通宝、近世陶磁器、土器などである。陶磁器については、瀬戸・美濃産が圧倒的に多く、常滑産が僅かに混じる。これらの出土遺物の時期は、ほとんどのものが19世紀以降のものと思われ、近世前・中期のものは少ない。したがって、調査地点が墓地として利用されたのは近世後期からの可能性が強い。この地については伝承として、明治末年または大正初年頃まで埋葬が行われていたと語られているが、これが事実であれば、約100年程埋葬地として利用されたことになる。

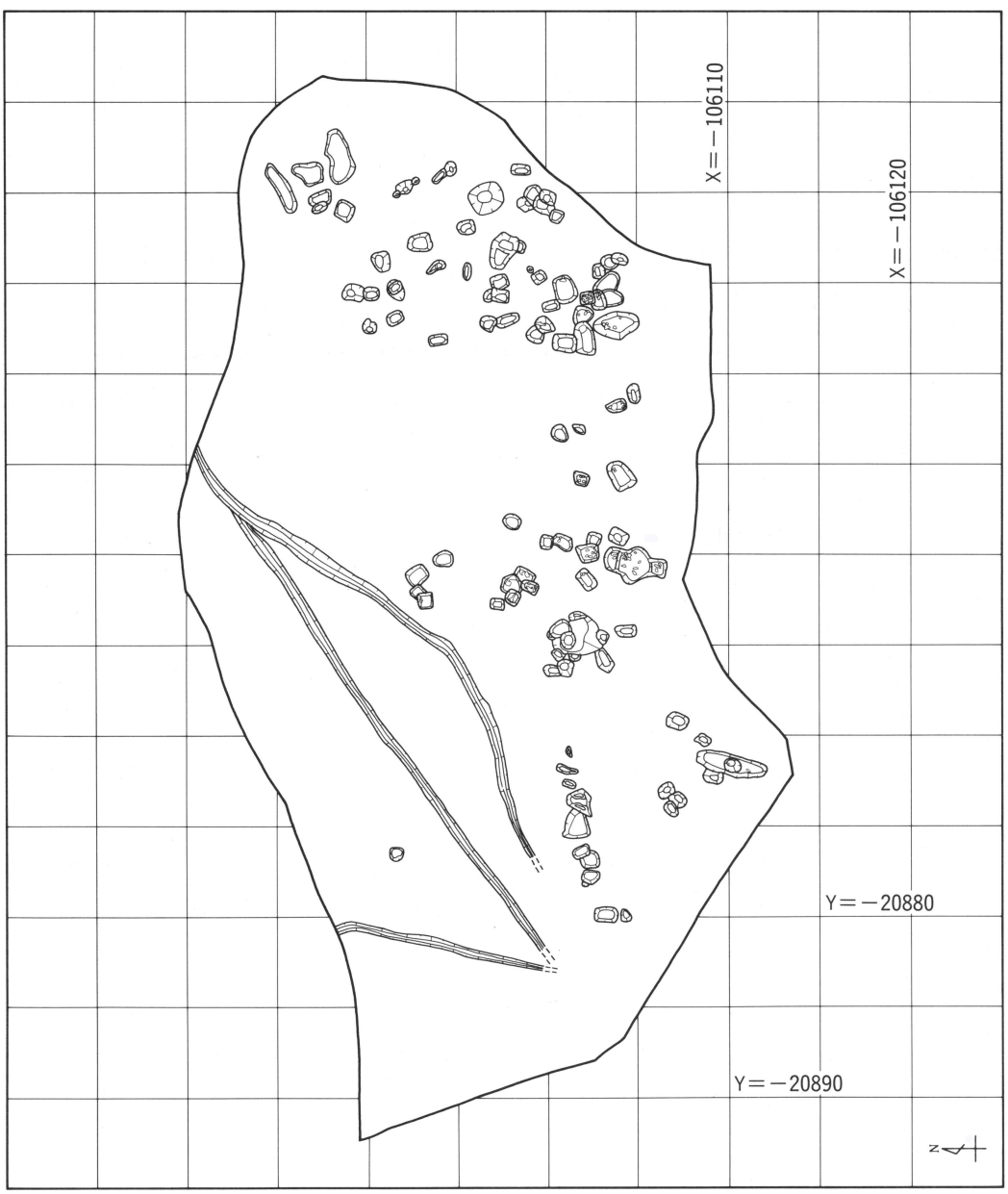
検出された遺構・遺物等については、現在整理検討中である。本遺跡の調査は、城郭・都市遺跡以外では調査事例の少ない近世遺跡調査例として、当該期の未解明な部分を検討するうえで一助となるであろう。　（松田　訓）




第１図　遺跡位置図（国土地理院１／５万）



第２図　人骨出土状況

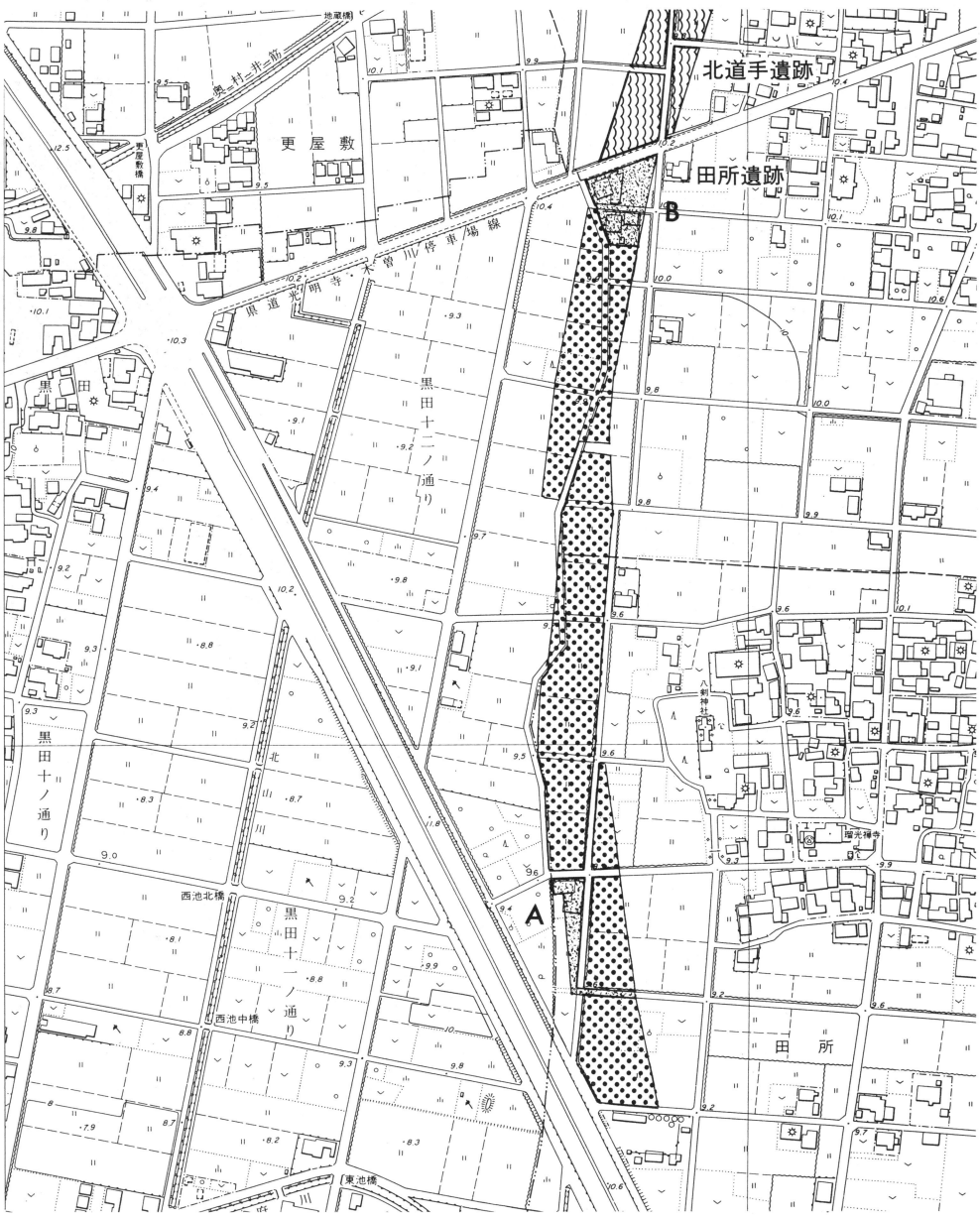



第３図　主要遺構位置図

# 田 所 遺 跡

**調査の経過**　田所遺跡は、一宮市大字田所・光明寺及び葉栗郡木曽川町大字黒田地内に所在し、木曽川により形成された標高９ｍ前後の自然堤防及び後背湿地上に展開している。

発掘調査は、東海北陸自動車道の建設に伴う事前調査であり、日本道路公団より愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成４年度から継続実施している。本年度は、最終調査区として2,300㎡をＡａ・Ａｂ・Ｂ区の３調査区に分割して平成７年９月より平成８年２月にかけて実施した。　（前田雅彦）




第１図　調査区位置図（１／5,000）

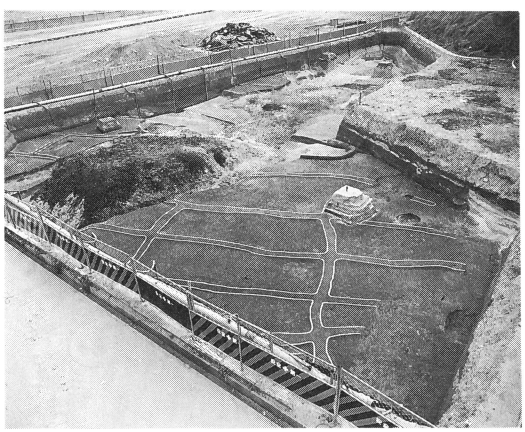
**Ａａ区の概要**

Ａａ区は集落を囲繞していたと推定される、いわゆる「田所大溝」を検出した92Ｃ区の南側に位置する。基本層序は耕作土、暗褐色シルト層（中世～近世の遺物包含層）、灰白色極細粒砂層、灰色シルト層（奈良時代遺物包含層）の順に堆積し、灰褐色粘土層（古墳時代の水田耕作土）に至る。

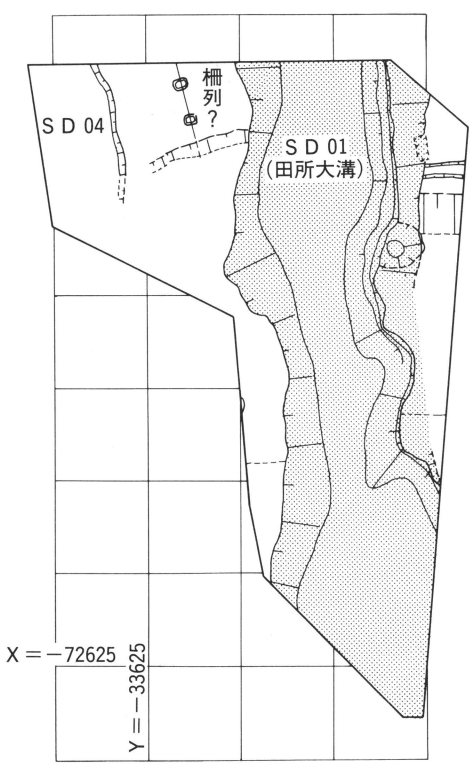
本調査区では極細粒砂層の上面において、大溝（ＳＤ01）をはじめとする中世の遺構を検出した。大溝の規模は検出面での幅約10m、検出面からの深さ約1.6mを測る。大溝はほぼ南北方位の方向をとるが、調査区の南側で若干東へと振れる。堆積した粗粒砂から、大溝は激しい水流により埋没したとみられ、粗粒砂層の下層から出土した15～16世紀代の遺物により大溝の埋没時期を知ることができる。



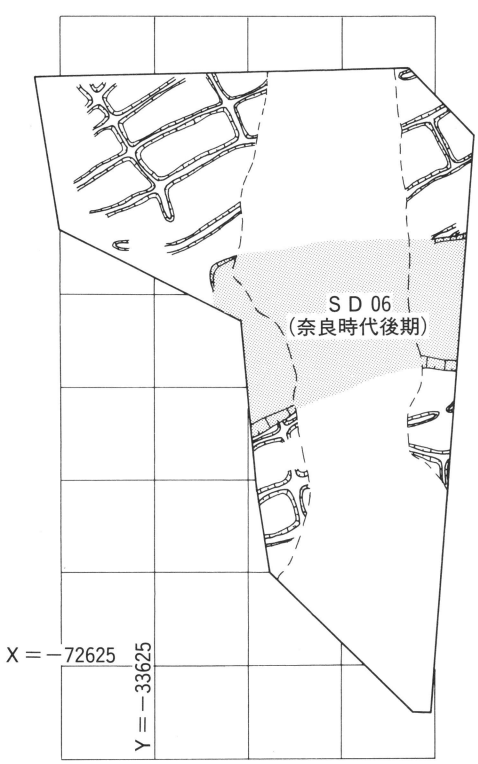
Ａａ区全景（中世）



Ａａ区全景（古墳時代水田）




第２図　Ａａ区中世遺構配置図（１／400）




第３図　Ａａ区古墳時代～古代遺構配置図（１／400）

他の中世の遺構としては、青磁破片や、13～14世紀の灰釉系陶器片等が出土した溝（ＳＤ04)、大溝の西側に平行した土坑列（柵列か？）等がある。

大溝は93Ｊ区で途切れることなど、その性格については不明な点が多い。大溝の堆積構造など、事実関係をいま一度整理し直すことが不可欠であろう。また、近い将来に市教育委員会等によって集落内部や集落の北側及び東側における学術的な調査が行われることにも期待するものである。

また灰褐色粘土層においては、一辺が２～５ｍを測る小区画の水田を検出した。調査面積が小さかったため、明確に時期を決定づける資料を得るには至らなかったが、耕作土中より出土している土師器やこれまでの調査所見から古墳時代後半期に属すると考えられる。

**Ｂ区の概要**　Ｂ区はＡａ区が立地する後背湿地より北側の自然堤防上に立地し、中世期とされる「墳墓堂」を確認した92Ｆ・Ｇ区の北側に位置する。また、古墳時代前期に属する多くの遺構・遺物を検出した北道手遺跡とは調査区北側の県道を挟んで接している。

本調査区は耕作土を除去するとただちに黒色土となり、その下層には粗粒砂が堆積する。遺構検出は黒色土の上位と下位でそれぞれ行い、黒色土上位では主に戦国期の遺構を検出した。戦国期の遺構は溝が中心となるが、多くは明確な方向性を有さない溝であり、埋土はシルトと粗粒砂の互層からなることから、明らかに水流の痕跡が認められる。遺物量も希薄である。

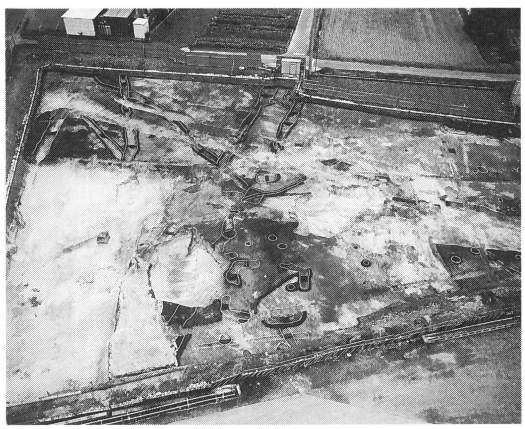
黒色土の下位で検出された遺構は、出土遺物もごくわずかで時期を決定しがたいが、概ね13～14世紀に属すると考えられる。墳墓堂を中心とした墓域に関する遺構としては、墓域の北限を画していたと考えられていた溝（ＳＤ07)、４本のＬ字形の溝（ＳＤ25～28）による方形の区画、少数のピットが挙げられるのみで、遺物の出土もほとんどみていないことから、細かなことは不明と言わざるをえない。

「墳墓堂」自体に関しては、本調査区で墳墓堂を方形にめぐるとされる溝の一部（ＳＤ01）を検出したが、戦国期の遺構よりも時期が下ることを確認した。しかし、溝には複数回の掘削が認められ、戦国期以前の堆積層である黒色シルト質粘土層からは14世紀の灰釉系陶器などが出土した。また、戦国期の溝（ＳＤ03）より五輪塔の一部が投げ入れられたような状態で出土している。これらの事実を踏まえながら、墳墓堂と推定された建物跡がどの時期に帰属していたのかを明らかにし、中世の墓域に関連する遺構がいかなる変遷過程をたどったのかを忠実に復原していく作業が今後は必要とされよう。

なおＢ区では、北道手遺跡に関係すると思われる遺構は確認できなかったことから、北道手遺跡との境界は県道部分、もしくはそれより北側の調査区（93Ｃ・Ｄ区）に位置するものと考えられる。　（早野浩二）



B区全景（第Ⅰ遺構面）



B区全景（第２遺構面）




第４図　B区遺構配置図（１／400）

# 大毛沖遺跡

**調査の経過**　大毛沖遺跡は、一宮市北西部から葉栗郡木曽川町にかけて所在し、木曽川によって形成された標高９ｍ前後の自然堤防および後背湿地に広がりが認められる古代から中世の遺跡である。

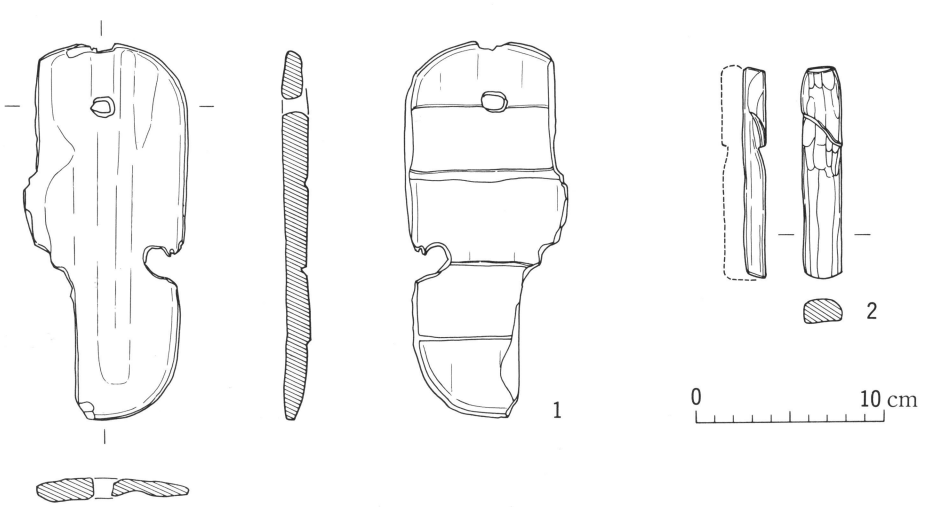
発掘調査は、東海北陸自動車道の建設に伴うもので、日本道路公団および愛知県土木部より愛知県教育委員会を通した委託事業として平成５年度より実施しており、平成５年度は17,112㎡、平成６年度は20,100㎡、の調査が行われた。今年度は調査面積の残り１ヶ所で国道22号線の東側の95Ａ区400㎡を発掘調査した。

**調査の概要**　今年度の調査区は、大毛沖遺跡の北端部、昨年度の調査区94Ｈ区の北西端に位置する。大毛池田遺跡に一番近い調査区でもある。今年度の調査において、上層では中世後半から戦国にかけての遺構群（溝３条、井戸１基）と遺物が、下層では古墳時代前期の水田跡を検出した。

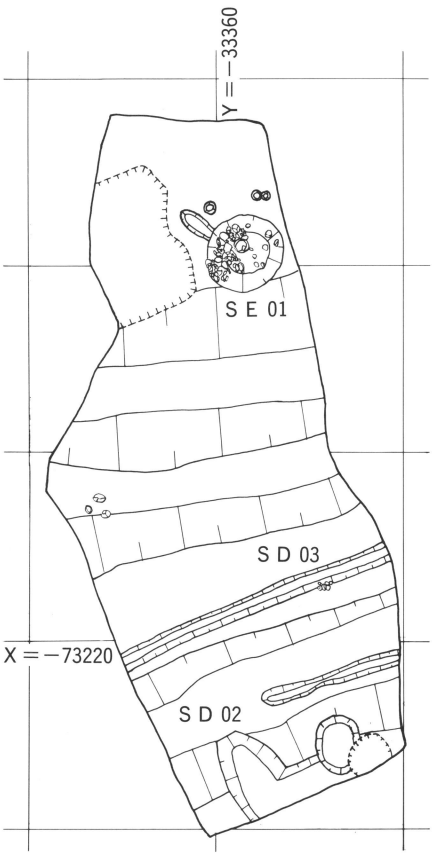
中世後半から戦国期にかけての遺構を検出したことにより、この時期の遺構が95Ａ区まで広がることを確認したが、今回の調査で検出した溝（ＳＤ01、02）の規模から、大毛池田遺跡の居館跡との関係が注目される。ＳＤ02は調査区の南側を南西方向に斜めに横切っており、最大幅３ｍ80cmを測る。埋土の上層では円礫が多く、円礫に混じり中世から戦国期にかけての遺物が出土した。下層からは箸、下駄、陽物、底板、等の木製品が出土した。下駄(1)は、一木から台部と歯部を刳る一木下駄で、連歯下駄と呼ばれており一部に焦げた痕があり、下駄が廃棄され燃やされたことを示している。この他に端部が焦げた小さな木片が数点出土した。陽物(2)は半裁されたものが出土している。

また、古墳時代前期の水田跡を95Ａ区の南半部で検出したことにより、大毛池田遺跡に見られる古墳時代前期の水田跡が大毛沖遺跡までひろがっていたことを示すことにもなった。

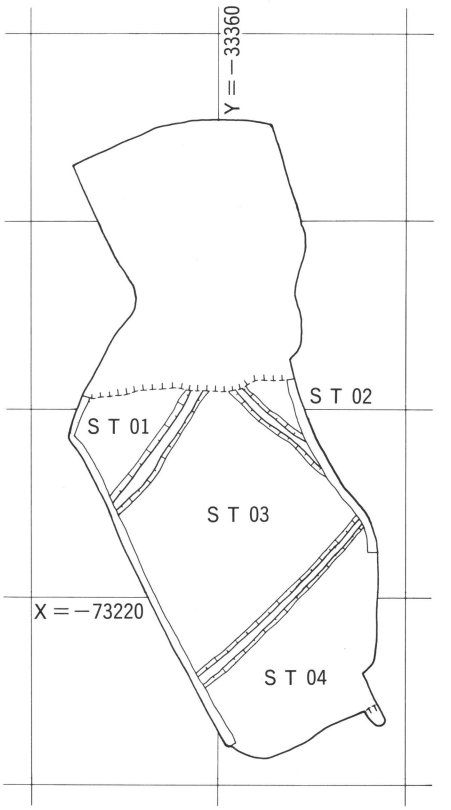
（小澤一弘）



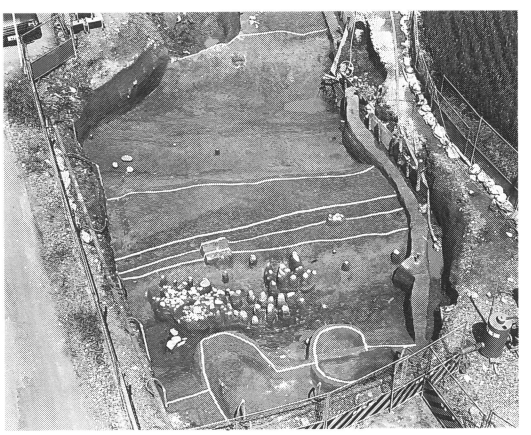

ＳＤ02出土木製品実測図



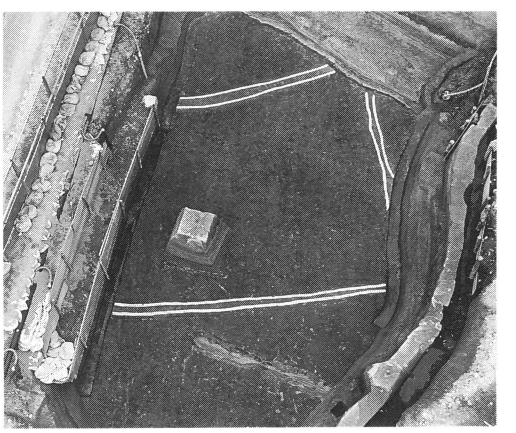

95A区上面遺構全体図（1：200）




95A区下面遺構全体図（1：200）



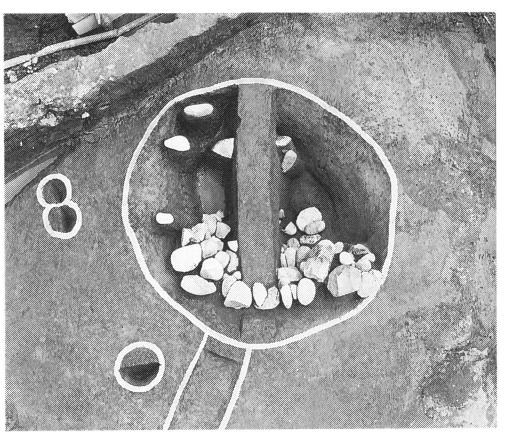
95A区上面全景　南より



95A区下面全景　南より



SD02木製品出土状況



SE01全景

# 大 毛 池 田 遺 跡

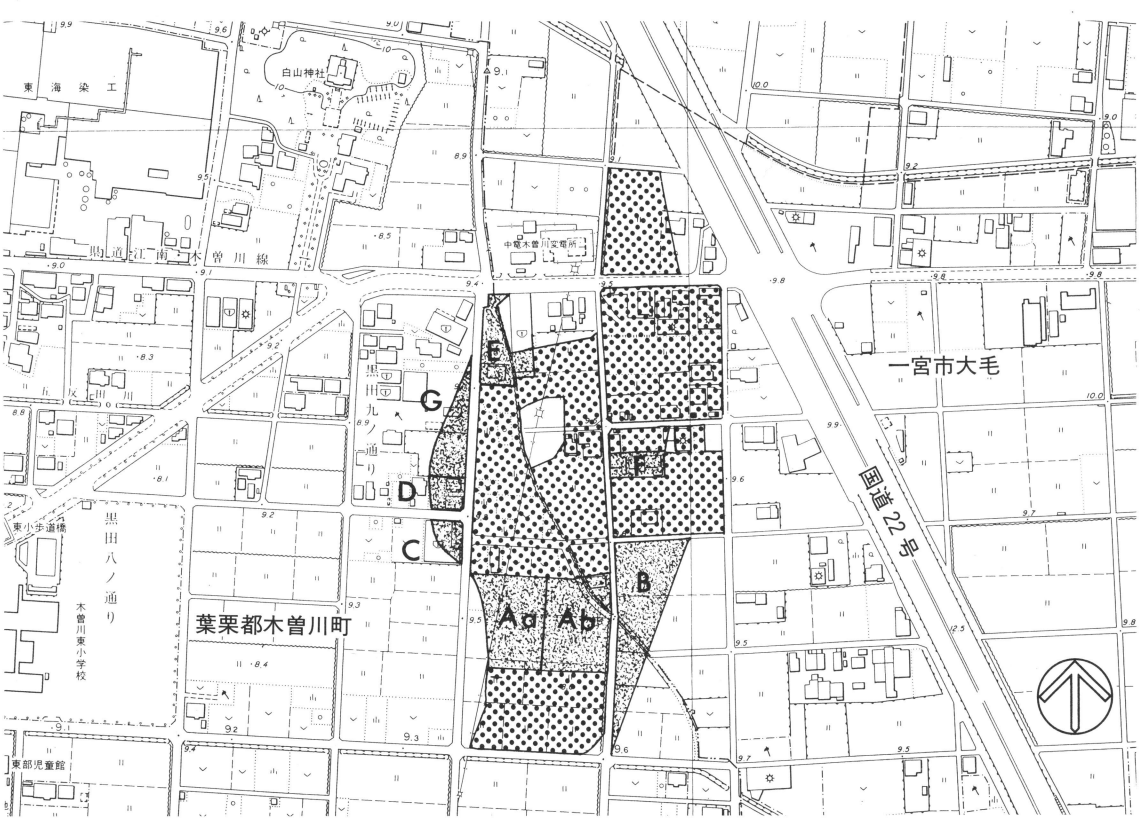
**調査の経過**　大毛池田遺跡は、一宮市北西部から葉栗郡木曽川町北東部にかけて所在し、木曽川により形成された標高９ｍ前後の自然堤防及び後背湿地上に展開しており、古墳時代から戦国期におよぶ複合遺跡である。

発掘調査は、東海北陸自動車道の建設に伴う事前調査であり、日本道路公団より愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成５年度から継続調査している。本年度は13,400㎡をＡ～Ｇ区の７調査区に分割して平成７年４月より平成８年２月にかけて実施した。

**調査の概要**　発掘調査によって確認した遺構・遺物は、古墳時代、奈良時代、鎌倉・室町時代、戦国期の４時期に大きく区分できる。遺跡の基本層序は、概ね１層：耕作土、２層：暗灰褐色シルト、３層：暗灰黄褐色シルト、４層：灰褐色粘土、５層：暗紫褐色～黒色粘土、６層：灰オリーブ粘質土、７層：灰褐色中～粗粒砂の様相を呈している。戦国期～古代の遺構はそれぞれ２層上位で、古墳時代の遺構は４層または５層上位で検出した。

今年度の調査の成果としては、一昨年度から検出されている古墳時代前期の水田跡が確認できたこと、古代の旧河道とそれに沿うように北東から南西にかけてほぼ並行に走る４～５条の大溝群（幅８～10m・深さ２ｍ前後）を検出したことなどがあげられる。溝は７世紀前葉から９世紀にかけてのもので、その規模等からみて濃尾平野の治水技術の歴史を考える上で貴重な資料となろう。

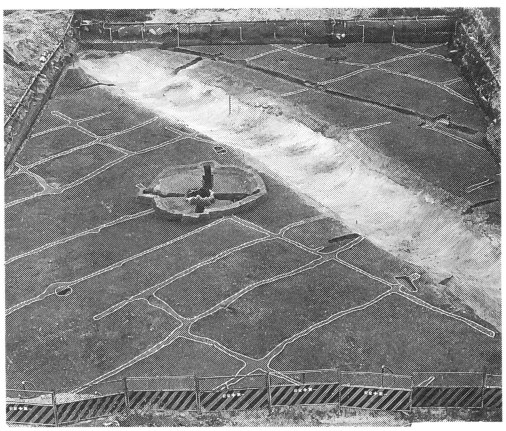
（前田雅彦）




第１図　調査区位置図（１：5000）

**遺跡の概要**　今年度調査で確認された遺構・遺物の時期は、以下のように大別できる。A期（古墳時代）、B期（飛鳥～平安時代前期）、C期（鎌倉時代～室町時代）、D期（戦国時代）である。A期では調査区のほぼ全体にわたって水田跡が認められたが、一部水田化されていない帯状の微高地では、大量の土師器を含む遺物包含層が確認された。B期は、一定方向に並行して大規模な溝が次々と掘削された時期である。溝の方向に影響したと思われる旧河道の一部も確認された。C・D期には周辺は集落となっており、各時期の生活の痕跡や道状の遺構などを確認した。

**A期の遺構・遺物**　弥生時代に遡る明確な遺構は認められなかったが、大型蛤刃石斧、石鏃数点のほか弥生中期の甕・壺などの小片がAb区・B区の古墳時代遺物包含層より出土している。



F区　水田全景

古墳時代では、A・B・C・D・F・G区で第5層黒色粘土層（Ⅳ－b）を基盤とする古墳時代前期水田跡（下層水田）の小区画が展開し、確認された面積はこれまでの調査分と併せて約30,000㎡にも達する。また、隣接する大毛沖遺跡の一部分、門間沼遺跡でもほぼ同時期と思われる水田跡が確認されており、旧木曽川の自然堤防の縁辺にかけて展開した広大な水田耕作地帯の景観が想定される。

第5層黒色粘土層の上層、洪水性の堆積層で覆われた上層水田（第4層灰色粘土層、Ⅲ－b）はAa区の一部でのみ畦が検出された。Aa区東側からAb区、B区にかけての部分では、水田化されなかった微高地が広がり、上層水田域は北東から南西に延びるこの微高地の西側縁辺に沿うように谷状の細長い範囲に展開するものと思われる。

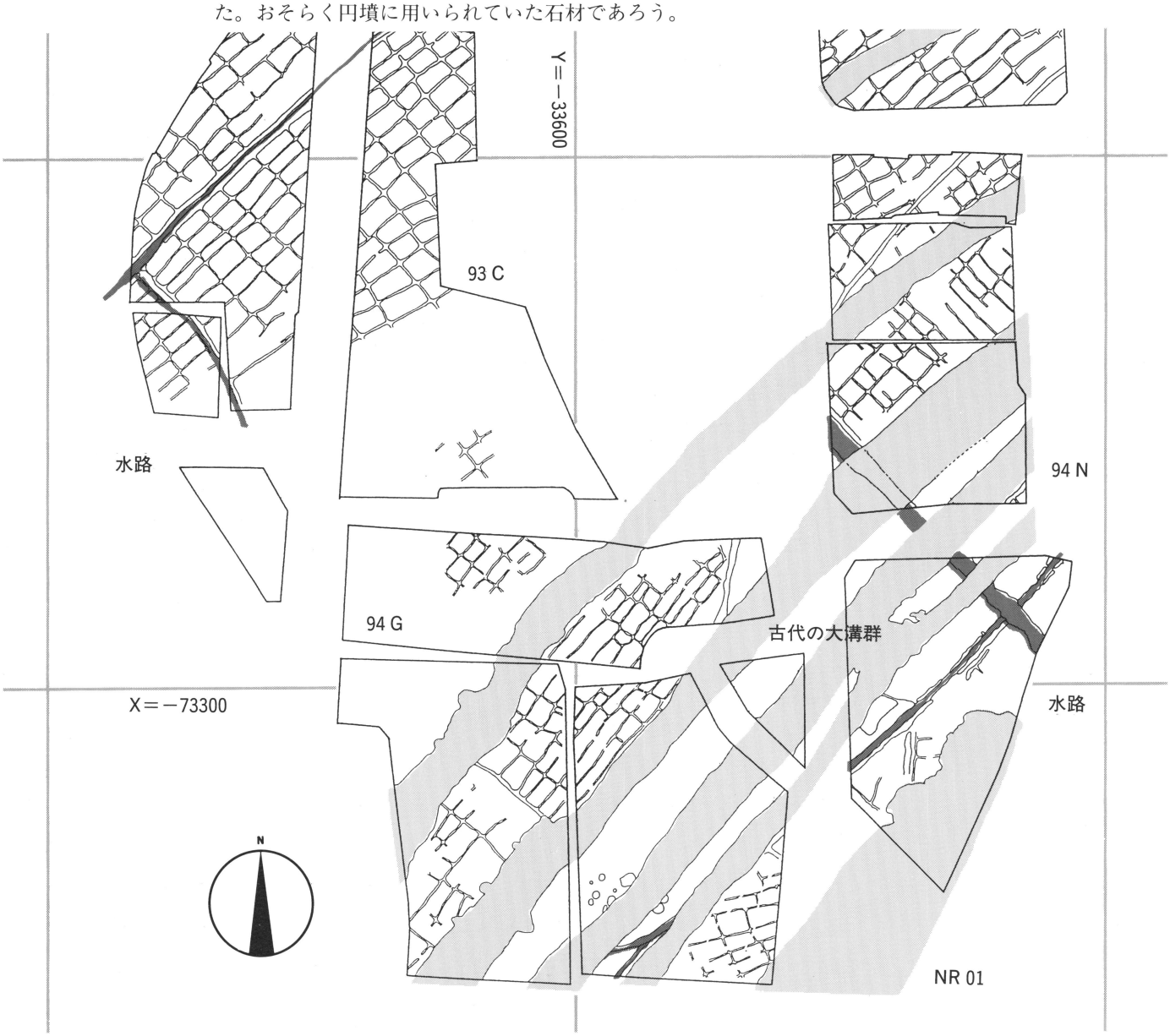
微高地部分は、幅20m、長さ60m前後の細長い範囲に認められるが、中心部大半は古代の大溝（SD51、52）に削られていた。水田耕作地との明かな境界や遺構はみられず、基本的には第4層、第5層が攪拌されて包含層を形成しているという状況であった。出土遺物は、上層水田を覆う洪水性の堆積層を除去した暗褐色粘土層（Ⅲ－a）表層では、宇田型甕を中心に、また上位から下位まではS字甕（D類）、高杯、短頸壺など廻間Ⅲ式期後半～松河戸Ⅱ式期の土師器を主体に検出した。いずれも須恵器は含まれていない。下層の黒褐色粘土層（Ⅳ－a）直上からは、手焙形土器1個体ほかS字甕（C，D類）、ヒサゴ壺、柳ケ坪型壺などのほか若干のパレス壺を含む廻間Ⅲ式期の遺物が主体となっている。黒褐色粘土層（Ⅳ－a）を除去したベース面で確認できたこれらの時期の遺構には、土坑10数基と、ピット、溝があり、うち土坑数基からは良好な一括資料を得ることができた。

また、この包含層が連続するAb区トレンチ断面の数箇所で竪穴状の落ち込みと炭化物の層、ピットなどが認められた。残存している微高地部分が狭く、特にここでは上・下層が大きく攪拌され全体が暗褐色を呈しており、明確なプランの検出が困難であるが、遺物

の分布状況からも竪穴住居を含む複数の時期の遺構が重複しているものと思われる。水田耕作にかかわった集落の一部であろう。遺物には須恵器は含まれず、宇田型甕、S字甕、高杯など土師器類がまとまって出土した。

この遺物包含層と上下2層の水田との関係については、現在確認をすすめている段階であるが、Ⅲ-a層とⅢ-b層、Ⅳ-a層とⅣ-b層がそれぞれ平行に連続して認められるとすれば、上層水田の廃絶時期は、松河戸Ⅱ式期を下限とし、下層水田の耕作時期は、これまで考えられてきた廻間Ⅲ式期後半を若干遡る可能性も想定される。

そのほかA a区では、円墳1基を検出した。上部はすべて削平されており直径13m、幅1.5m、深さ約30cmの周溝のみ確認された。付近からは7世紀の須恵器高杯が出土したほか、8世紀初めに埋積した大溝（SD50中層）より直径30～40cm前後の河原石40数個が出土した。おそらく円墳に用いられていた石材であろう。




第2図　池田遺跡古墳時代水田遺構図（1：1200）

**B期の遺構・遺物**

B期の主要な遺構には、F・B・A区にかけて連続する数条の溝、旧河道がある。溝は北東から南西方向に延びる幅８～10m、深さ2.0m前後の大溝を含み、大毛沖遺跡に近い東側よりＮＲ01・ＳＤ51・ＳＤ52・ＳＤ55・ＳＤ50がほぼ一定の間隔をおいて並行して直線状に延びる。旧河道で確認できたのは右岸のみであり、中世の早い段階まで大毛沖遺跡との間を隔てていたものと考えられる。

ＳＤ51・52は、A区古墳時代遺物包含層を大きく削り込み、大量の土師器類が検出されたが、溝に伴う遺物としては僅かに７世紀半ばの須恵器蓋杯や土師器甕などがみられる程度である。ＳＤ55は深さ50cmと最も浅いもので、やはり７世紀の須恵器数点が出土したのみである。ＳＤ50の遺物は出土量・器種ともに比較的多く、完形品も数点含まれる。７世紀後半～８世紀半ばの須恵器類のほか９世紀代の灰釉陶器杯、平瓶、浄瓶、緑釉陶器椀などが出土している。ＳＤ50は昨年報告した「美濃」刻印のある須恵器を出土した溝に連続し、埋積の状況や出土遺物の傾向などは前年調査時と同様であった。

これらの大溝群は、一部が調査域南西方向の門間沼遺跡においても確認されている。これらの溝の総延長や深さは、ともに当時としてはかなりの規模の土木事業であったはずである。いずれも旧河道の西側に沿うように掘削されており、河川の増水あるいは氾濫に備えた水防の為の施設として掘削されたものと思われる。

**C・D期の遺構・遺物**

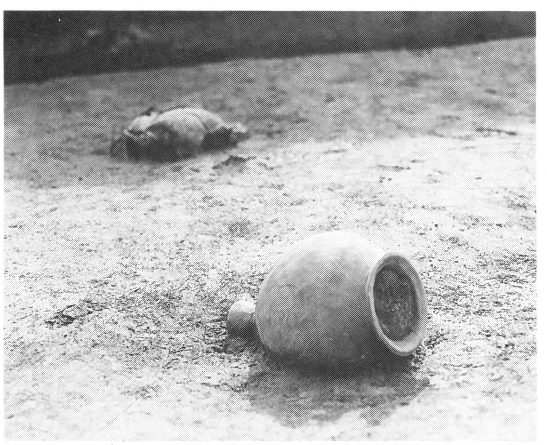
C期の遺構は、大きく前期（12世紀後半～13世紀）と後期（14世紀）に分けられる。C・D期の遺構は全般的に希薄であったが、それぞれ屋敷地の痕跡を示す井戸や溝、ピットなどを検出した。

F区は、昨年度調査でみつかった中世～戦国期居館跡の西に隣接する部分であったが、D期の遺構は認められなかった。C期では小規模の区画溝、井戸などがあり、東西にのびる幅1.5mの溝からは大量の礫とともに14世紀代の灰釉系陶器のほか瀬戸、常滑産の陶器類がみられる。これより南のB区では、旧河道が埋没した後「方形土坑」が集中して掘削され、遺物は検出されなかったものの、層位より中世には墓域の一部であったと思われる。

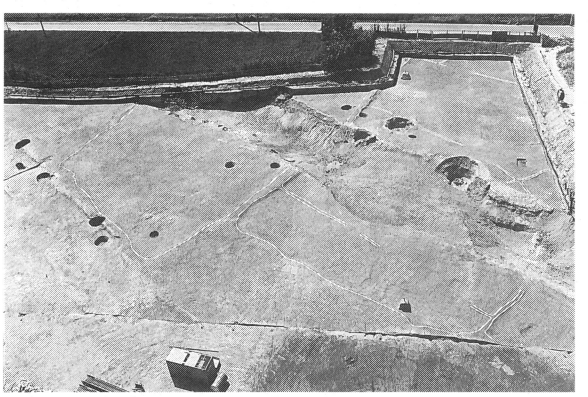
居館跡南西に位置するA区では、削平の比較的少ない調査区西側で井戸、溝、建物跡などを検出した。うち井戸１基では13世紀灰釉系陶器のほか貯木されたものであろうか数本の丸太材が重なって出土し、その下で曲物を検出した。この井戸が廃絶した後、D期にはC・D区より続く道の側溝と思われる幅20cm程度の２条セットの溝が幾度も掘削され、両側に井戸あるいは区画溝が展開する。側溝状の２条の溝に沿って３×２間の掘立柱建物跡を検出した。これらピットには、すべて礎板が用いられていた。

D期ではE区からB区へと続く溝があり、灰釉系陶器椀、皿、瀬戸・美濃陶器など比較的多くの遺物を出土し、16世紀頃まで溝が機能していたと考えられる。この溝は、現在の行政区画では葉栗郡木曽川町と一宮市の境をなす水路に沿って延び、ここは明治14年地籍図においても黒田村・大毛村の村境と推定されている。少くとも16世紀にさかのぼる境界が、ここに想定されそうである。（武部真木）

本年度調査区は、大まかに東側よりＦ・Ｂ区3,800㎡、Ａ区5,300㎡、Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｇ区4,300㎡のブロックに分けられる。この東西約175m、南北約250mの範囲では、下層水田跡がほぼ全体に広がるのに対して、上層水田は帯状に部分的に分布する。これは谷状の低地に営まれたものであろうか。古代の大溝は、最も深い部分で検出面より2.2m、幅10mを測る。この部分で溝は巨大な土が連続するような形状を呈しており、作業の工程を推測させるものとして興味深い。大溝と大溝の間では、遺構は検出されなかった。







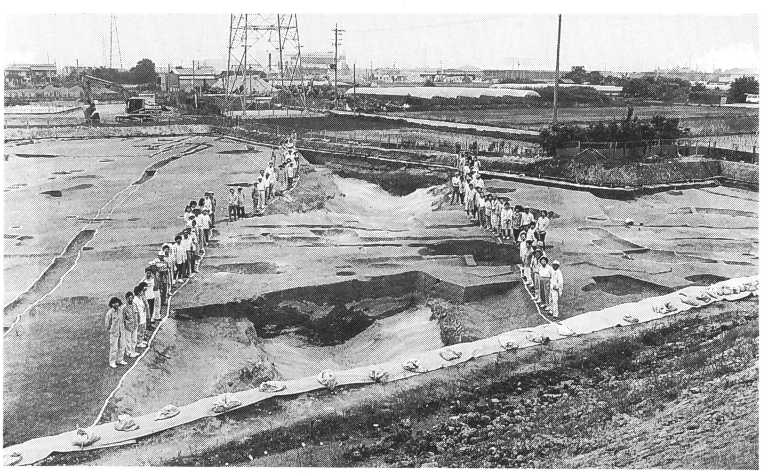
上左　包含層Ⅲ直上
　　遺物出土状態（Ab区）
上右　P51　遺物出土状態
　　（Ab区）
左　上層水田（Aa区）

写真中央が大畦

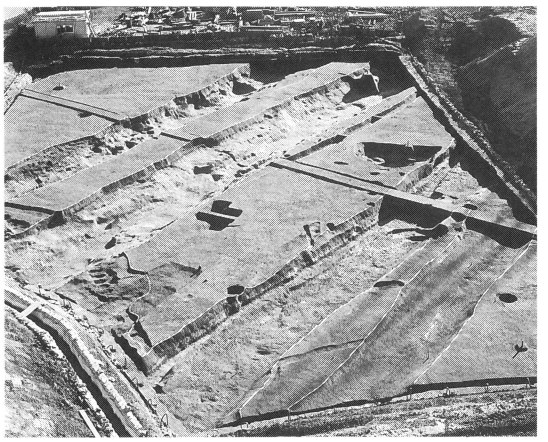


左　円墳（Aa区　北西辺）



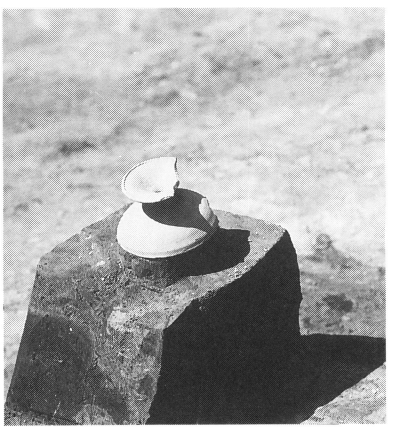



上　古代の大溝群
　右端が旧河道
　（B区、Ab区）
左　SD50　北から
　（Aa区）











左上　古代の大溝群　北から
（Ab区）
中　旧河道　南から（Ba区）

右上　SD51、52　南西から（Ab区）
中　旧河道出土遺物（Ba区）
SD55出土遺物（Ab区）

左下　戦国期溝
SD01（E区部分）

右下　戦国期溝、南西から
（Ba区部分）












左上　中世屋敷地区画溝（Ｆ区）
　中　中世廃棄土坑（Ｆ区SX02）
　下　戦国期溝遺物出土状況（Ｃ区、SD01）

右上　井戸　下部曲物（Ｅ区）
　中　井戸　タテ板組、曲物（Ｆ区）
　下　井戸　桶組（Ｅ区）

**まとめ**　本年度調査で古墳時代については、水田以外のまとまった遺構が初めて確認されたことにより、これまで不明であった水田遺構の開田から埋没時期、周辺水田地帯の変遷について更に詳細な解釈が可能となった。

７世紀半ばには掘削が開始された古代の大溝群は、大毛沖遺跡・門間沼遺跡を含めた範囲で確認されている旧河道の影響を大きく受けており、この流路の遷移とあわせて掘削時期、溝そのものの機能を考える必要があろう。

# 門 間 沼 遺 跡

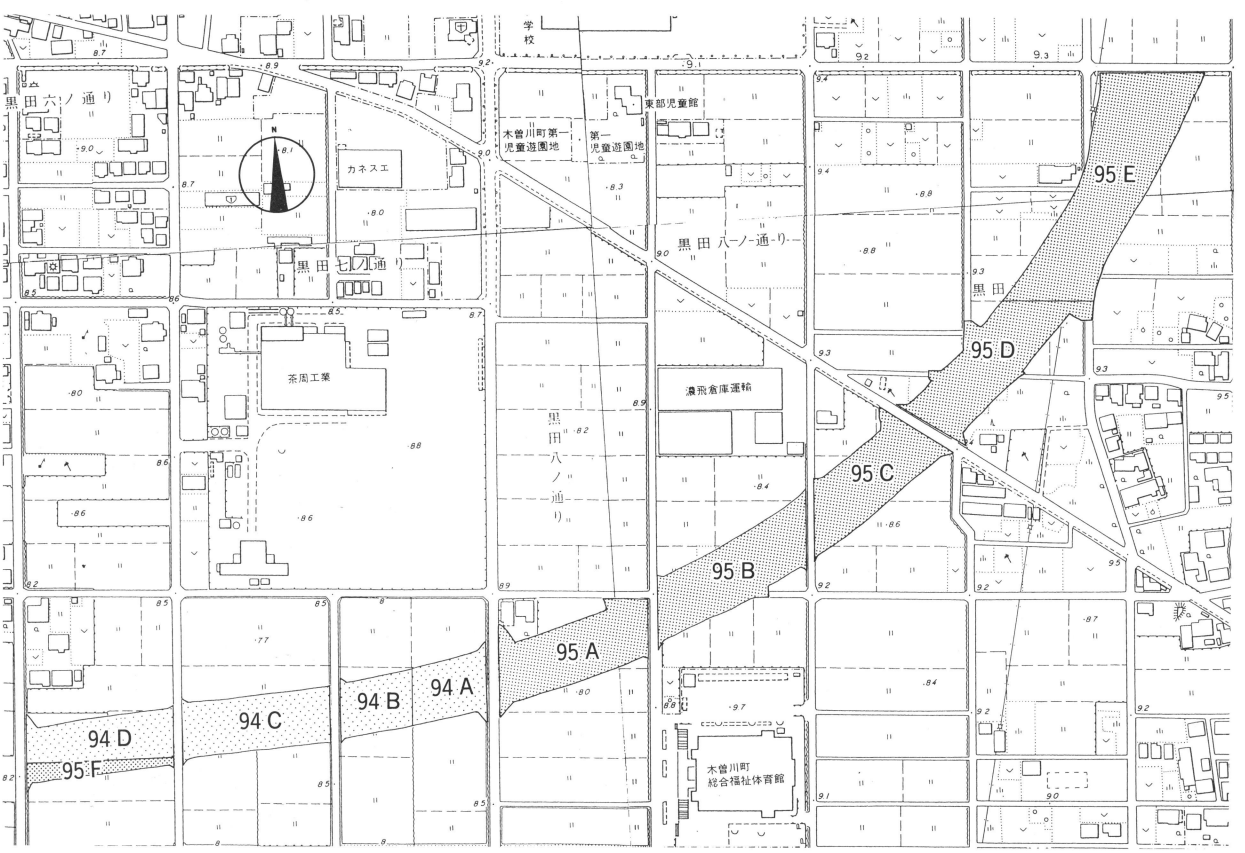
**調査の経過**　門間沼遺跡は、葉栗郡木曽川町大字門間字沼に所在する。本遺跡は、木曽川によって形成された標高８～９ｍの微高地上に立地している古墳時代から中世にかけての複合遺跡である。

発掘調査は、東海北陸自動車道の建設に先立つもので、日本道路公団・愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、昨年度から継続的に実施し、今年度は、４月より28,440㎡を発掘調査した。

**調査の概要**　本遺跡の調査にあたって、昨年度に調査した94Ａ区の東からＡ区、Ｂ区、Ｃ区、Ｄ区、Ｅ区、94Ｄ区の南をＦ区とし、調査区を６区分して、Ａ区とＢ区、Ｃ区とＤ区をセットにして、Ａ区から順番に調査を進めた。

本遺跡の遺構は、大きく古墳時代前期、古代、中世の３時期に区分される。古墳時代前期の遺構としては水田跡が、古代の遺構としては竪穴建物群や大溝が、中世の遺構としては大型の方形土坑や井戸が検出された。古墳時代前期の水田跡や古代の大溝は池田遺跡に続くものと思われる。

以下、古墳時代前期、古代、中世の時期別に調査成果を報告する。　（神谷知幸）




第Ⅰ図　調査区位置図（１／5000）

**古墳時代の水田**　昨年度の調査では、標高８ｍほどの微高地上に位置する古墳時代の集落跡(３～６世紀)と円墳群(５世紀末～６世紀)を検出し、その西の低地で古墳時代前期に属す水田の一部を確認した。

本年度の調査区は、昨年度の調査区の東に位置し、94Ａ区に隣接する95Ａ区では、微高地の東端が確認された。そこで検出された６世紀代の建物の一部が、古墳時代前期の水田と重複していることから、微高地縁辺のかなり高い部分から水田域が始まっていることが明らかになった。水田の標高は7.6m～7.7m程度で、黒色シルトを基盤とし、調査区のほぼ全域に展開することが確認された。



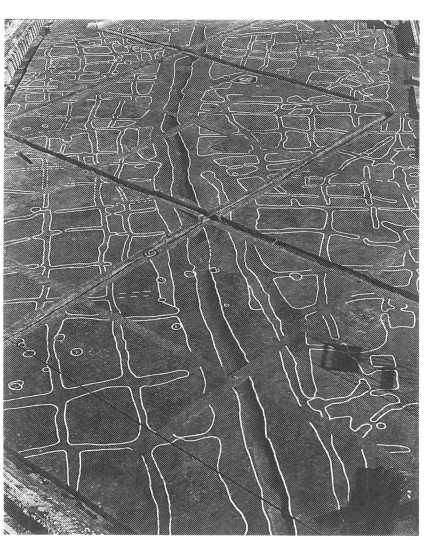
Ｂ区全景　北東から

小区画を構成する畦畔は、幅30cm程度、高さ５cm未満である。地形により区画の規模や形を変えており、一筆あたりの面積は一様ではない。が、方向性はほぼ一定しており、等高線に沿って規格的に区画しようという意図がうかがえる。水口も検出されている。

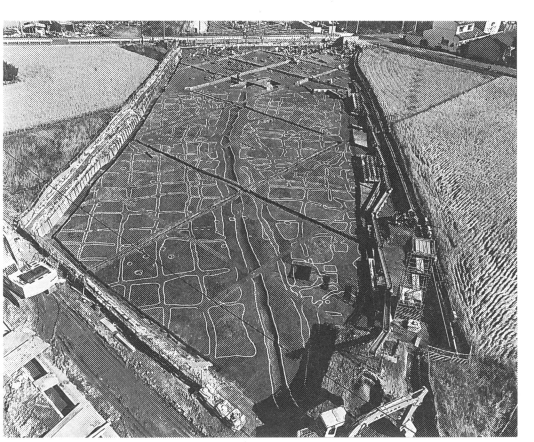
大区画を構成するのは、幅３ｍ内外、高さ20cm以上の規模をもつ畦畔で、これを「大畦畔」と呼称する。両脇に、造成時に土を掻き上げた痕跡と見られる窪地を伴っている。Ａ・Ｂ区では、「道」としての機能も想定すべきであろう。Ｃ・Ｄ区では、大畦畔間に挟まれた幅110cm程度、深さ20cm程度の溝を検出しており、大畦畔と用水路が一体のものになっている。一定の間隔で大畦畔が並ぶ様相もうかがえ、大区画が計画的に造成されている可能性も考えられる。

本年度の調査区で検出された水田は、隣接する大毛池田遺跡の「下面水田」に対応するものと考えられる。この水田は、堆積状況からみて、古墳時代前期（４世紀前半）には洪水によって埋没した模様である。なお、大毛池田遺跡で言う「上面水田」は、Ｂ・Ｄ区の一部でその存在が認められた。古墳時代中期（５世紀前半）に洪水により埋没したと思われるが、一部を検出したにとどまった。

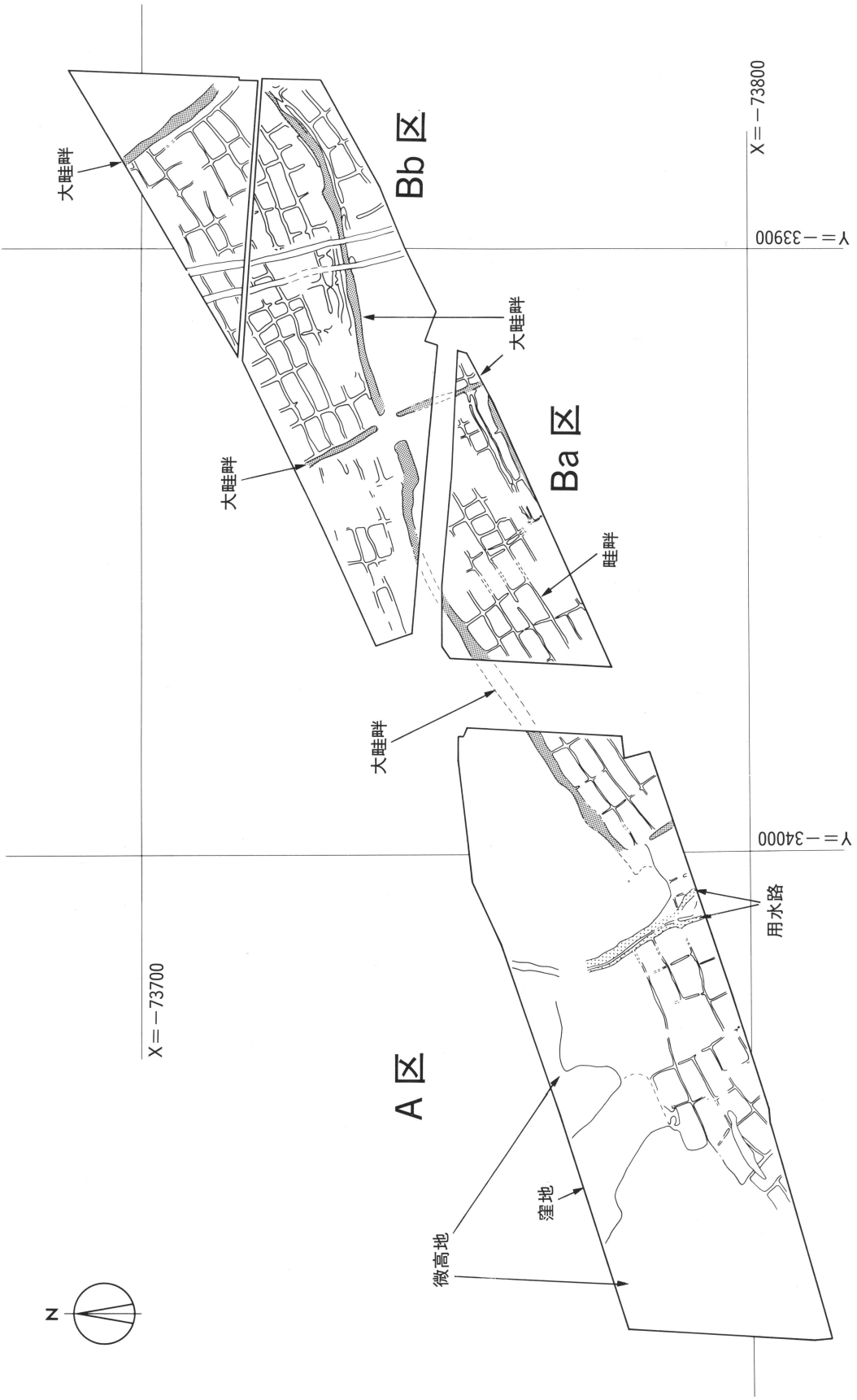
（西原正佳）



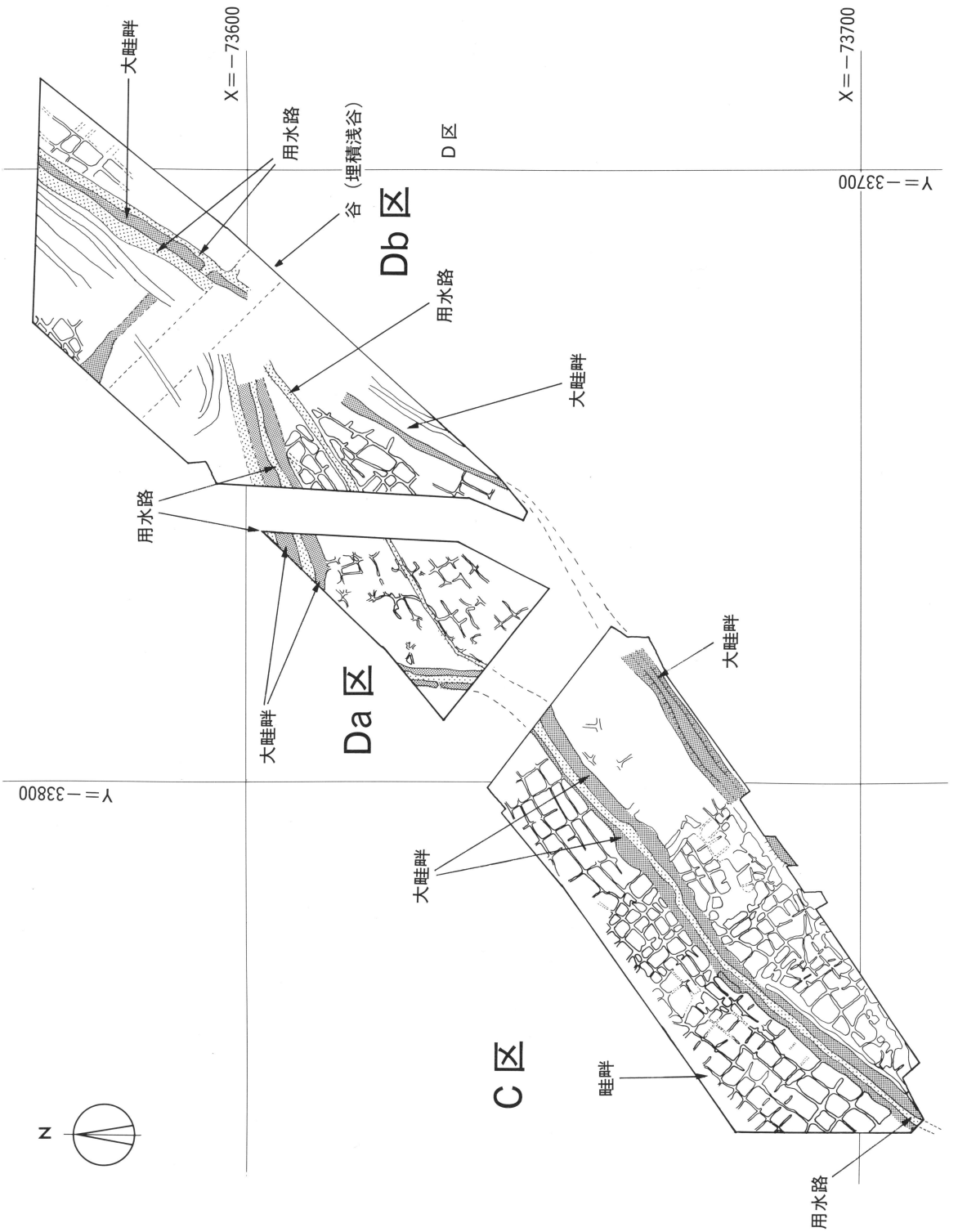
Ｃ区　一体となった大畦畔と用水路



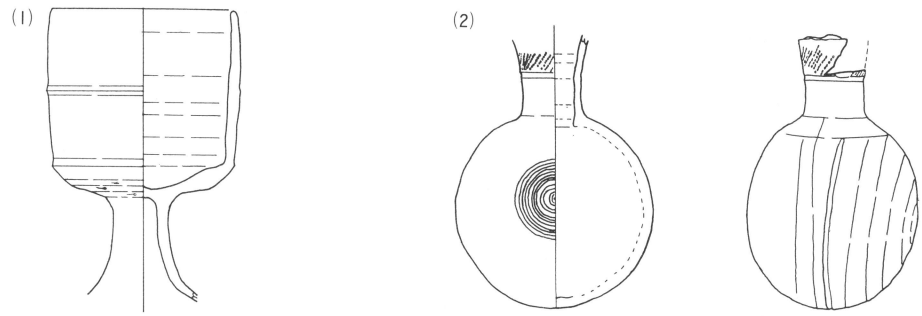
Ｃ区全景　南西から



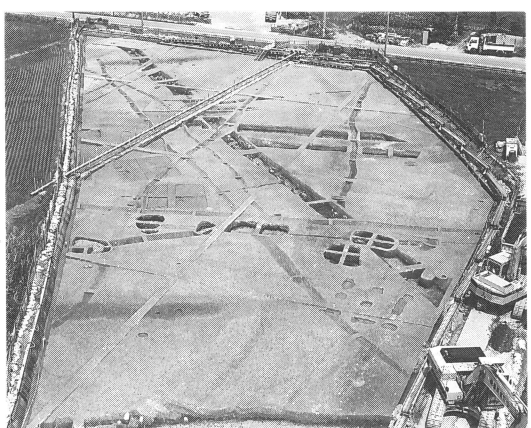

第２図　Ａ・Ｂ区古墳時代遺構図（１：1000）




第３図　Ｃ・Ｄ区古墳時代遺構図（１：1000）



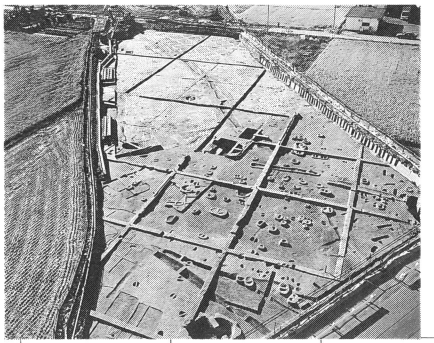

溝１出土遺物　S＝1/4



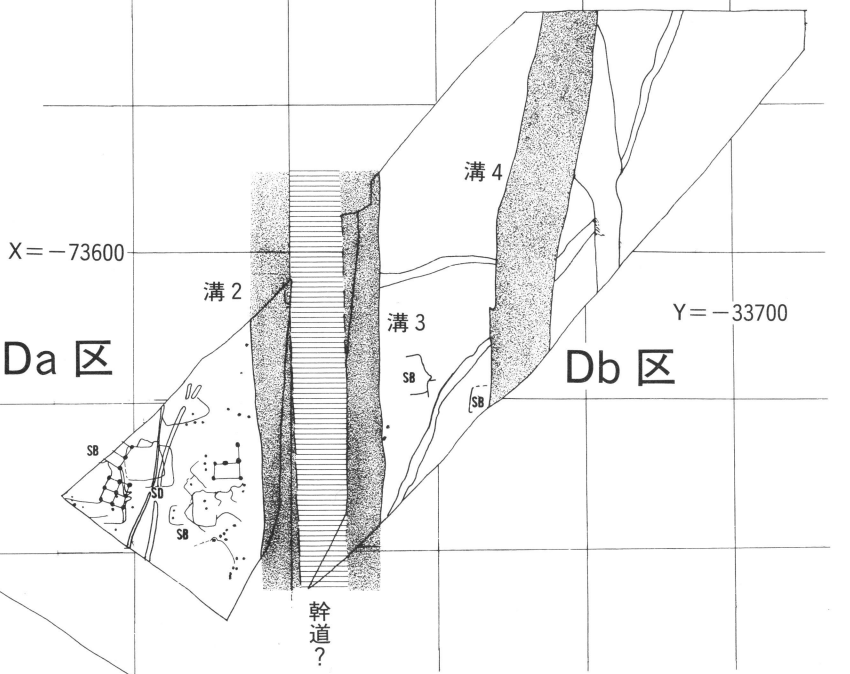
Ｂｂ・Ｂｃ区　完掘状況（古代Ⅰ）

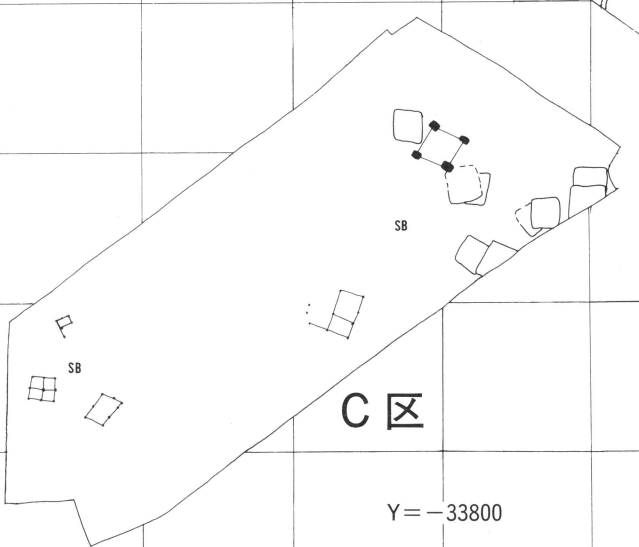


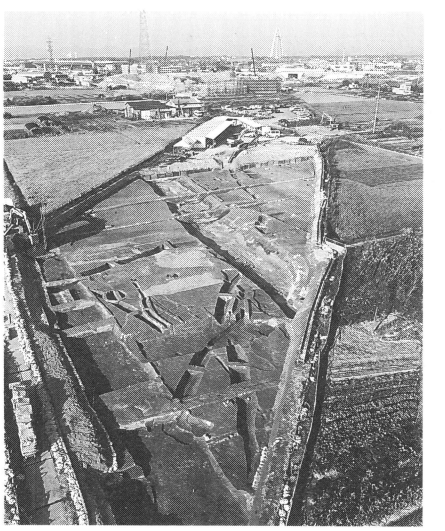
A区東部　井戸出土状態（古代II）



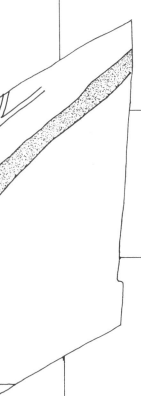
C区北東部　完掘状況（古代Ⅰ）

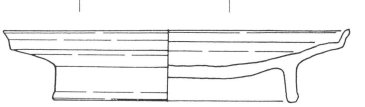


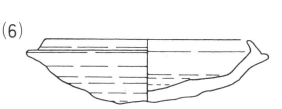



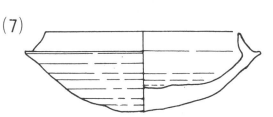



Pb区　溝3・4完掘状況

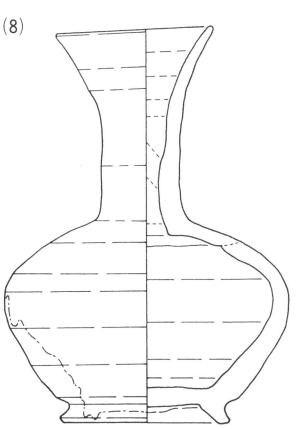


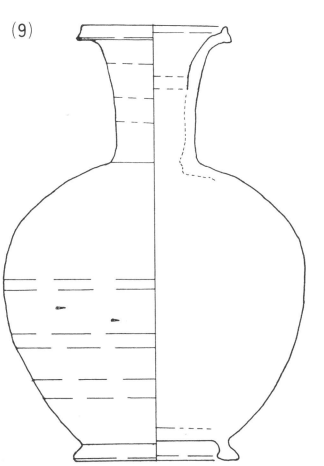



溝4　出土遺物
S＝1/4




第4図　A～D区古代主要遺構図（Ⅰ：1000）

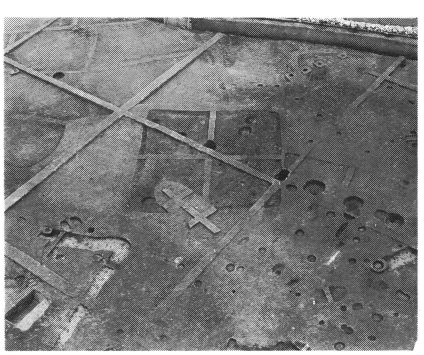
**古代の遺構・遺物**　本年度の調査区では古墳時代後期から古代に属する（以下、古代Ⅰ・Ⅱと区分する）遺構・遺物の密度がきわめて高かった。このことは、北東方向に隣接して展開している大毛池田・大毛沖遺跡との共通性をより強く示しており、全体が一連の遺跡であることをあらためて考えさせるものとなった。

古代Ⅰの遺構には、A区西部の掘立柱建物・竪穴建物・井戸、A区東部の掘立柱建物・竪穴建物、B区の掘立柱建物・竪穴建物・井戸・溝１・平行する小溝、C区の掘立柱建物・竪穴建物、D区西部の掘立柱建物・竪穴建物・小溝、D区中～北東部の溝２・３・４などがある。古代Ⅱの遺構には、A区東部～B区西部に掘立柱建物・井戸・溝・土坑などがある。時期は平安時代前期と考えられる。

古代Ⅰの遺構のうち、A区西部の遺構は６世紀代、他は７世紀以降のものである。A区西部は昨年度の調査区のすぐ東にあたり古墳時代の微高地東辺といえ、この東方・北方は古墳時代には低地部であり前期の水田が確認されている。

７世紀以降では、まずB区を南西から北東にほぼ一直線に続く溝１とその北と南に展開する居住域があげられる。溝１は断面が逆台形を呈し、その上層から中層にかけて須恵器・土師器が出土した。これはその周囲の居住域から廃棄されたものと考えられ、時期は７世紀初頭にあたる。また、溝１には平行する小溝を伴っている。次にC区北東からD区にかけての居住域とD区の数条の溝があげられる。ここは、本年度調査区のなかで古代の遺構・遺物が一番密な区域であり、掘立柱建物・竪穴建物をあわせて３０棟以上存在する。時期は７世紀前半にあたる。この居住域が展開していた時期に溝２・３・４が掘削されている。溝２・３はほぼ同規模で南北方向に平行して続いている。溝間は８ｍ程で当時のこの地域の幹道を思わせる。また、溝４（以下、大溝とする）は幅８ｍ強、深さ１．５ｍ強で直線的に続いている。出土遺物は、上層から掘肩にかけて８世紀後半の盤・長頸瓶が出土し、中層から下層の埋土は細～中粒砂であり遺物をほとんど含まなかった。最下層からは、７世紀代の須恵器を中心に出土した。

門間沼遺跡の北東に展開している大毛池田遺跡では、この大溝の続きと考えられるものを含めて他に４条の大溝が確認されており、E区ではさらに他の大溝の一部が検出されると考えている。大溝の具体像を把握することは、古代を考えるうえで非常に重要であり、今後地域全体で検討していく必要があろう。　（小川芳範）



A区西部　完掘状況（古代Ⅰ）



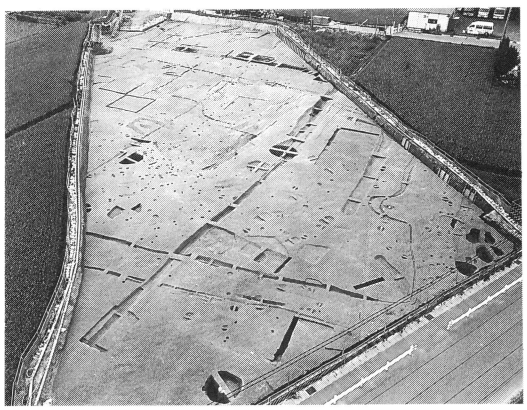
Da区　掘立柱建物（古代Ⅰ）

**中世**

今年度の調査によって、中世が二期に区分されることが明確になった。

Ⅰ期は、方形区画及び道が展開する時期である。いずれも小規模な溝で区切られているが、方形区画はその状況から二種類に大別される。すなわち、区画内に井戸・柱穴・土坑など遺構が密に展開するものと、希薄なものである。前者は居住域が想定されるが、後者は田畑などの生産域を含めた非居住的な区域が想定される。居住域は、６ケ所確認されたが、いずれも道に隣接している。居住域内で検出された井戸は、全てに構造物である曲物が認められるうえに、掘形径２～３ｍを計り、非居住域の井戸との相違がみられる。

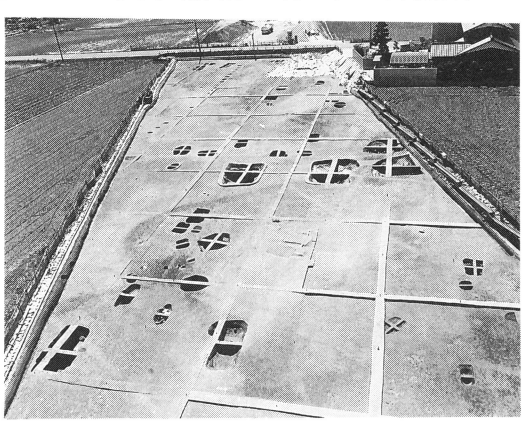
道は、南北方向３本、東西方向３本の計６本確認されたが、そのうち、Ｄａ区で検出されたものとＤｂ区で東西方向に検出されたものは他に比べて幅が約５ｍと広い。この２本の道の上面からは、いずれも江戸期の道が確認され、さらに、1884年（明治17年）に作製された地籍図に記された道とほぼ合致する。


方形区画（Ｃ区）

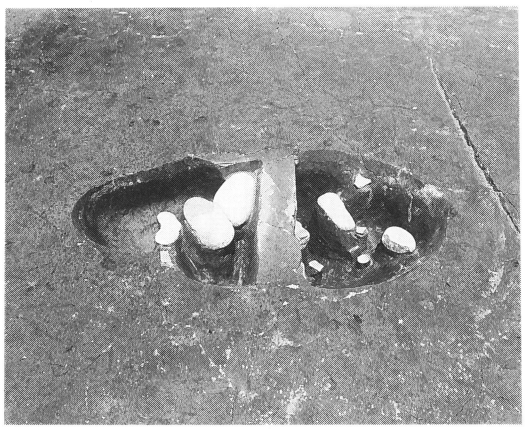
Ⅰ期の遺物は、量としては多いほうではないが、その中でも13世紀末～14世紀中頃の碗・皿類が大多数を占めている。

Ⅱ期は、墓域化する時期である。方形土坑が57基、円形・楕円形土坑が合わせて５基確認されたが、そのうちの70%近くがＡ区に集中している。これは、昨年度の調査区が墓域の中心にあたり、そのために、隣接するＡ区でもっとも多く検出されたと考えられる。また、土坑の配列状況には規則性が認められる。すなわち、溝状の窪地に土坑が展開しているのである。この窪地の下面からはⅡ期の遺構に切られる形でⅠ期の方形区画に伴う溝が検出された。このことから、Ⅰ期の方形区画部分が高まりとして残り、区画する溝の個所が廃棄後窪地化し、そこに土坑が掘られたと考えられる。

Ⅱ期の遺構のなかで特徴的なものがＡ区ＳＫ95である。楕円形土坑の中から河原石が５点以上確認され、さらに、破損散乱した状態ではあるが、北東隅から鉢が出土している。明らかに墓坑と想定できるものである。


方形土坑群（Ａ区）

Ⅱ期の遺物は、碗・皿類がわずかであるが出土している。微量の遺物の中でも、Ａ区ＳＫ42の最下層からは、あまり他に類例のない小型の曲物が出土している。　　（中野良法）



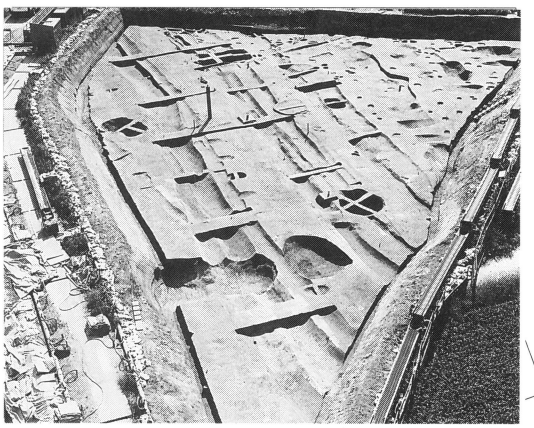
A区　SK95






A区　SK42曲物出土状況

第5図　中世主要遺構配置図（A～B区）（1：1000）



道及び居住域（Da区）






C区　SE04

第6図　中世主要遺構配置図（C～E区）（1：1000）

# 西上免遺跡

**調査の経緯**　西上免遺跡は愛知県尾西市開明字西上免に所在し、東海北陸自動車道路建設に伴う事前調査として平成2年度より継続的に調査を実施し、計約10,000㎡ほどの発掘調査を行ってきた。本年度は4月から7月まで2,788㎡を実施し、本年度をもって西上免遺跡の東海北陸自動車道路建設予定地内の調査は終了した。

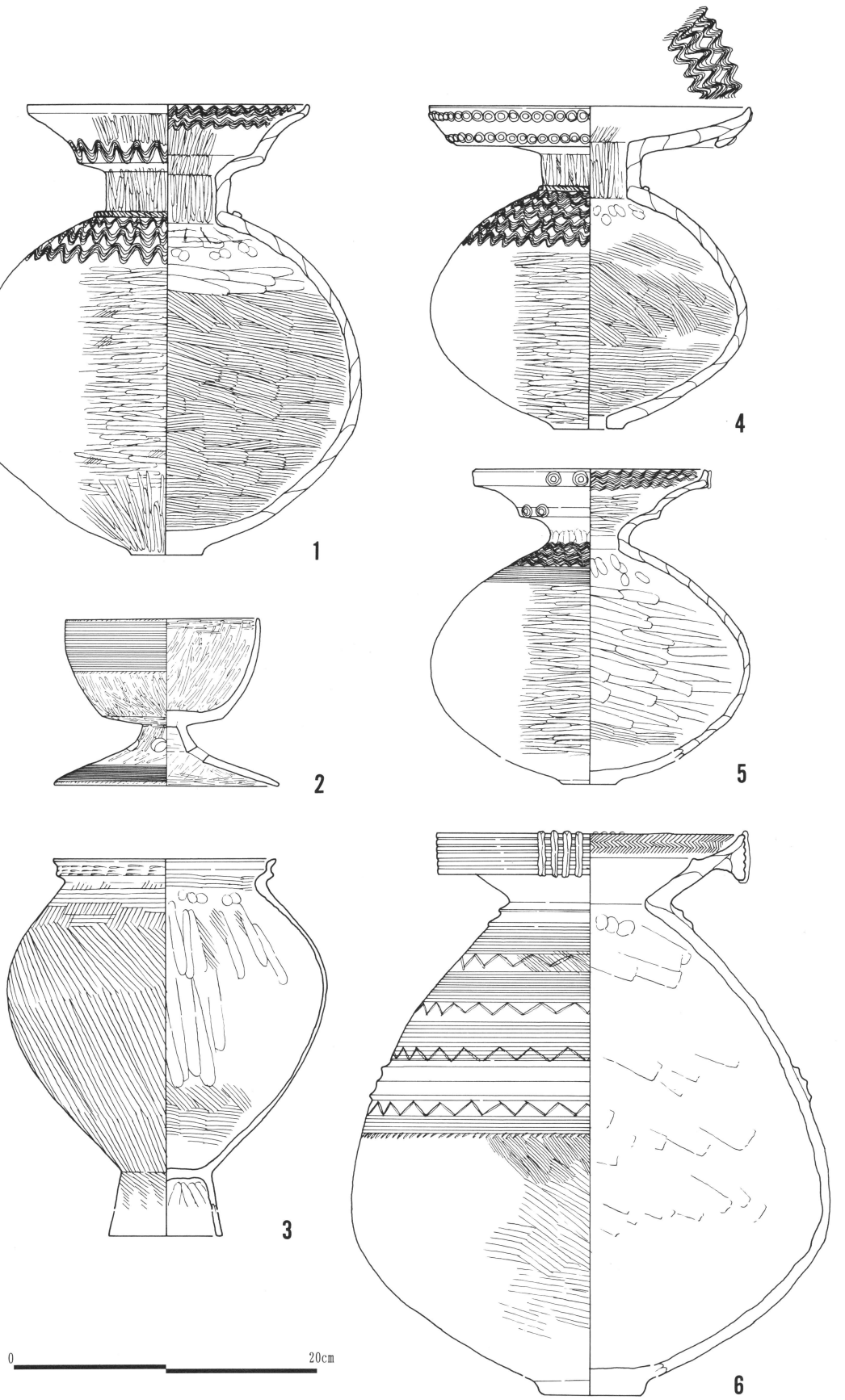
なお西上免遺跡は弥生時代中期・古墳時代および奈良時代、そして鎌倉時代から室町時代までの各遺構群の重複によって構成されており、現在の開明集落から延びる微高地西南端とその南側の低地部に展開する遺跡である。標高は6m前後を測る。

**調査の概要**　西上免遺跡は、古墳時代と鎌倉時代から室町時代にかけての2つの時期に主体があり、古墳時代は3世紀を中心とする遺構群によって構成され、道路予定地内では南部に位置する微高地南端部を中心に検出することができた。その内容は微高地端部に墳丘墓が展開し、その南である低地部には水田が存在する。住居については調査区内では確認できていないものの、地形・遺物の散布状況から開明集落西側である調査区東側に展開しているものと思われる。おもな遺構は墳丘墓4基・前方後方墳1基・土坑数基・溝3条・水田跡などである。また出土遺物として特筆すべき遺物は多孔銅鏃を含めた銅鏃2点、管玉2点・ガラス小玉1点、舟形木製品などが見つかっている。

鎌倉から室町時代にかけての遺構は調査区全体にわたって検出でき、土壙墓多数・溝・井戸・建物といったものであり、微高地端部周辺では土壙墓と溝による区画が存在した。

**本年度の調査**　本年度の調査区は東海北陸自動車道路建設予定地内においては南部に位置し、昨年度の調査区である94A・B区の北側にあたる。最も注目すべき遺構は40mの前方後方墳の発見である。調査前の現状は水田耕作地であり、地表面での凹凸は全く認められない。水田耕土を除去すると直ちに検出面となり、昨年度の94B区で確認できた微高地端部が調査区南西端で僅かに認められた以外は、微高地上に位置する。この時点での検出作業の段階でほぼ調査区全体の範囲内に前方後方墳（SZ01）が存在していることを確認することができた。しかし前方部にあたる部分には現在の廃材投棄坑があり大きく攪乱され、前方部のほとんどが破壊されていた。また前方後方墳の南側には小規模な墳丘墓（SZ02）が1基存在し、周溝は昨年度の調査区に連続する。調査区西端では微高地の高まりが残存し、したがって本来は現状より約0.3～0.5mほどの高さが存在し、削平を受けていることが分かる。

さらに前方後方墳に重複するように中世期以降の遺構が良好に残存している。鎌倉時代としては土壙墓が数10基存在し、室町時代にかけては井戸・溝・土坑によって構成される区画が確認できる。




西上免遺跡　ＳＺ01出土土器（１：４）
（１・６：東くびれ部　４・５：北周溝　２・３：ＳＤ25西側）




西上免遺跡　全景

**前方後方墳**　前方後方墳（ＳＺ01）の規模は、墳長約40m、前方部長は一辺約25m、後方部長15mで幅13mを測る。周囲には前方後方形の周溝が存在し、その幅は一定ではなく後方部北側で約９m、東周溝では7.5～10m、東屈曲部周辺では幅を拡張し、前方部では３～５mと後方部に比べて狭い。現状での周溝の深さは0.5～0.8mと浅く、墳丘は墳丘側ではほぼ垂直な立ち上がりが認められるのに比べ周溝外側では比較的緩斜面を呈する。なお溝底部は微妙な凹凸があり、一定ではない。周溝の堆積層は大きく３層よりなり、最下層は黄褐色シルトと黒色土の細かい斑土によるもので、墳丘側で厚く堆積する。おそらく墳丘盛土の崩落による堆積と思われる。土器はほとんど見られない。その上位には下層としての褐色土が0.2mほど堆積し、出土遺物の多くはこの下層低面で確認できた。さらにその上位である上層には数層のシルト層が堆積し、遺物はほとんど包含されていない。こうした層序の堆積の後に鎌倉時代の溝が掘削されている。おそらく平安時代末～鎌倉時代には前方後方形の周溝がわずかに窪みとして残存した景観が推測できる。

前方後方墳の周囲には興味深い施設が存在する。まず前方部周溝には重複するように溝ＳＤ25が存在する。ＳＤ25と前方後方墳との関係はおおむね同時期のものと思われ、ＳＤ25の方向性に規制された形で前方後方墳が造営されており、前方部の周溝は主軸に対し斜行する。さらに前方部の先端の状況もやや斜行し、そこに造営上の制約が読みとれる。同様な点は前方後方墳東周溝の東側に沿って存在する溝ＳＤ19との関係でも指摘できる。つまりＳＤ19によって前方後方墳の東周溝の幅が制約され、後方部北端では最も幅が狭く設計されている。こうした諸点からは前方後方墳を取り巻く造営空間には溝による区画が存在し、基本区画に制約される形で前方後方墳を含めた各墳丘墓が設営されているものと思われる。

前方後方墳の造営時期に関する問題は、周溝から出土した多くの土器によって類推できる。周溝内の遺物の出土位置には大きく３つのまとまりがあり、一つは後方部北周溝で墳丘側からの崩落状況で確認できたもの。次に東くびれ部で墳丘側からやはり崩落状況を呈するもの。最後に前方部南周溝に重複する溝ＳＤ25西側で墳丘外から投棄・崩落された状況で発見できた資料群である。これらの土器には朱が塗布されたものや、焼成後の穿孔、煮沸痕跡等が明瞭に確認できるものが多い。なお所属時期は廻間Ⅱ式前半期を大きく下降させる資料は見あたらず、おおむねこの段階にまとまりが見られる。したがって遅くとも廻間Ⅱ式初頭段階には前方後方墳が造営されていた可能性が高いものと思われる。

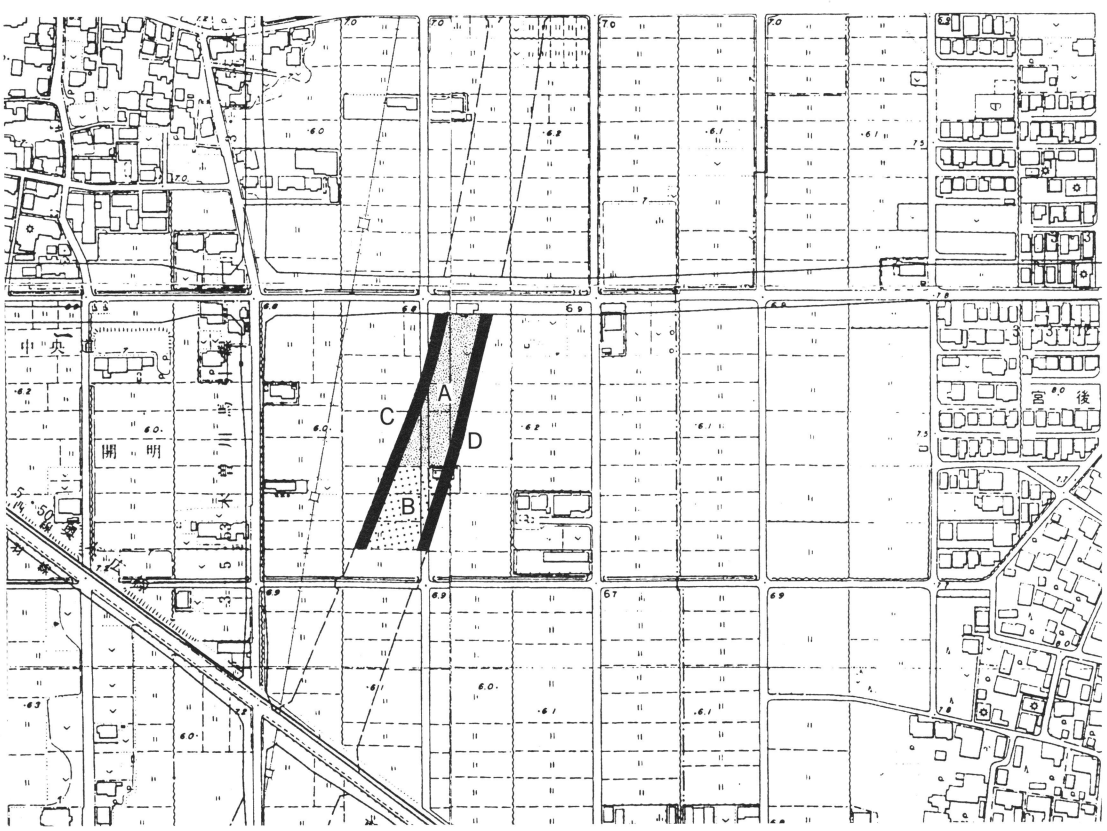
**まとめ**　今回の調査によって新たに40mの前方後方墳が発見され、その造営が３世紀中葉を下るものではないことが確認できた。さらにその周囲には小規模な墳丘墓が展開し、３世紀段階での墓域を形成している。またこうした墳丘墓が造営された微高地南には水田が営まれ、おおむね３世紀の集落遺跡の具体的な遺構配置を推定することができる。したがって西上免遺跡のあり方は濃尾平野における３世紀の典型的な集落景観を復原する上で貴重な資料を提供できるものと考える。　（赤塚次郎）

# 東 新 規 道 遺 跡

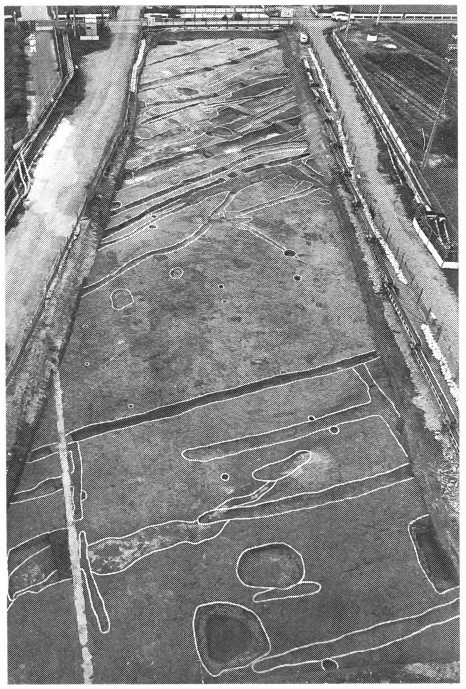
**調査の経緯**　東新規道遺跡は、尾西市開明に所在する。発掘調査は、東海北陸自動車道の建設に伴うものであり、日本道路公団及び愛知県土木部より愛知県教育委員会を通した委託事業として当センターが実施した。調査面積7,294㎡をＡＢＣＤの４区に分割して、平成７年８月から平成８年３月にかけて調査を行った。調査区の現況は標高７ｍの水田及び畑地である。調査区の北には一宮市今伊勢町から尾西市開明にかけて拡がる県遺跡番号07001の西上免遺跡があり、弥生時代から中世にかけての埋蔵文化財包蔵地となっている。東には一宮市今伊勢町に所在する県遺跡番号02051でんやま古墳や県遺跡番号02052野見神社古墳などがある。西には県記念物番号0710で尾西市指定遺跡でもある安土桃山時代の野府城跡がある。

**調査の概要**　遺跡の基本層序は、上から耕作土層・灰色粘土層・黒褐色粘土層・灰色シルト層・細粒砂層であり、第４層の灰色シルト層で遺構検出を行った。調査区北半部は耕作土層を除去すると直ちに灰色シルト層となり遺構検出が可能となる。

調査成果としては、古墳時代の数条の溝及び耕作地と想定される土坑群を検出したこと、中世の溝及び土坑を検出したことなどがあげられる。　（牧　謙治）



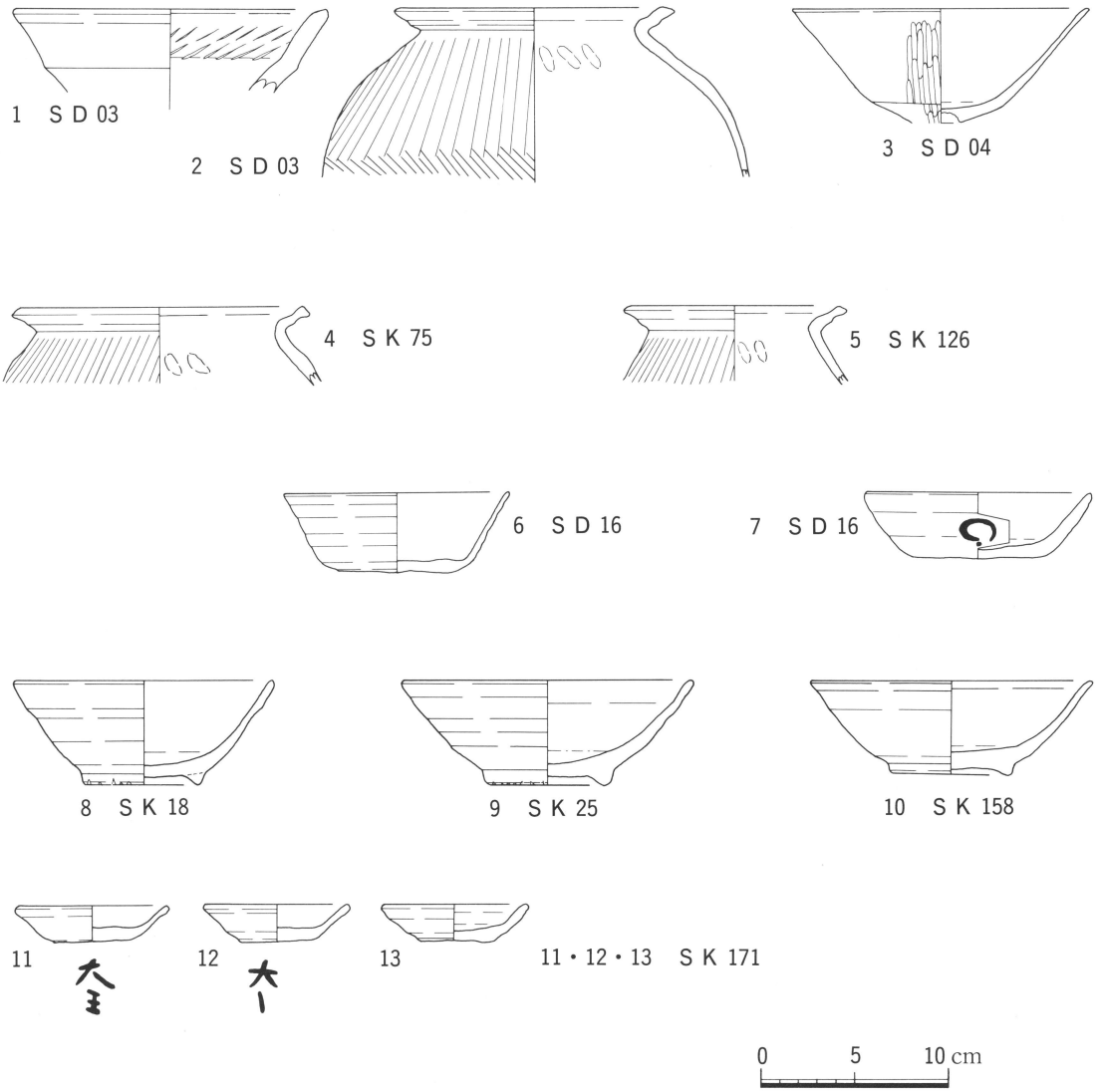

第１図　調査区位置図（１：5000）



調査区北半部（南から）



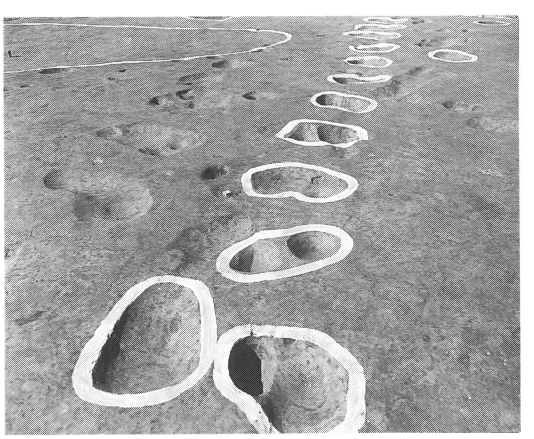

第２図
主要遺構配置図
（１：600）




第3図　出土遺物実測図（1：4）



SD03のS字甕出土状況（西から）



土坑列（南東から）

**古墳時代の遺構**　古墳時代の主要な遺構としては、まず調査区北部に位置する溝ＳＤ01・03・04・19が上げられる。ＳＤ03は、幅205cm、深さ58cmである。埋土は５層からなり、その最上層からＳ字状口縁台付甕Ｄ類（松河戸Ⅰ式・Ⅱ式）や柳ヶ坪型壺（松河戸Ⅰ式）などが出土している。これらの溝は４世紀末を中心とした時代のものと考えられる。また、北東から南西に向けての方向性を持つことが特徴である。次に、調査区南部に位置するＳＫ75・76・77・79・82・95・124・126とＳＤ50・54・65・66とが上げられる。前者の土坑群は、長方形に近い平面形で、深さ数センチの浅い窪みである。ＳＫ76・126からＳ字甕Ｄ類（松河戸Ⅰ式）が出土している。これらの土坑群は、北東から南西に向けての方向性を持ち、北部の溝群とほぼ平行する位置関係にある。ＳＤ50・54・65・66は幅40cm、深さ15cmほどで、元は一続きの溝であった可能性もある。南東から北西にかけての方向性を持ち、南部の土坑群と北部の溝群とに直交しそれらをつなぐような位置関係にある。これらの土坑群は小区画水田を連想させるが、水田や畠など何らかの耕作地である可能性を提起しておきたい。ＳＫ76からは管玉１点が出土した。また、南部の土坑群の北で、ＳＫ139から159までの土坑列を検出した。それぞれの土坑が、長径およそ50cmの楕円形で、その中に深さおよそ10cmの小土坑が２基並んでいる。16基の土坑がおよそ66cmの等間隔で、南東から北西の方向で直線上に並んでいるが、性格は不明である。

**奈良時代の遺構**　奈良時代の遺構としては、ＳＤ16がある。幅320cm、深さ56cmで、調査区東端部では溝底が激しい水流のためにかなりえぐられたようすが見られた。美濃須恵窯産の８世紀初めと見られる須恵器杯が２点出土した。

**中世の遺構**　中世の遺構としては、調査区中央部の溝群とそのやや北の溝群と、そして調査区全体に存在する土坑が上げられる。13世紀初めを中心とする遺構としては、調査区中央やや北の溝群ＳＤ23・25・75が上げられる。幅40cm、深さ51cmで、箱形の掘り方であり、一続きではなく50cmほど間をあけている。これらの溝の南側と北側とを区画していると考えられる。また、区画された北側にある土坑のうちいくつか（ＳＫ18・25・172など）からは、瀬戸窯産と見られる12世紀後半から13世紀初めの完形の灰釉系陶器が出土している。14世紀頃の遺構としては、調査区中央部の溝群が上げられる。この溝群は、東西あるいは南北の方向を持ち、いくつかの長方形の区画を形作っている。この溝群以南の土坑は、ほぼ東西南北の方向を意識して形成されたと見られ、また遺物はほとんど出土しなかった。

**弥生時代の遺物**　弥生時代中期の遺物として包含層資料がほとんどではあるが、石鏃が５点と、調査区中央部やや南のあたりから粗製剥片石器が７点出土している。

**まとめ**　東新規道遺跡では、４世紀末を中心とする古墳時代の遺構と13・14世紀の中世の遺構とが見つかったが、いずれも集落の周辺部に位置する遺構と考えられる。古墳時代の遺構については、いずれも５世紀前半とされる、東600ｍにあるでんやま古墳や南東500ｍにある野見神社古墳との関連を検討する必要がある。中世の遺構については、遺構の在り方と遺物の出土のようすからして、現在の野府の集落がのる北西の微高地にやはり当時の集落の中心部が存在したと考えられる。　（今西康二）

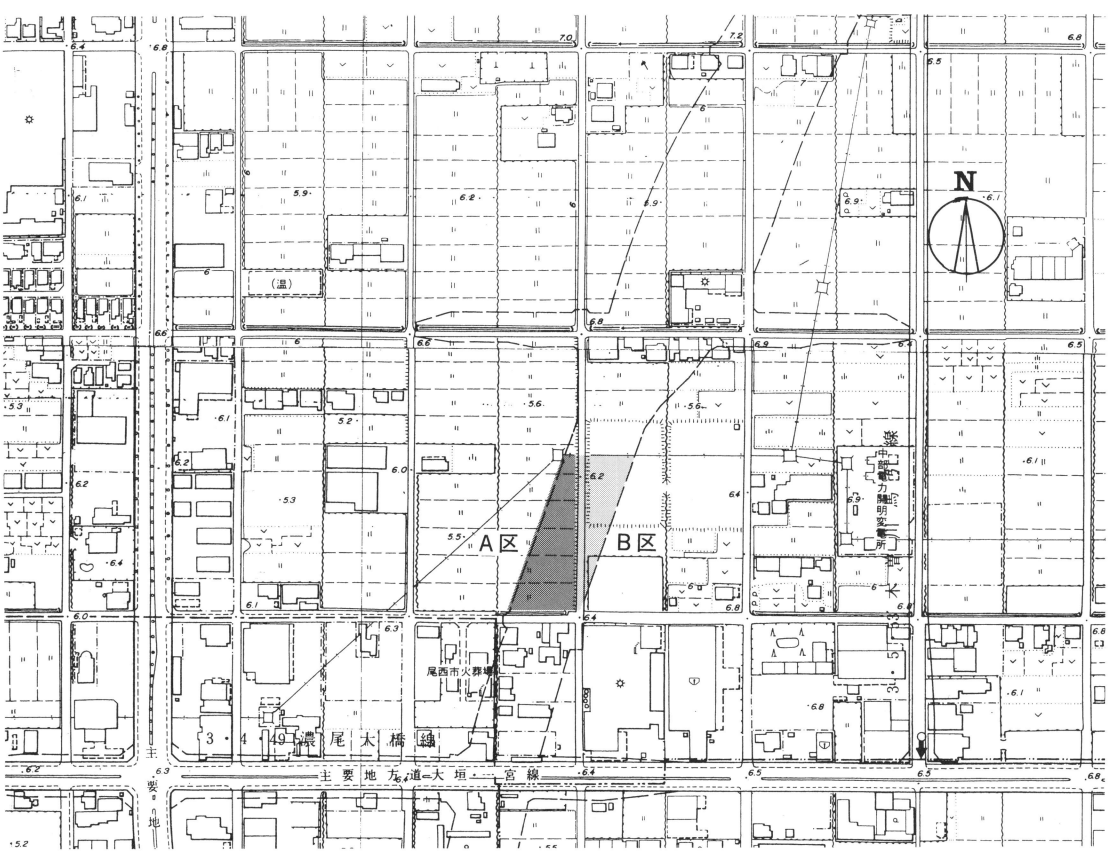
# 東苅安賀道遺跡

**調査の経過**　東苅安賀道遺跡は、尾西市開明字苅安賀道に広がる遺跡で、木曽川水系日光川上流域に形成された標高６ｍ前後の自然堤防及び後背湿地上に展開している。

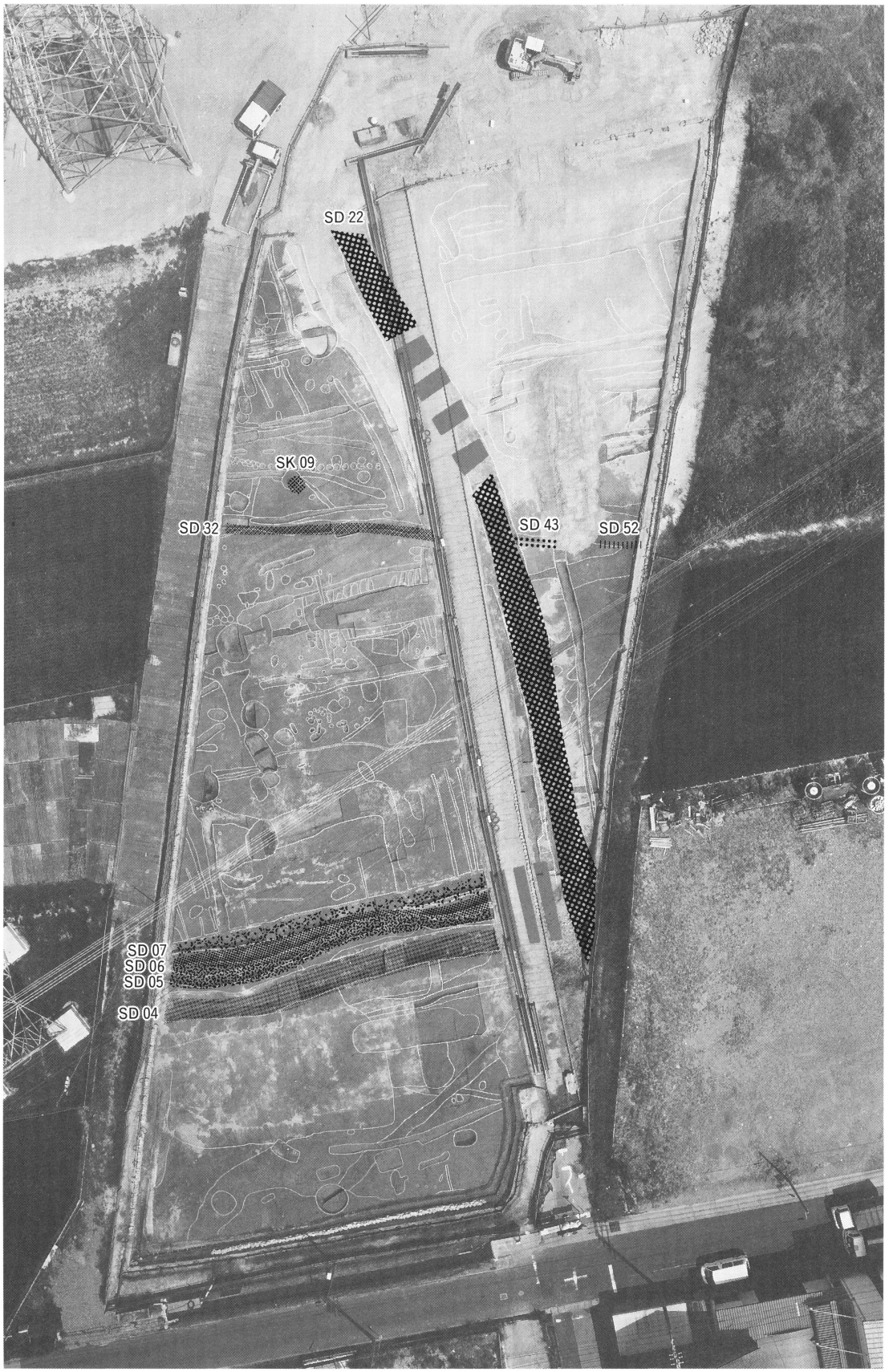
本遺跡は、縄文時代の遺物散布地として県遺跡番号07005で登録されている。本遺跡の北側には、古墳時代の遺物散布地である東向野遺跡（県遺跡番号07002、尾西市開明字東向野）や三味郭遺跡（県遺跡番号07004、尾西市開明字三味郭）が、また、西側には弥生時代から古墳時代の遺物散布地である蒲原遺跡（県遺跡番号07006、尾西市開明字蒲原）が存在する。

今回の調査に先立って、平成５年に行われた試掘調査では、中世から縄文時代晩期の土器が確認されている。

今回の調査は、東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、日本道路公団及び愛知県土木部より愛知県教育委員会を通した委託事業として実施しており、本年度は平成７年４月より平成７年９月まで、4,424㎡を調査した。調査はＡ区・Ｂ区の２つの調査区に分割して実施した。　（小泉　渡）




調査区位置図（１：5000）



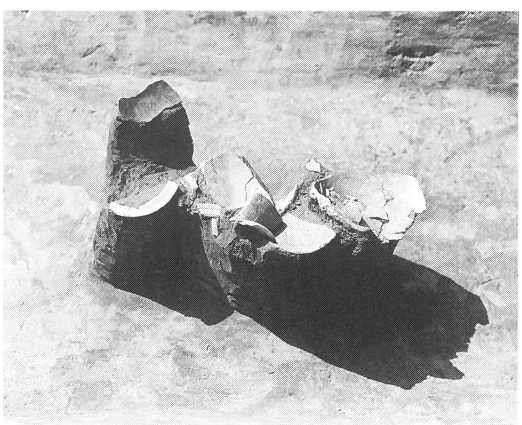

A・B区全影

**調査の概要**　調査の結果検出できた主要な遺構は、古墳時代初頭と鎌倉時代後期の２つの時期に大きく区分することができる。それぞれの時期の遺構について、調査区ごとに述べていくことにする。

**Ａ区**　調査区の北側に微高地が展開しており、その縁を区画するように東西に古墳時代の溝であるＳＤ32がある。北側の微高地上には古墳時代の溝や柵列、土坑が展開しており、井戸と思われるＳＫ09も検出された。恐らく微高地上には居住城が展開していると考えられるが、遺跡の中心部分はさらに北西方向に広がっていると思われる。

鎌倉時代後期の遺構としては、調査区南側を東西に横切る４条の溝（ＳＤ04～07）が注目される。これらの溝は東側のＢ区に続き、直交するＳＤ22とともに遺跡全体を区画していると思われる。このＳＤ22は北西方向にやや曲がりながらＡ区に続いているが、その西側にはこの溝と並行する２条の溝があり、道の可能性がある。このＳＤ22とＳＤ04に囲まれた区域や、ＳＤ04の南側には井戸や土坑群などが存在するが、遺跡の中心部分はさらに西側および南側に広がっていると考えられる。

ＳＤ04の南側は南西方向に低くなっており、もともとこの部分は湿地化していた可能性



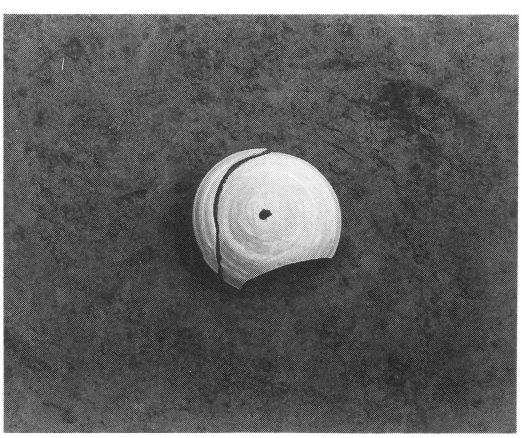
ＳＤ32土器出土状況



ＳＫ09



ＳＤ76土器出土状況



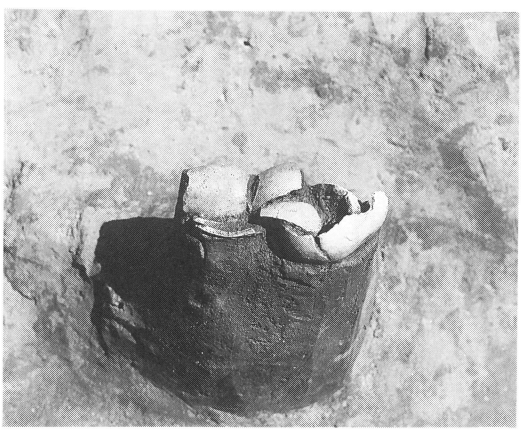
ＳＫ60土器出土状況

がある。そしてこの場所に流れ込んだものと考えられる縄文時代晩期の土器が数片出土している。今回の調査ではこの時期の遺構を確実にとらえることはできなかったが、本遺跡はもともと今回の調査区の東側の範囲を中心とした縄文時代の遺跡として知られており、東側部分にこの時期の遺構の存在が予想される。

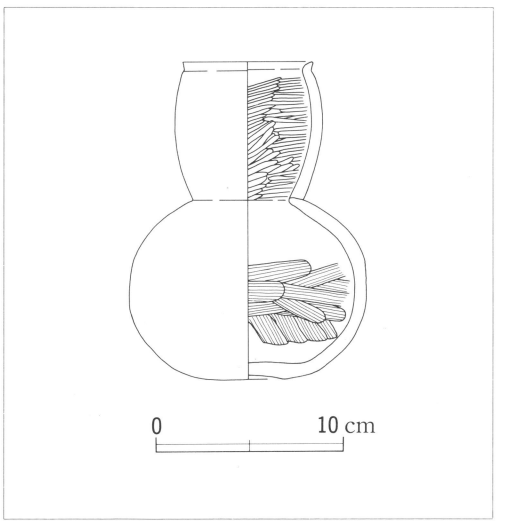
**B区**　B区は中央に大きな撹乱があるが、遺構も稀薄となっており、遺跡の中心は西側に広がっていることがうかがえる。

A区のSD32は、B区のSD43、SD52へと続いており、ヒサゴ壺などの遺物がまとまって出土している。古墳時代の遺構としては他に、SD43の北側に周溝と思われる溝が展開しており、墓域の可能性がうかがえる。

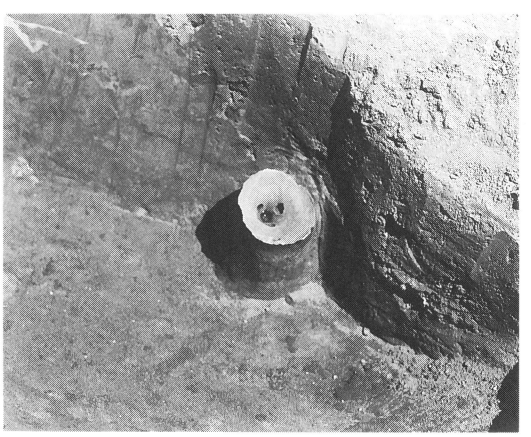
鎌倉時代後半の遺構としては、A区のところで述べたように、SD04などに直交するSD22が南北方向にのびており、やや北西方向に曲がりながらA区の北側へと続いている。さらにこの溝の東側には、撹乱のためによくわからない部分もあるが、SD22に並行する溝と、SD22に直交する数条の溝が存在しており、これらの溝が区画する居住域の存在を南東方向に想定できるかもしれない。（伊藤太佳彦）



ヒサゴ壺出土状況（SD52）




ヒサゴ壺（SD52）



SD43土器出土状況



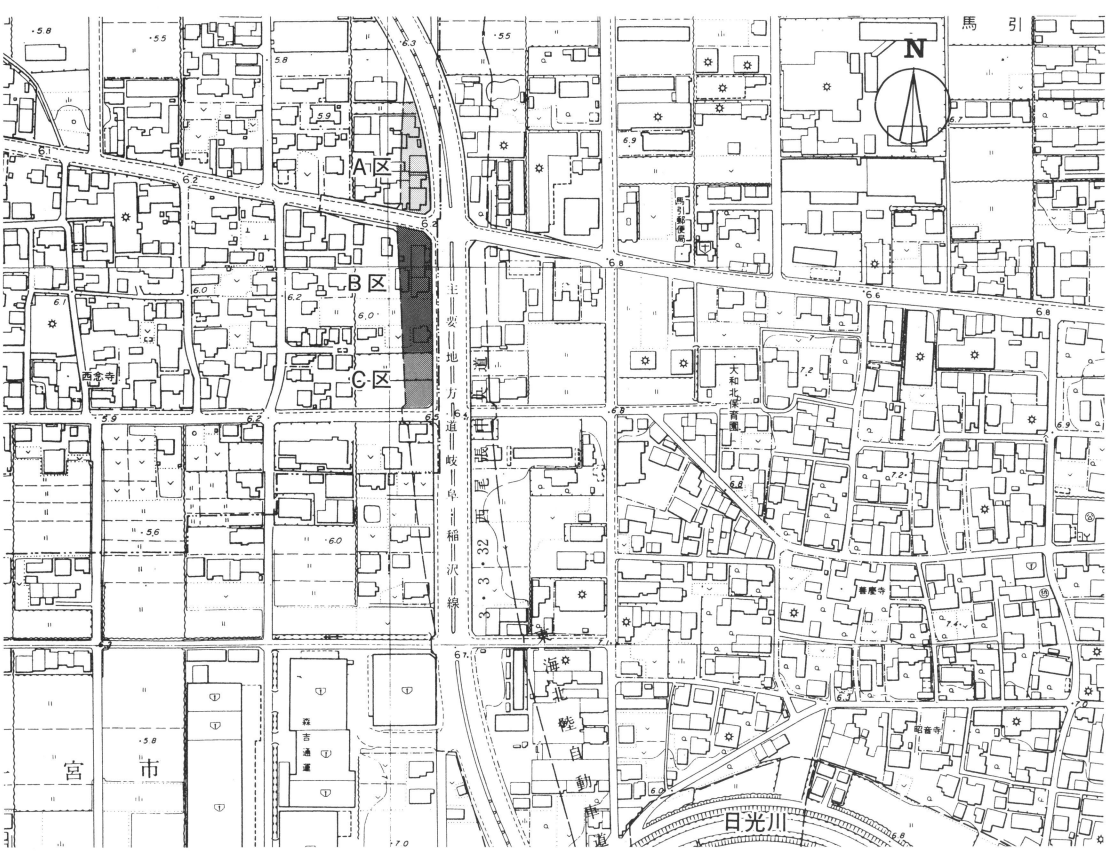
SD59土器出土状況

# 馬 引 横 手 遺 跡

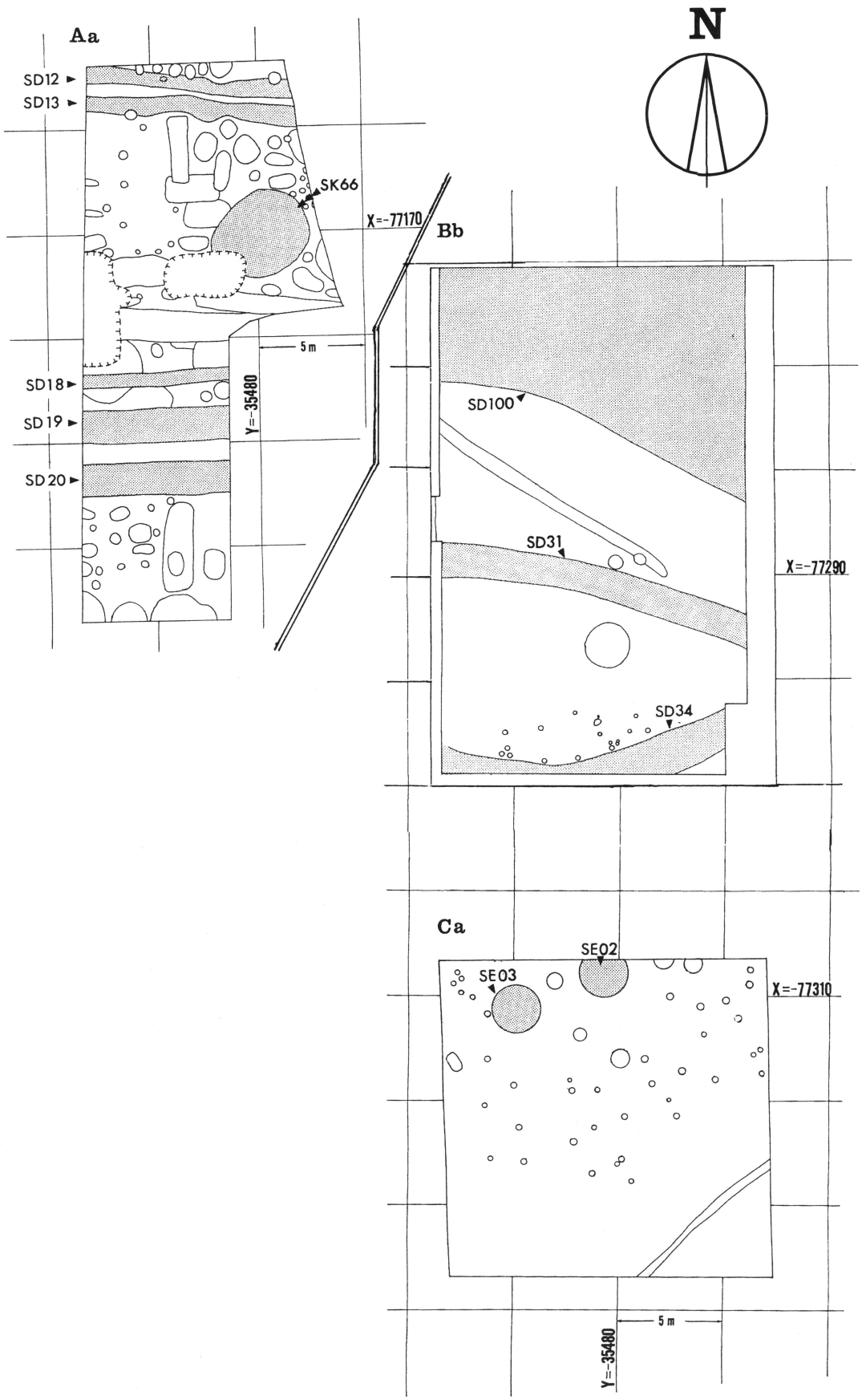
**調査の経過**　馬引横手遺跡は、一宮市大和町馬引字横手から尾西市篭屋にかけて広がる遺跡で、木曽川水系日光川上流域に形成された標高６ｍ前後の自然堤防及び後背湿地上に展開している。

本遺跡は、中世の遺物散布地として県遺跡番号02097で登録されている。本遺跡の南の日光川左岸には鎌倉時代から室町時代の遺物散布地として知られる毛受遺跡（県遺跡番号02098、一宮市大和町毛受）や、本遺跡の東側、起街道沿いには法圓寺中世墓遺跡（県遺跡番号02077、一宮市大和町馬引）が、また、北には、縄文時代の遺物散布地である東苅安賀道遺跡（県遺跡番号07005、尾西市開明字苅安賀道）が存在する。平成５年に実施した試掘調査では、中世の遺構が確認できている。

今回の調査は、東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、日本道路公団及び愛知県土木部より愛知県教育委員会を通した委託事業として実施しており、本年度は平成７年10月より平成８年３月までに西尾張中央道の西側で2529㎡を調査した。調査はＡ区～Ｃ区の３つの調査区に分割し、それぞれをうって返しで実施した。調査期間は平成７年10月から平成８年３月である。　（小泉　渡）




調査区位置図（１：5000）


N
Aa
SD12
SD13
SK66
X=-77170
Bb
5m
SD18
SD19
SD20
Y=-35480
SD100
SD31
X=-77290
SD34
Ca
SE02
SE03
X=-77310
5m
Y=-35480

遺構配置図

**調査の概要**　調査の結果検出できた主要な遺構は、古墳時代前期、平安時代後期、鎌倉時代後期に大きく分けることができる。各時期の遺構について、調査区ごとに述べていくことにする。

**A区**　起街道の北側に位置するこの調査区では、鎌倉時代後期の遺構が検出された。

調査区を東西に横切る溝が並行して数条あり、この溝に区画されるように土坑群が確認された。そのうちＳＫ66としたものは井戸で、検出面から２ｍ50㎝程の底の部分では曲物が一部残っており、上層からは青磁片も出土している。

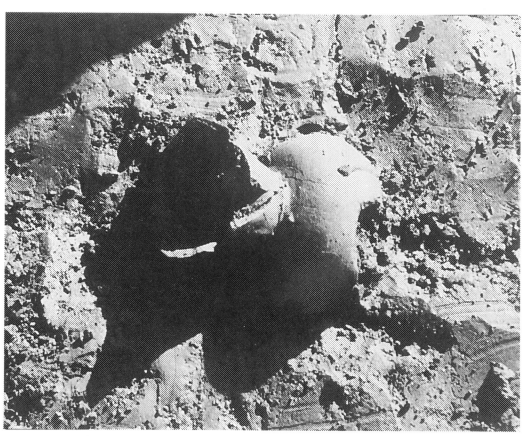
後述するように、Ｂ区およびＣ区では全面を洪水性の堆積物が覆い、その上の面で鎌倉時代後期の遺構を確認しているが、Ａ区においては、下層の遺構を確認することはできなかった。地形的には恐らく起街道の位置する部分がもっとも高く、南に向かって低くなっていると想定することができる。

**B区**　調査区北側のＳＤ100は北に向かって大きく落ち込んでいく谷と考えられる。ＳＤ100を覆う層からは縄文時代晩期の土器が数片出土しており、縄文時代後期の谷と考えられる。

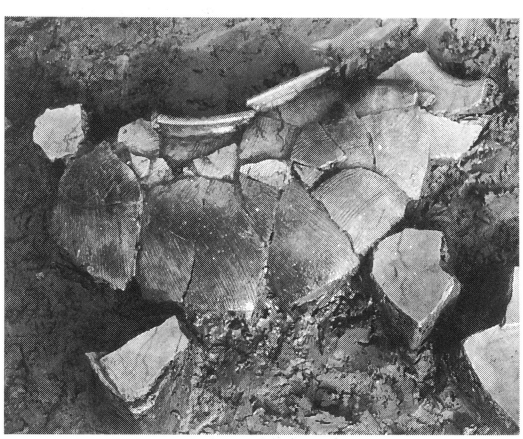
この谷に並行するように古墳時代前期の溝である、ＳＤ31がある。上層からは宇田型甕や須恵器が、下層からは松河戸式期の土師器などがまとまって出土しているが、さらにこ



ＳＤ15　土器出土状況



ＳＤ31　土器出土状況





ＳＤ31　土器出土状況

の溝には石刀と棒状石器も混入していた。石刀は頁岩製で、頭部は欠損しているが沈線文様が刻まれていたかもしれない。棒状石器は細長い棒状の石器で、上下両端に敲打痕を残す。そして両側面には刻みが入り、石器を縛ったように思われる擦痕が認められる。この2点は縄文時代晩期に属する石器と思われ、土器の存在と併せてこの時期の遺構の存在が考えられる。南側にあるＳＤ34も古墳時代の溝であるが、ＳＤ31と比べて北東方向に曲がっている。

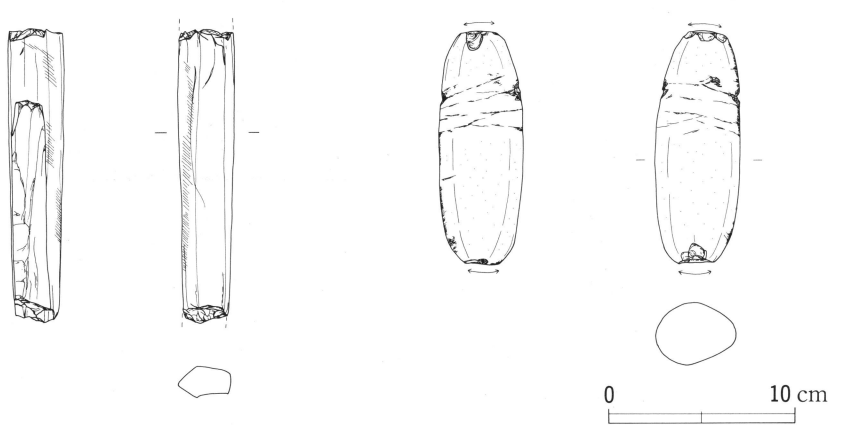
平安時代後期の遺構としては井戸や土坑、溝があるが、この上面を洪水性の堆積物が厚く覆っており、その上の面で鎌倉時代後期の土坑をいくつか検出した。

**Ｃ区**

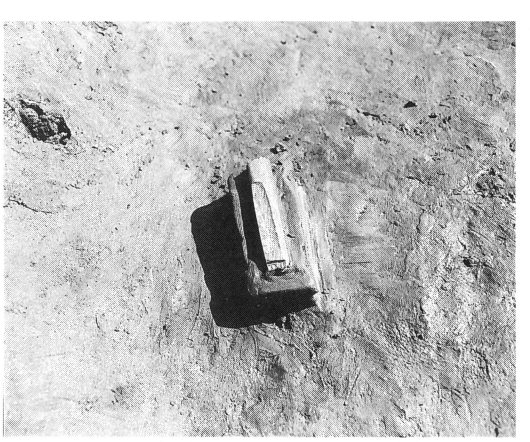
Ｂ区と同様に調査区全体が厚い洪水性の堆積物で覆われており、その上の面で鎌倉時代の土坑を検出している。

下の面では、平安時代後期の井戸と古墳時代前期の柱穴などを検出したが遺構は稀薄である。調査区の南に向かってやや低くなっており、Ｂ区の状況と併せて考えると、遺跡の中心部分はＢ区とＣ区に挟まれた部分から西の方向に広がっていると思われる。

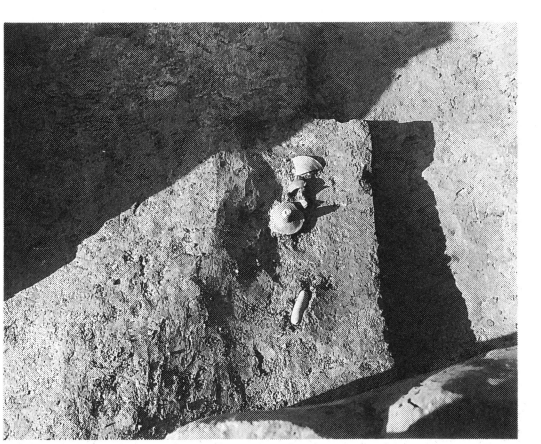
（伊藤太佳彦）




石刀・棒状石器（ＳＤ31）



石刀出土状況



棒状石器出土状況

# 毛受遺跡

**調査の経過**　毛受遺跡は、一宮市大和町毛受に所在する。本遺跡は、尾張平野の北部をやや蛇行しながら南流する日光川の上流域に形成された標高７ｍ前後の自然堤防上に分布する。

今回の調査は、東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、日本道路公団及び愛知県土木部より愛知県教育委員会を通した委託事業として実施しており、本年度は西尾張中央道の西側にＡａ・Ａｂ・Ａｃの３つの調査区、合わせて1,446㎡を発掘調査した。調査期間は４月～６月である。　（黒田哲生）

**調査の概要**　Ａａ区では、調査区の北西隅で、東西方向にほぼ一定の間隔を保って並ぶ数条の溝を検出した。これらの溝の規模は、確認できたところでは、いずれも幅30～50㎝、深さ10㎝前後である。その配列状況から畝状遺構と考えられる。その他にも溝、土坑を検出したが、顕著な遺構ではなかった。出土遺物には内耳鍋などの土師器・灰釉系陶器・擂鉢・天目茶椀等があり、ほとんどが鎌倉・室町時代の遺物である。これらの多くは小片で、遺構から出土したものも含めて、出土量は全体的に少なかった。

なお出土遺物の状況についてはＡｂ区、Ａｃ区ともＡａ区とほぼ同様であった。

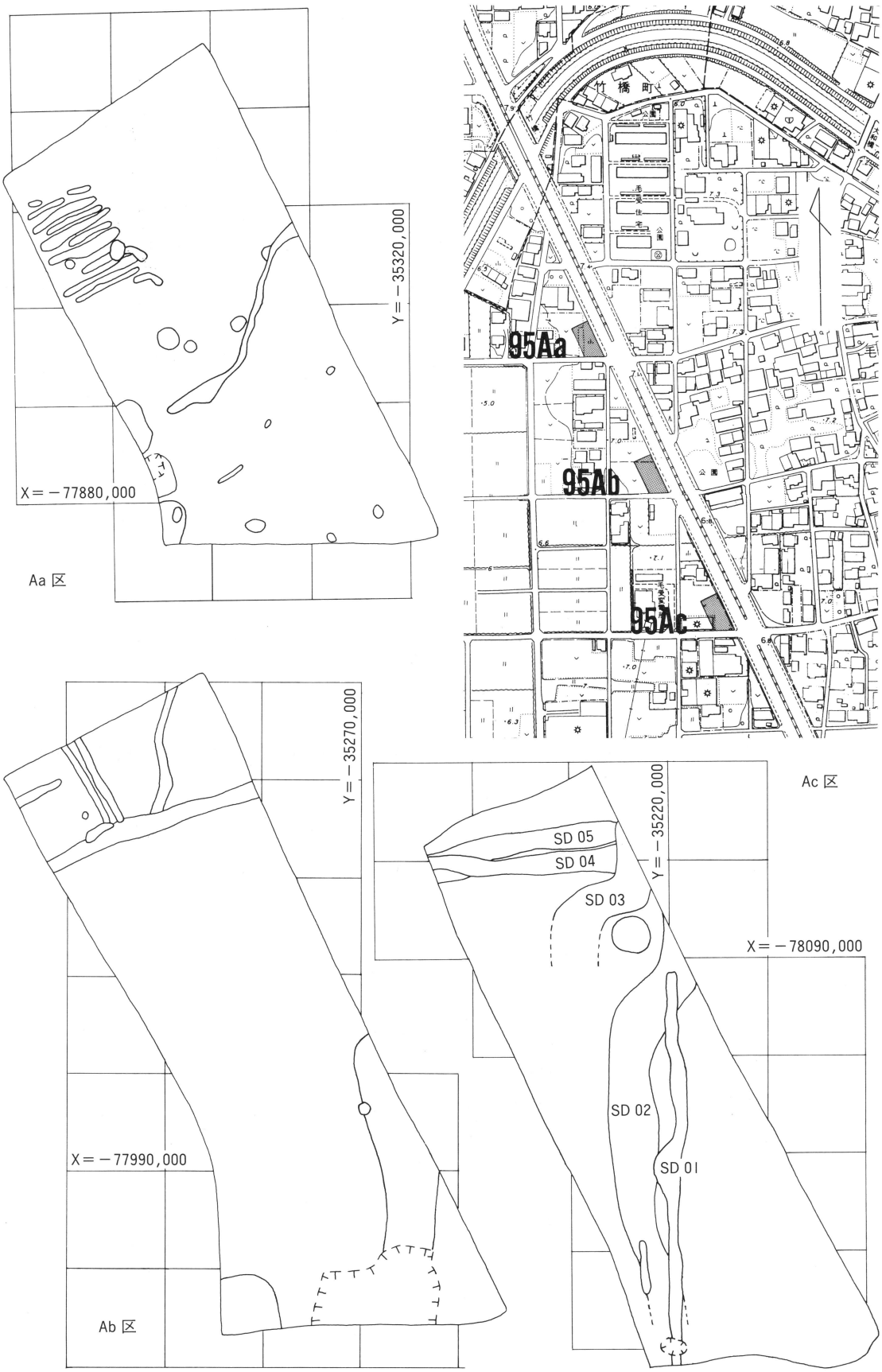
Ａｂ区では、南北あるいは東西方向の溝数条、土坑数基を検出したが、調査区全体の遺構は希薄であった。特筆すべき遺物として、この時期に使用されたと思われる宋銭（祥符元寶・元符通寶）２枚、加工円板３点が出土した。

Ａｃ区では、南北方向の溝３条（ＳＤ01・02・03）、東西方向の溝２条（ＳＤ04・05）、土坑１基を検出した。ＳＤ02・03はほぼ並行した位置にあったと思われ、また調査区の東端ではクランク状に屈曲していた。しかしＳＤ03は途中から攪乱による削平をうけており、詳細を確認することはできなかった。ＳＤ04・05はこれらの溝に切られていた。これらの溝の性格は不明である。特筆すべき遺物として、墨書陶器１点・陶丸１点・加工円板３点が出土した。

**まとめ**　毛受遺跡は、『寛文村々覚書』などの文献に記述が見られる「毛受城」が存在した地点と考えられている。しかし、Ａｃ区で検出した数条の溝が「毛受城」にかかわる遺構である可能性を除けば、全体としては遺構は希薄で、遺構から出土する遺物の量も少なかった。またＡｂ・Ａｃ区で、現在の毛受の集落が立地している自然堤防が西へ緩やかに傾斜をしていく様子が確認できたことも、調査の成果を考える上での参考になるであろう。

これらのことから、今回の調査地点は毛受遺跡の西端付近に当たると思われ、この遺跡の中心は現在の西尾張中央道よりも東側に展開していると考えられる。

（山本寿徳・飴谷　一）




調査区位置図（Ⅰ：5000）およびＡａ～Ａｃ区遺構配置図（Ⅰ：300）

# 八 王 子 遺 跡

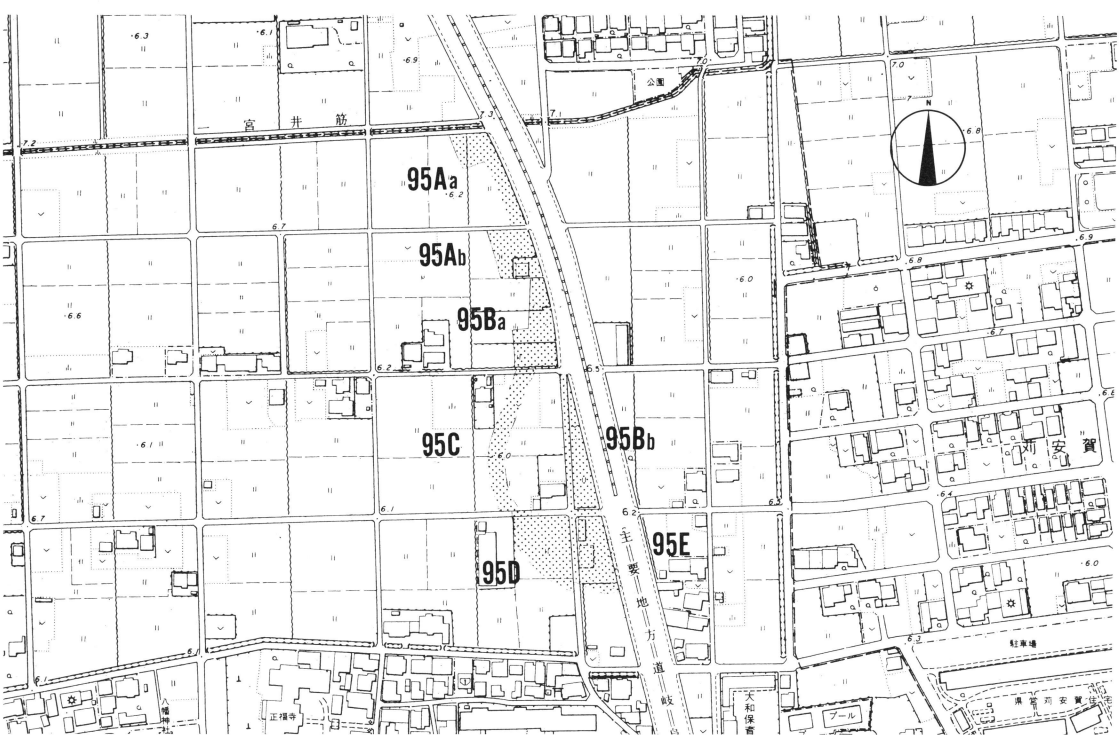
**調査の経緯**　八王子遺跡は、一宮市大和町苅安賀に所在し、木曽川水系日光川上流域に形成された標高５～６ｍ前後の自然堤防及び後背湿地に広がりが認められる遺跡である。

今回の発掘調査は、東海北陸自動車道の建設に伴うものであり、日本道路公団及び愛知県土木部より愛知県教育委員会を通した委託事業として本年４月より実施している。本年度は、西尾張中央道西側のＡ区～Ｅ区までの8,734㎡を発掘調査した。

**調査の概要**　八王子遺跡は、従来弥生時代の遺物散布地として知られており、調査区の南西約２㎞には弥生時代後期の標式遺跡として有名な山中遺跡がある。本年度の調査では、弥生時代の環濠・竪穴住居・方形周溝墓、古墳時代の竪穴住居群、奈良時代の土坑墓・井戸・区画溝・掘立柱建物、鎌倉・室町時代の区画溝・井戸などを検出した。その結果、八王子遺跡は単に弥生時代だけにとどまらず、弥生時代前期から鎌倉・室町時代にかけて連綿とつづく複合遺跡であることがわかってきた。

なかでもＡａ区の弥生時代中期の二重環濠、Ａｂ区の弥生時代前期の環濠及びＢａ区の谷地形の発見により、Ａａ区～Ｂａ区を東端とした弥生時代の集落の存在とＡｂ区、Ｂｂ区及びＣ区の古墳時代前期の集落の存在が確認されたことが大きな成果といえる。またＡａ区の弥生時代前・中期の方形周溝墓、Ａｂ区の弥生時代中期の方形周溝墓など墓域の確認及びＡａ区の弥生時代前期の石器製作土坑など、遺跡の性格を考えていくうえで重要な発見も多かった。

（黒田哲生）




第Ⅰ図　調査区位置図（Ⅰ：5000）

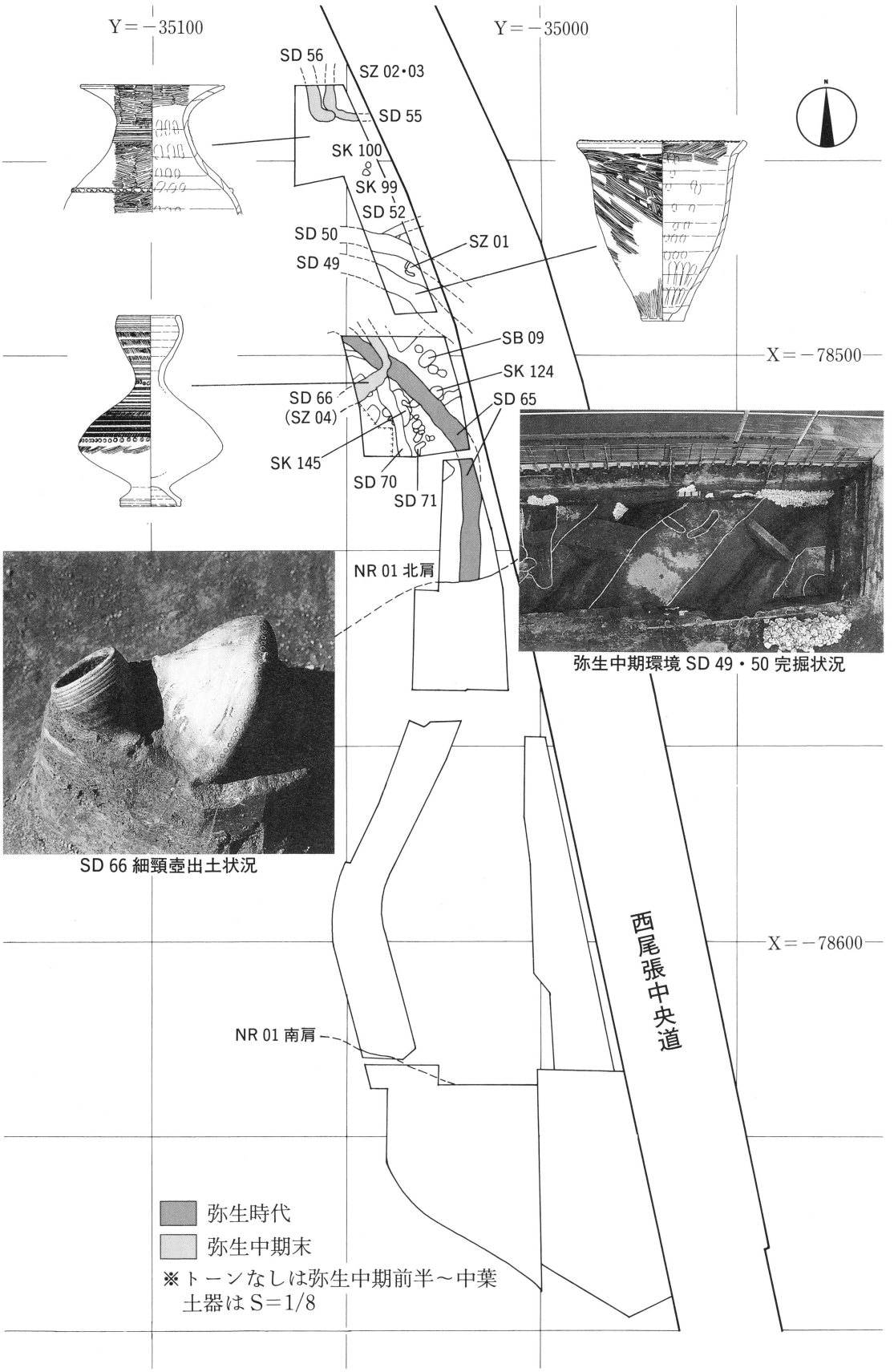
**時期区分**　八王子遺跡は前述のように弥生時代前期から鎌倉・室町時代までほぼ途切れることなく継続している。そこで、この年報では遺構検出面などから弥生前期～中期、弥生後期～古墳後期、奈良～鎌倉・室町時代に分けて記述を進めて行くこととしたい。

**弥生前期～弥生中期**　弥生時代前～中期は現在のところ、Ａａ・Ａｂ・Ｂａの三調査区で遺構を検出している。

まず弥生前期の遺構としては、Ａｂ区でわずかに北にふくらむ弧を描きつつ調査区の北西隅から南東隅にかけて伸びる溝ＳＤ65を検出した。この溝の規模は幅約４ｍ、深さ約1.2ｍで、さらにＢａ区へと続いている。この溝は規模や方向性などから環濠と考えられ、溝の西側に居住域が展開していたと想定できる。Ｂａ区の南半部からＢｂ・Ｃ区にかけて幅約110ｍもの自然流路ＮＲ01が徐々に埋没しつつも古墳前期まで機能していたため、ＳＤ65の南端はＮＲ01に接続して収束するものと考えられる。環濠内は調査面積が狭いことや弥生中期の遺構により破壊されていることなどから竪穴住居などの明確な遺構は検出できなかった。環濠外ではＳＺ01やＳＤ52、ＳＫ99・100などの遺構がある。うち、ＳＺ01は四隅が切れるタイプの方形周溝墓で中期の環濠に破壊されている。一辺の長さは約３ｍときわめて小型である。ＳＫ99・100からは千点をこえる大量の下呂石のフレイクやチップが石鏃の完成品などとともに集中して出土しており、石器製作の際に出た石屑を捨てた土坑と考えられる。

弥生中期前半には居住域が拡大し、Ａａ区南端付近にＳＤ49・50の２条の環濠が掘削される。いずれも規模は幅約５ｍ、深さ約1.5ｍで、断面はＶ字形を呈する。これらの環濠の方向性は前期の環濠ＳＤ65とほぼ一致している。ＳＤ65はなかば埋没しつつも依然として機能していたが、環濠としての意味はすでに失っていたと思われる。居住域にあたるＡｂ区では竪穴住居ＳＢ09を始めとして溝・土坑・柱穴など数多くの遺構が複雑に重複して検出された。内環濠ＳＤ49やＳＤ65上層・70・71、ＳＫ124・140・145などからは朝日期から貝田町期に属する比較的まとまった量の土器・石器群が出土しており、なかでもＳＤ65上層・ＳＫ145から玉作りに用いた可能性をもつ溝のある砥石２点が出土したことは特筆される。ＳＤ65上層およびそれ以西の遺構群は焼土や炭化物を大量に含む土で人工的に埋め立てられた状況を示していることから、中期中葉頃にこの集落は何らかの事情により、広範囲にわたって焼失し、その後に大規模な整地が行われた可能性が高い。環濠ＳＤ49・50付近で数多くの石鏃が集中的に出土していることから、集落間の争いにより罹災したことも考えられる。

弥生中期末にはＡａ・Ａｂ区の性格が一変する。環濠がすべて埋没し、方形周溝墓が築かれるようになる。ＳＤ55・56・66はいずれも方形周溝墓の周溝である。うち、前二者はＳＤ56を掘削したのち、比較的短期間にＳＤ55を掘って西側へ拡張している。ＳＤ56・66から高蔵期の良好な資料が出土している。なかでもＳＤ66から出土した、内部にベンガラを充填した細頸壺が注目される。また、Ｂａ区で方形の平面とすり鉢状の断面を呈する土坑ＳＫ40から高蔵期の最終末に属する土器群が出土している。　（樋上　昇）




弥生中期環境 SD 49・50 完掘状況

SD 66 細頸壺出土状況

第２図　八王子遺跡弥生前～中期遺構図（１：1500）

**弥生後期～古墳後期**

Ｂ（Ｂａ・Ｂｂ）・Ｃ区で、八王子遺跡をほぼ東西に横切る自然流路ＮＲ01を検出した。規模は幅約110ｍ測る。底部は湧水のため確認できなかった。この土層中から山中期に属する土器が出土していることから、ＮＲ01は弥生後期まで、ある程度活発な流水活動を繰り返していたと見られる。古墳前期初頭頃（廻間Ⅰ式期）には、ＮＲ01の流水は止まり、「浅谷」へと規模を縮小させている。古墳中期前半頃（松河戸期）までは湿地状の様相を呈しており、この時期の終わり頃にはこの谷は洪水によってもたらされた中粒砂によって覆われ、完全に埋没したのである。

このため弥生後期はＢｂ・Ｃ区の大部分はＮＲ01の中に当たり、その北側のＡｂ区では南北に走る溝ＳＤ60を検出したのみで、全体に遺構は希薄である。

古墳前期初頭（廻間Ⅰ式期）の遺構は、ＮＲ01の北側のＡａ・Ａｂ区で主に見られた。これらの調査区では竪穴住居５棟の他、土坑・溝を多数検出した。とりわけＡｂ区のＳＫ73からは当該期でも最も古い段階に属す多量の土器が、一括投棄されたような形で出土した。そして前期中頃（廻間Ⅱ～Ⅲ式期）になると、「浅谷」化したＮＲ01の南側にあたるＢｂ・Ｃ区の広い範囲で遺構が展開していく。２つの調査区で確認した竪穴住居は20数棟で、さらに南のＤ・Ｅ区へと広がっている。Ｃ区のＳＫ16・93からはこの時期の遺物が多量に出土した。

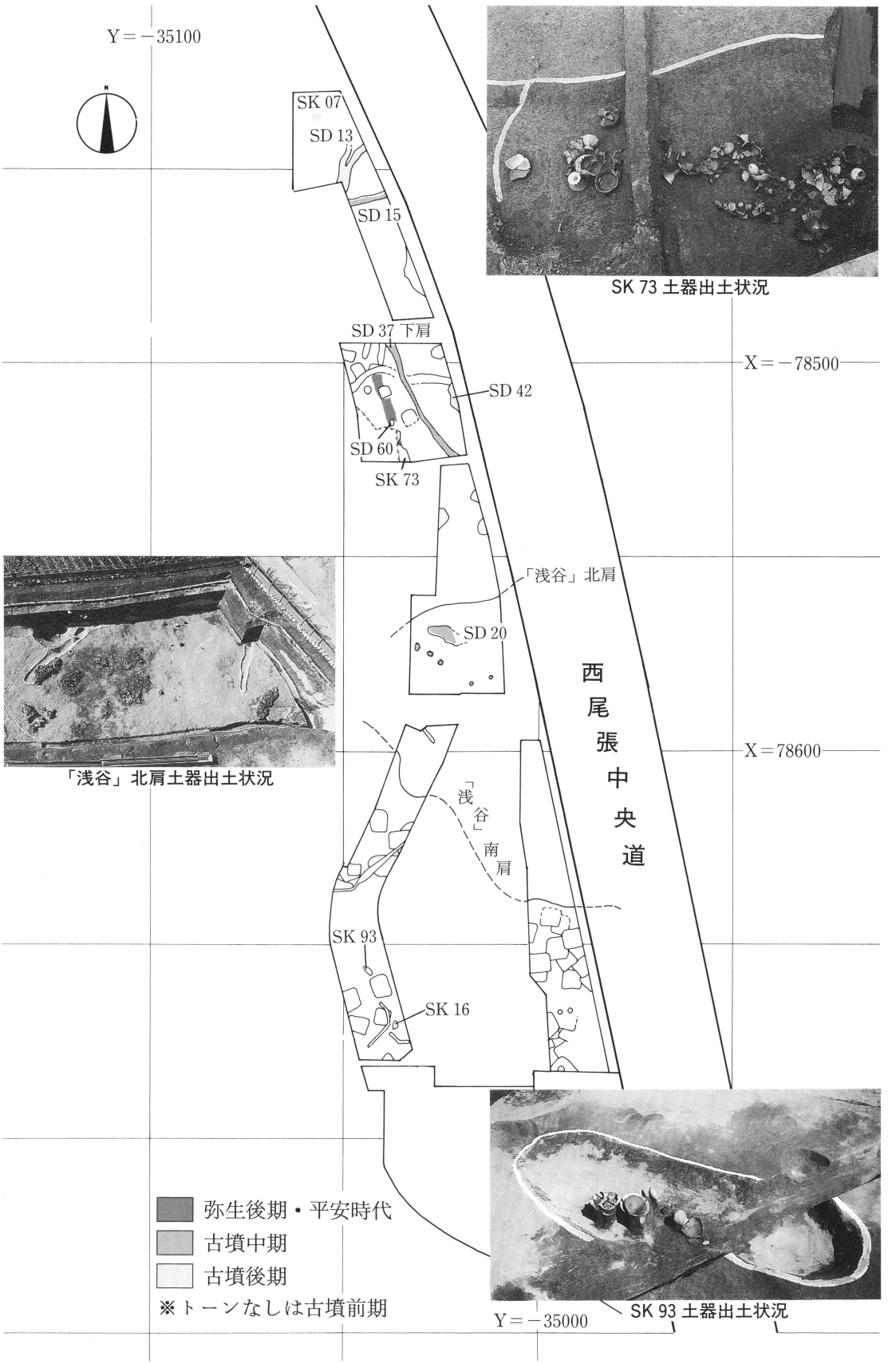
これらのことから古墳前期初頭まではＮＲ01の北側が主な居住域であり、南側に遺構が少ないのは、居住地としての環境がまだ整っていなかったためであろう。その後、前期中頃からはＮＲ01の南側へ居住域が移ったことが予想され、代わって北側ではこの時期から遺構の数が減少する傾向がうかがえる。

「浅谷」化したＮＲ01の南側は、出土した土器から、古墳中期初頭（松河戸Ⅰ式期）までは居住域であったと考えられるが、全体的にはこの時期の遺構の数はさほど多くない。Ａａ区のＳＤ15からは宇田式を中心とする土器群が出土した。またＡｂ区のＳＤ37下層からは滑石製の勾玉模造品と有孔円板が出土した。周辺で祭祀的な行為が行われた可能性を考えても良かろう。Ｂａ区ではＮＲ01が完全に埋没する直前の時期の土坑数基と、それが埋没した後に掘削された溝ＳＤ20を検出した。この遺構からも比較的まとまった土器群が出土している。

古墳後期になっても遺構の展開する様相は、中期とあまり変わらない。Ａｂ区のＳＤ42はこの時期の溝であるが、出土遺物からかつてこの付近に存在した蛇塚古墳の周溝の一部である可能性が考えられる。Ａａ区では、ＳＤ13、ＳＫ07を検出した。

古墳中期から後期にわたる時期は遺構の展開は散発的で、前期の居住域が継続していたことを示す積極的な状況はあまり見られない。むしろ蛇塚古墳が築かれるようになったということから、非日常的な場へと変わっていったとも考えられる。そしてこのような変化をもたらしたのは、ＮＲ01が完全に埋没したことと何か関係があるのかもしれない。

（山本寿徳・飴谷　一）




第 3 図　八王子遺跡弥生後期～古墳後期遺構図（ 1 ：1500）

**奈良時代～室町時代**　奈良時代の遺構としては、Ａｂ区とＢａ区から掘立柱建物２棟を検出した。Ａｂ区のＳＢ10は、調査区の北東隅に北でやや西に振れる方向性を持つ柱穴４つが確認されたが、未調査部分の北ないし東にも遺構は展開していくと思われるため、庇付か総柱建物になると思われる。柱の掘形は１辺１ｍを超え、直径は20～22㎝である。柱間の寸法は桁行が８尺（2.4m）で梁間が６尺（1.8m）と大型の建物である。Ｂａ区のＳＢ01は２間×２間以上の東西棟建物で、西側は調査区外に続いている。方位はＳＢ10と異なり北でやや東に振れている。柱の掘形は１辺0.5～１ｍで、柱の直径は16～18㎝、柱間寸法は６尺等間とＳＢ10より小型である。東側には２間分の塀が平行して検出されている。Ｂａ区の南側では、同時代の溝ＳＤ03を検出した。溝の中からは、円面硯の破片のほか、多量の須恵器が出土したほか、溝の西の長円形の掘り込みの中から、２段重ねの方形の曲物が出土した。さらに、この溝の中から６基の土坑墓を検出した。それらは、概ね長径130～180㎝、短径80～120㎝の長円形を呈していた。埋土の状況は、上層はシルト質細粒砂、下層は粘土質シルトがブロック状に混在しており、中世の土坑墓と類似の様相を示していた。中からは、須恵器の杯蓋、杯身の完形品が数点出土しており、それらの遺物より、土坑墓は８世紀頃のものと考えられる。Ｃ区では、北東から南西方向に伸びる３条の溝と、それとほぼ直角に交わる１条の溝が検出された。これらの溝からは、杯・杯蓋・甕など奈良時代中期の須恵器が出土した。また、溝で囲まれた内側からは、表面に縄目、裏面に荒い布目が施された平瓦片数点が出土した。これらの遺構や遺物、あるいは八王子遺跡から西へ約600ｍくらいの所に同じ時代の薬師堂廃寺があることから、この辺りに古代寺院跡のような遺構を想定することができるかもしれない。

鎌倉・室町時代の特筆すべき遺構は、Ａ区、Ｂ区で検出された方形居館跡である。その区画溝は、ほぼ東西・南北の方向性を持っている。Ａａ区からＢａ区にかけては、４つの方形居館が南北にほぼ50ｍの間隔で連続して展開しており、区画溝は外側のものは幅が広く、内側のものは狭いという特色を有していた。また、溝の状況から複数の作り替えがあったことが伺われた。居館内からはそれぞれ井戸が検出された。Ａｂ区の井戸では曲物が、Ｂａ区の井戸では木組みと曲物を伴っていた。また、溝や井戸の中からは灰釉系陶器が大量に出土した。このＡａ区の居館内からは、区画溝とは異なる北西・南東の方向性を持った溝も検出された。この方向性は、前述した奈良・平安期の遺構の方向性とほぼ一致しており、この時期の古い遺構は、奈良・平安期の遺構の影響を受けているものと思われる。Ｂｂ区の方形居館跡は、１辺が25～30ｍ程度の大きさで、３か所想定された。区画溝内からは、12世紀後半から13世紀前半にかけての灰釉系陶器が大量に出土した。また、ＳＤ11の上層からは、13世紀後半の灰釉系陶器や、常滑焼の甕・鉢などが大量に出土した。これらのことより、Ｂｂ区の方形居館跡は、12世紀末から13世紀にかけて展開していたものと考えられる。

以上の点から、鎌倉・室町期にはこの地は屋敷地として機能していたと考えられる。

（増澤　徹）




第 4 図　八王子遺跡奈良～室町時代遺構図（ 1 ： 1500）

**まとめ**

Ａｂ区からＢａ区にかけて弥生前期の環濠を１条検出した。環濠外には方形周溝墓１基、石器の剥片を廃棄した土坑２基がある。Ｂａ区南半部からＣ区にかけて幅約110ｍの巨大な自然流路ＮＲ01があり、弥生前期から中期中葉の居住域はこのＮＲ01の北に展開している。弥生中期前半には居住域が拡大してＡａ区に２条の環濠が掘削される。環濠内のＡｂ区では竪穴住居・溝・土坑・柱穴が複雑に重複してみつかった。これらの遺構の埋土には焼土・炭化物が大量に含まれていることから、中期中葉頃には比較的広範囲にわたって火災があり、そのあとに人為的な整地が行われていることが判明した。環濠周辺に多量の石鏃が集中して出土することから争いが火災の原因である可能性も考えられるが、被災した範囲が集落の全域におよぶのか否かは調査面積の制約のため不明である。集落の焼失後、弥生中期末には墓域に変化しており、Ａ区で造りかえを含む３基の方形周溝墓を検出した。弥生後期は遺構が全体に希薄で、Ａｂ区で南北方向の溝を１条検出しているに過ぎない。また、この頃からＮＲ01が急速に埋没し始めることがわかっている。

古墳前期初頭にはＡｂ区で小規模な竪穴住居が５棟みつかっており、再びこの地に居住域が展開する。前期中頃にはＢｂ・Ｃ区でＮＲ01が埋没し、両調査区の北端部からＢａ区南半部に「浅谷」が残るようになる。この時期の居住域の中心は微高地化したＢｂ・Ｃ区南半部に移り、20数棟の竪穴住居が検出されている。古墳中期は再び遺構が希薄になり、Ａ区では２条の溝（ＳＤ15・37下層）があるのみである。Ｂａ区には湿地化した「浅谷」内に数基の小土坑が掘削され、その直後の洪水による中粒砂の堆積によって完全に浅谷が埋没し、さらにその砂層の上からＳＤ20が掘り込まれている。ＳＤ37下層からは滑石製の勾玉模造品と有孔円板が出土している。古墳後期も依然として遺構は少ないが、Ａｂ区のＳＤ42は明治17年の地籍図にみられる蛇塚古墳の周溝である可能性が高い。

奈良・平安時代にはＡｂ・Ｂ・Ｃ区で遺構を確認している。Ａｂ区とＢａ区北半部では方位の異なる２棟の掘立柱建物を検出した。特にＡｂ区のＳＢ10は柱掘形が１ｍを超える大型建物であり、その性格が注目される。Ｂａ区南半部には東西溝ＳＤ03がある。この溝の中には５基の土坑墓と長楕円形の土坑２基が溝底から掘り込まれており、この時期の墓制を考えるうえで貴重な資料といえよう。Ｂｂ区とＣ区ではＬ字に直交する数条の溝を検出した。中からは平瓦が数点出土していることから、寺院の区画溝の可能性も考えられる。

鎌倉・室町時代はすべての調査区で屋敷地を方形に区画する溝と井戸を多数検出した。また、Ｂａ区の南半部には奈良時代の墓域と重複して方形土坑墓群が展開している。低湿なＮＲ01の上にあえて築いている点はこの時期の一般的な墓域の立地と共通している。

以上、八王子遺跡の概略を簡単にまとめてきた。時期幅が広く、内容も多岐にわたっている。なかでも弥生前期と中期の環濠が同一の集落で検出されている例は県内でもきわめてまれである。また、盛衰はあるが古墳前期まで集落が継続していく例も珍しい。遺跡の範囲確定、水田を含む生産域や弥生中期末～後期・古墳中～後期の居住域の確認、奈良・平安時代の遺構の性格など今後の課題は来年度の調査を通じて解明していきたい。

（樋上　昇）

# 大 縄 遺 跡

**調査の経過**　大縄遺跡は稲沢市井堀町に所在する遺跡で、三宅川左岸の自然堤防上に立地する。周辺の遺跡では東0.4kmに尾張国分寺跡（南側は堀之内花ノ木遺跡）、西に三宅川を挟んで儀長正楽寺遺跡があり、北1.5kmには尾張国分尼寺跡、北東4.0kmには尾張国府跡が推定されている。特に東に隣接する尾張国分寺に関連する古代の遺物が本遺跡周辺においても多く発見されている。

今回の調査は、県道稲沢井堀線建設に伴う事前調査として10月～12月にかけて調査を実施した。調査面積は2,200㎡で、A区～C区の3地区に分けて調査した。

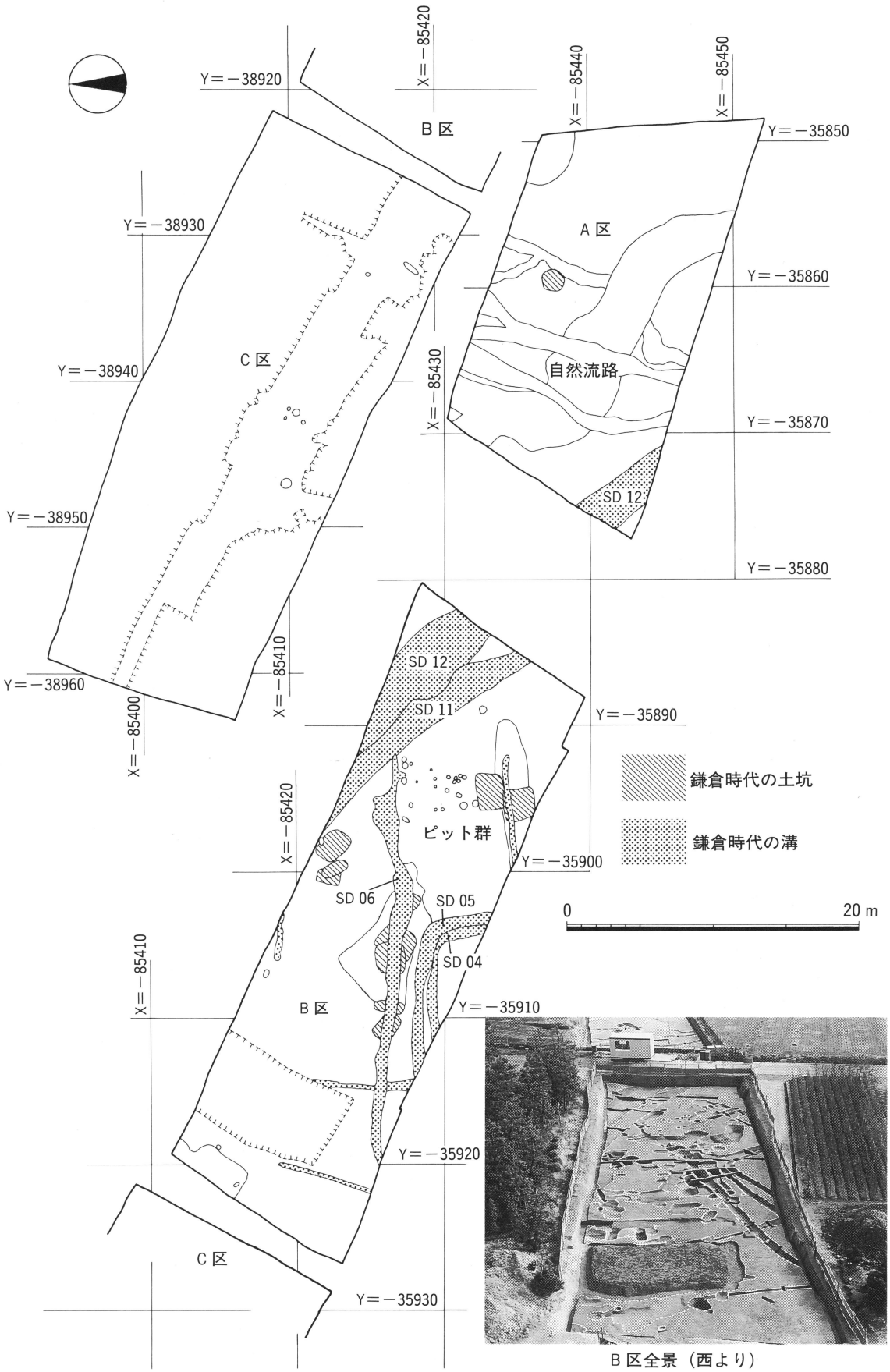
**調査の概要**　確認された遺構は、奈良時代～平安時代の土坑3基、鎌倉時代の溝9条、土坑10基、ピット群がみつかった。B区の鎌倉時代の溝SD04・SD05は南東に開く鍵状になっており、SD06がSD05の北側を並行してはしり、B区北東側にあるSD11・SD12に流れ込むようにある。鎌倉時代の遺構では全て溝が土坑より新しい関係にあった。出土した遺物では、当初予想された布目瓦の他、須恵器、土師器、灰釉陶器などの古代の遺物と山茶椀、土師器が出土した。中世の大型方形の土坑からは土器などとともに植物質の繊維と細枝の木で編んだムシロ状のものが見つかっている。西側のA区、東側に地形的に低いC区では遺構・遺物とも希薄であった。

本遺跡では東の堀之内花ノ木遺跡で見つかっている鎌倉時代の区画溝と同様な溝がほぼ真北の方位に直行、平行する方向で走っており、周辺で大規模な再開発が行われた可能性が強い。また中世の屋敷地の区画割などを復元する上でも貴重な資料と思われる。古代の布目瓦が集中して出土する部分があったが、奈良・平安時代の建物跡などは確認できなかった。

（水谷寛明・蔭山誠一）




第Ⅰ図　大縄遺跡調査区位置図（Ⅰ：9,500）






B 区全景（西より）

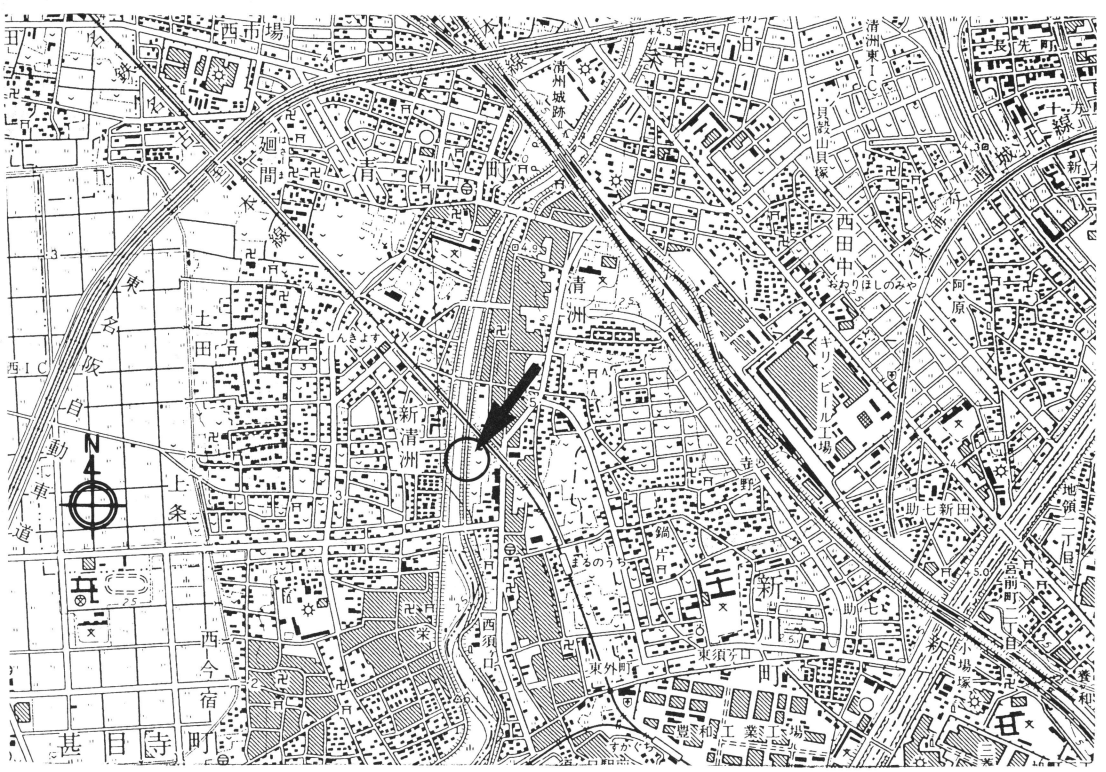
第 2 図　遺構全体図（Ⅰ：400）

# 清洲城下町遺跡

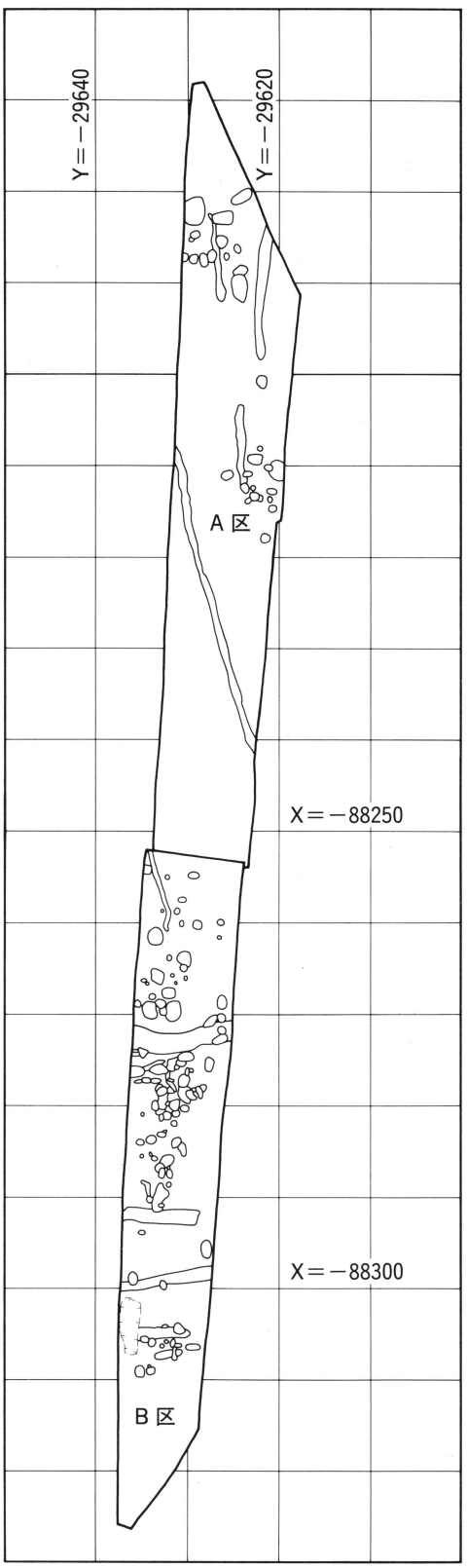
**調査の経緯**　清洲城下町遺跡は、西春日井郡清洲町に所在する古代から近世にかけての複合遺跡である。当遺跡は、濃尾平野を流れる幾多の河川のうち、五条川中流域に形成された自然堤防とその後背湿地上に立地する。この五条川は遺跡からさらに南流し、新川と合流してやがて伊勢湾に注ぐ。発掘調査は昭和59年から継続されており、今年度は五条川河川改修に伴う事前調査として、平成７年11月～平成８年３月まで行った。本地点の発掘調査面積は、3,000㎡である。

**調査の概要**　調査区は名鉄本線が五条川を渡る鉄橋の南側左岸に位置し、これを排土処理の関係上北と南（A・B区）に分割設定して調査を行った。

検出された遺構は、溝・土坑・不定形土坑・井戸などであり、これらは近接する調査地と同様の様相を呈する。これらの遺構の時期については、出土遺物がいずれも少なく明確に判断できるものが少なかったが、戦国期から江戸初期にかけての時期が主体ではないかと思われる。出土遺物は、陶磁器類がその大半を占め、これに石製品、金属製品等が加わる。今回の調査では特筆されるものこそ検出し得なかったものの、主体とする時期はこれまでの調査・報告で城下町期とされた時期にあたり、既に遺構・遺物からさまざまな分析が成されているが、こうした成果に追加されるものとなろう。　（松田　訓）




第１図　調査地位置図（国土地理院１／2.5万「清洲」）



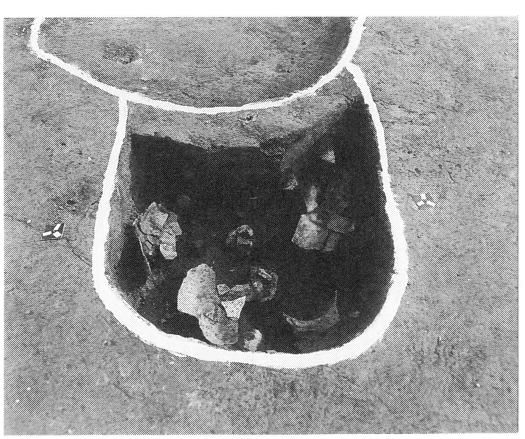

第 2 図　遺構位置図



第 3 図　A 区全景



第 4 図　B 区全景



第 5 図　遺物出土状態

# 一 色 青 海 遺 跡

**調査の経過**　一色青海遺跡は、中島郡平和町須ヶ谷及び稲沢市儀長町地内に所在する。本遺跡は、一宮市街地から稲沢を経て平和町に至る三宅川により形成された標高１ｍ前後の自然堤防とその後背湿地上の荒蕪地に位置している。

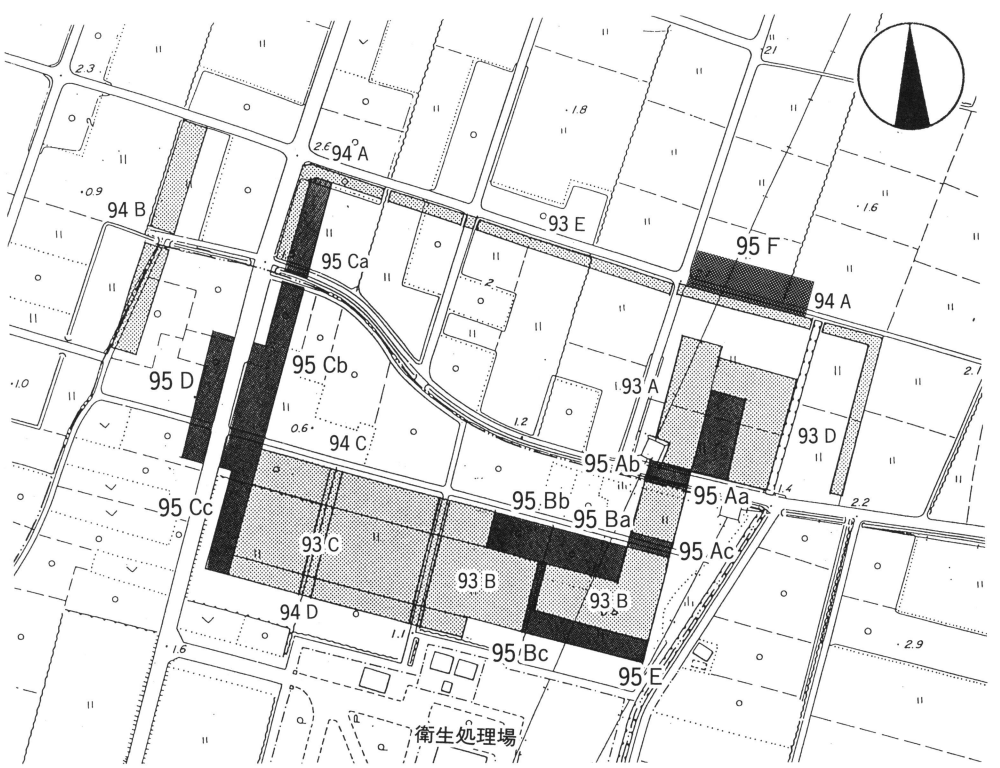
周辺には、南東約1500ｍに尾張国分寺跡や堀之内花ノ木遺跡、大縄遺跡などがあり、７世紀から８世紀にかけて、この地域が尾張の中心的存在であったことをうかがわせる。

今回の調査は、日光川上流流域下水道浄化センター建設及び県道馬飼井堀線建設に伴う事前調査として、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、5800㎡を平成７年４月から平成８年３月にかけて実施した。日光川上流流域下水道浄化センター建設に伴う調査区域については、面積も大きく区域も分かれているので、各区域ごとにＡ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区・Ｅ区と分け、ＡＢＣ区についてはさらにそれぞれの区を、ａｂｃの３区画に細分して調査を実施した。

**調査の概要**　検出できた遺構は、弥生時代中期後葉と鎌倉・室町時代の２期に大きく分かれる。

弥生時代中期後葉の遺構には、竪穴住居や掘立柱建物、方形周溝墓などがある。とくに竪穴住居は60棟以上が検出され、居住域のまとまりを見ることができる。また、方形周溝墓はＡ・Ｂ区に集中しており、墓域が遺跡東部にあることを再確認した。

鎌倉・室町時代の遺稿は、方形土坑がほとんどであり、その数は20基以上で主軸方向の類似性を認めることができた。　（水谷寛明）




第Ⅰ図　調査区位置図（１／3500）

**95A区・B区**

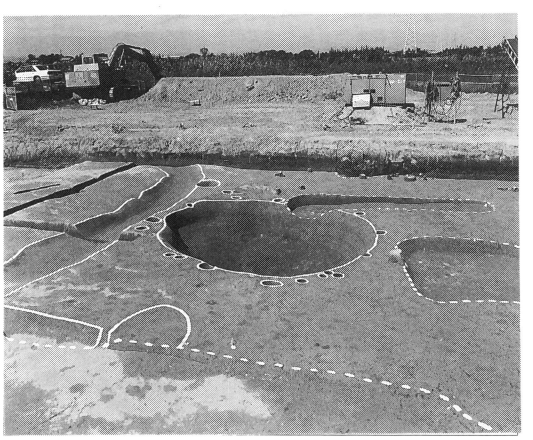
A区は93A区・93D区に隣接する調査区であり、調査の都合上、3調査区に区分した。Aa区では弥生時代中期後葉の竪穴住居11棟、方形周溝墓3基、井戸1基、溝及び鎌倉・室町時代の方形土坑8基などが検出された。Ab区ではAa区で検出された方形周溝墓SZ03の南半部と鎌倉・室町時代の方形土坑2基、Ac区でも93B区で検出された方形周溝墓SZ04の北半部が各々確認された。

A区の方形周溝墓は竪穴住居を切る形で検出されており、この地点では当初居住域であったのが墓域に転換していることが追認された。井戸SE01は直径約4mの円形プランを持ち、漏斗状に掘り込まれており、井戸側構造は全く残存しなかった。このSE01の周囲にはピットが多数存在しており、覆屋などの井戸に関連する施設になると思われる。

B区は93B区に北接する調査区で、3調査区に区分した。Ba区は調査前の現況が畑地であったため、周囲の調査区に比べ弥生時代中期後葉の遺構が良好な状態で残存していた。ここでは弥生時代中期後葉の竪穴住居15棟、方形周溝墓2基及び鎌倉・室町時代の方形土坑2基などが検出された。一方、Bb・Bc区は調査前には水田または用水路であったため遺構の残存状況は不良であった。Bb区では時期、性格とも不明の溝群、Bc区では鎌倉・室町時代の方形土坑1基などが確認された程度である。

Ba区の中で特筆すべき遺構は、拡張して作り直した方形周溝墓SZ01である。SZ01は当初周溝の南東部が切れるタイプの一辺約10mの方形周溝墓であったが、後に東辺を埋めてコの字状の溝を掘削し直して、その結果周溝の南東部と北東部が切れる長方形の周溝墓に変更されている。溝内部からは供献土器と考えられる壺類などが数点出土した。

一色青梅遺跡の方形周溝墓は、その形態と主軸方位から2種に区分できる。一つは幅約2mの溝を巡らせたもので、N－60°－Wの方位を基準に設定されている（例としてAa区SZ06・Ba区SZ01がある）。もう一つは幅1m前後の溝を巡らせたもので、ほぼ南北方位を基準に設定されている（例としてAa区SZ05・Ba区SZ02がある）。Ba区の検出状況からみて、後者のタイプの方が古いと考えられる。（鈴木正貴）



95Aa区SE01



95Ba区SZ01




第 2 図　95 A 区・B 区遺構図（ I ：400）

**95C区・D区**

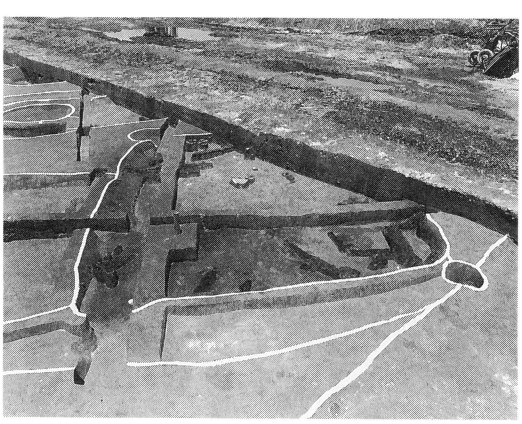
C区は、94Ae区の南、93C区・94C区・94D区の西に隣接する南北に長い調査区で、北から95Ca区、95Cb区、95Cc区（以下Ca区、Cb区、Cc区）の3つに分けて調査した。北側のCa区、Cb区において弥生時代中期後葉の竪穴住居31棟、掘立柱建物3棟、土坑多数、溝3条、自然流路1条と中世の方形土坑4基を、南側のCc区で弥生時代中期後葉の土坑2基と中世の方形土坑4基を検出した。Cb区南側からCc区北側の部分は近年の天地返しで既に遺構面が破壊されていた。

弥生時代中期後葉の遺構は、Ca区北端で自然流路NR01が東西方向に流れ、その南からCb区北側にかけて竪穴住居、掘立柱建物、土坑からなる居住域が広がり、Cb区中央部分において溝を4条確認した。Ca区南側からCb区北側の竪穴住居・土坑の希薄な微高地中央部分において掘立柱建物が3棟検出され、土坑がその南側部分に広がる。

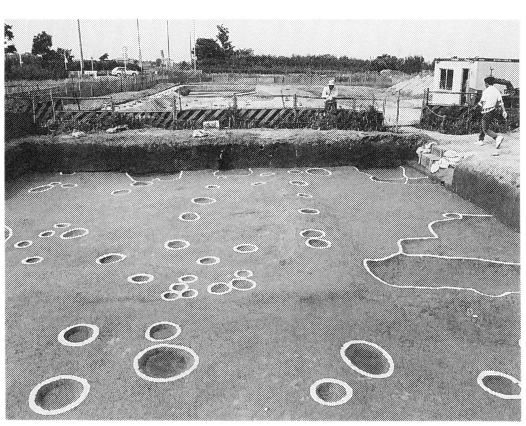
竪穴住居には、住居床面近くで焼土・加熱を受けた土器とともに炭化材が放射状に検出される焼失したと思われる住居（Ca区SB01、SB03、SB05）や自然流路の溢れた水とともに流れた砂によって覆われた住居もあった。住居の掘り方平面は隅丸方形と隅丸長方形があり、壁際に幅15～30cmの溝を巡らすものが多い。屋根を支持したと思われる主柱穴は不明瞭で4本の柱が揃うものはなかった。床面の焼けた跡である地床炉がみつかり、炉の焼土面に甕形土器の底部が逆さの状態で据えられたもの（Ca区SB03）や、加熱赤変した炉石が偏平な面を上にして置かれたもの（Ca区SB01）もあった。掘立柱建物は桁行2間×梁行1間のものと桁行3間×梁行2間のものがあり、柱穴配置から全て高床倉庫と考えられる。土坑の埋土は焼土と炭層の互層になるものと炭粒を含む程度のものとがあり、前者からは魚骨や炭化木などの有機物が出土している。Cb区中央部分の溝には2～3回の重複があり、何のための溝か不明である。自然流路NR01では居住域に接する南肩部分で多くの土器が出土する炭層が数層あり、南側の集落に伴うことが推定できる。またNR01内に時期は不明であるが地震による噴砂痕が確認された。

Cc区では中世の大小様々な方形土坑が散在して見つかっており、SK03からは山茶碗・匙状の木製品が出土しており、13世紀末～14世紀前半にかけてのものと思われる。

D区は95C区の西に隣接する調査区で、弥生時代中期後葉の溝9条と中世の方形土坑1基を検出した。弥生時代中期後葉の溝は格子状に交差し、旧地形の傾斜に沿って流れてい



95Ca区　SB03



95Cb区　掘立柱建物




第 3 図　95 C 区・D 区遺構図（Ⅰ：400）

る。Ｃｂ区中央部分にあった溝と同様な形態をもつものである。溝には層位・切り合いからＳＤ01・ＳＤ02からＳＤ03・ＳＤ04への主に２段階の変遷がある。

**まとめ**　今回の調査をこれまでの調査成果をふまえてまとめると以下の６点である。

１．弥生時代中期後葉の95Ｃａ区の自然流路ＮＲ01は北東から南東に蛇行しながら流れるものと想定され、95Ｃａ区では順次南側から埋まっていったものと思われる。

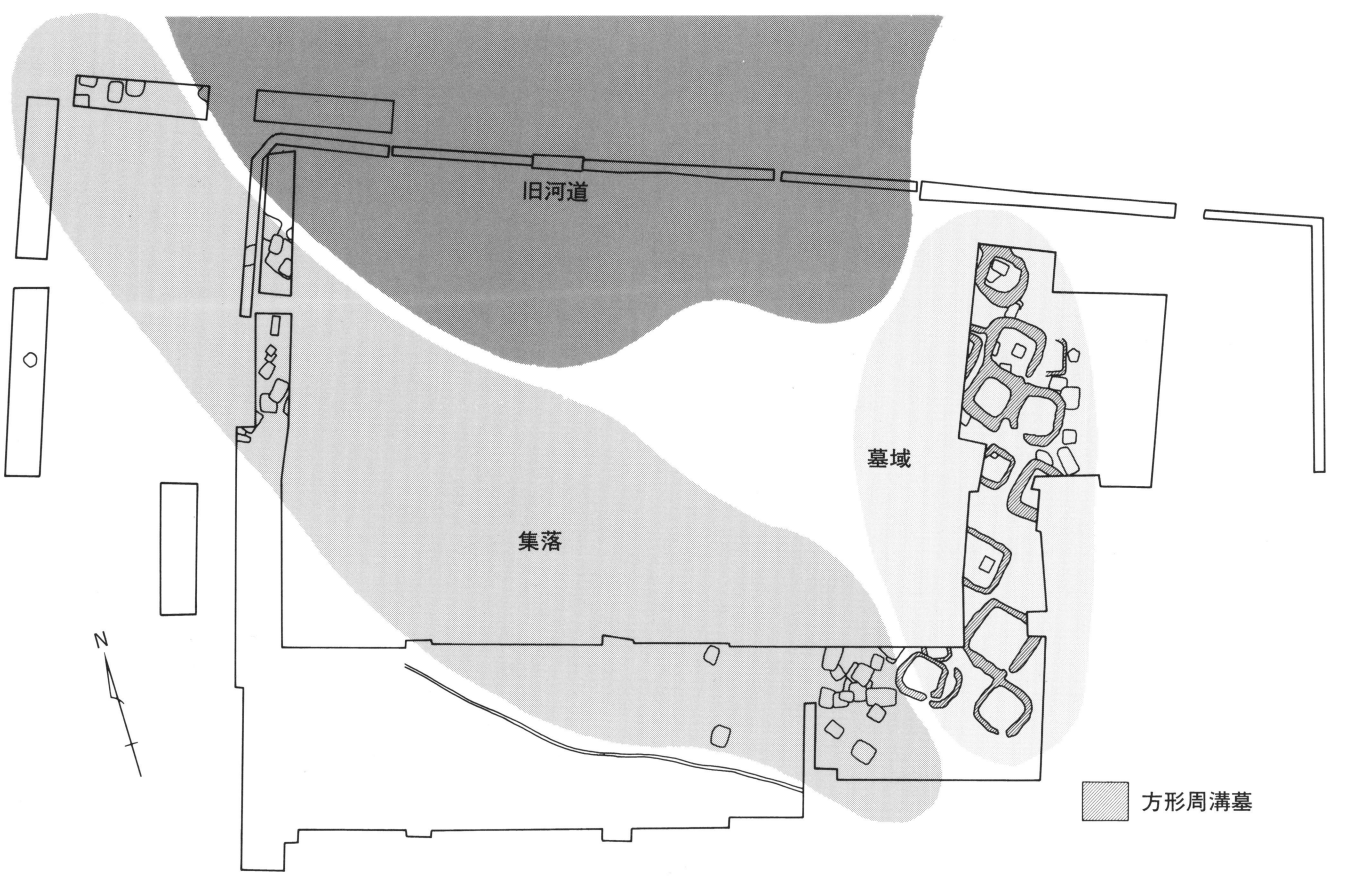
２．弥生時代中期後葉の居住域は北西に隣接する一色長畑遺跡から南東の95Ｂ区の方向に細長くのびる状況が想定できるようになり、その中で掘立柱建物周辺では95Ｃｂ区北側のように他の遺構が希薄な部分があり、農作業に伴う作業場などの空間になる可能性がある。

３．弥生時代中期後葉の墓域は93Ａ区・95Ａａ区から93Ｂ区・95Ｂｂ区の南北に広がり、溝の方位・切り合いから２段階の変遷がある。

４．95Ｄｂ区・95Ｃｂ区南側部分では小規模な溝が格子状にめぐり、他の遺構が見られないことから、居住とは直接関係のない空間として利用されたものと考えられる。

５．95Ｃｃ区南側において、弥生時代中期の遺構・遺物が確認されたものの希薄になることから、弥生集落の南西端になるものと思われる。

６．中世の方形土坑は昨年度までの調査によりわかっていた土坑の分布傾向に加えて、低い部分に占地をしている様子が伺われた。また方形土坑の分布は従来の調査区南側にさらに広がりをもつようである。　（蔭山誠一）




第４図　一色青海遺跡復元想定図（弥生時代中期）

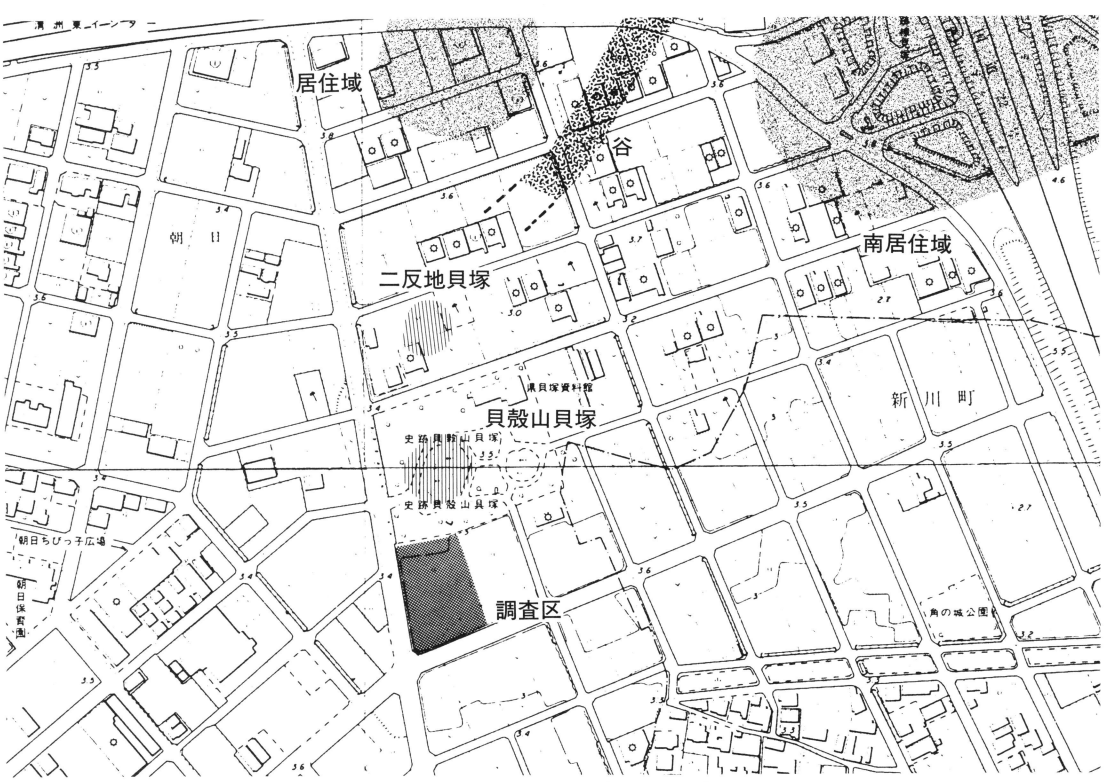
# 朝日遺跡

**調査の経過**　朝日遺跡は、西春日井郡清洲町を中心に春日町、新川町、名古屋市西区にまたがる東海地方屈指の弥生時代の集落遺跡である。これまで昭和44年から平成元年にかけて愛知県教育委員会、㈶愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部、㈶愛知県埋蔵文化財センターによって約90,000㎡が発掘調査されており、多くの成果を得ている。

今回の発掘調査は新資料館建設に伴うもので、愛知県教育委員会の委託事業として実施された。調査区は、遺跡の規模が最大となる弥生時代中期から後期の中心部の南西に位置し、国指定史跡貝殻山貝塚の南に隣接する地点である。

**調査の概要**　調査区の旧地形は、北部が微高地の南縁部に当たり、南部が後背湿地で低くなる形で復元できる。遺跡の基本層序は上位から、耕作土、灰色粘土、灰白色粘土～砂、黒色土、黄灰色シルト（ベース）の順に堆積している。検出された遺構は、中世以降、古墳時代、弥生時代の３期に大別される、中世以降の遺構は灰白色粘土上面で検出され、さらに鎌倉・室町時代と戦国・江戸時代に区分できる。古墳時代の遺構は黒色土上面で検出され、古墳群が確認された。弥生時代の遺構は前期の溝や貝塚、中期から後期の方形周溝墓などが検出されており、ほぼ弥生時代全時期にわたって遺構・遺物が展開していたことが認められた。

ここでは、中世以降と古墳時代の状況を中心に報告する。




第１図　調査区位置図（１：5,000）

**古墳時代**　古墳時代の遺構には、古墳19基、道路状遺構１条、土坑などがある。

古墳はほぼ調査区全体で検出された。古墳の大半は浅い周溝を巡らし、墳丘を低く盛り上げたものと考えられる。墳丘の平面形は隅丸方形状で、一辺の長さは５～８ｍの規模を持っている。墳丘の上端面は削平されていたと考えられるが、一部に弥生時代の包含層を盛土した墳丘部と主体部と思われる土坑が残存しているもの（ＳＺ04・ＳＺ05・ＳＺ06）もある。主体部と思われる土坑は、平面形は不定形で石室を持たず、粘土槨や木棺の痕跡も確認することはできなかった。また、調査区北西部には弥生時代の貝塚の高まりが認められ、古墳（ＳＺ19）として利用された可能性がある。

周溝は幅が３～10ｍで浅く、隣接する古墳と共有している形となっている。周溝の切り合い関係は詳らかにできなかった。周溝は１～２ヶ所切れて陸橋部を形成するもの（ＳＺ07など）と、全周するもの（ＳＺ09など）がある。陸橋部を通じて掘り残し部に接続したもの（ＳＺ01など）も見られる。周溝内には灰白色砂やシルトが堆積しており、洪水によって埋積されたものと考えられる。

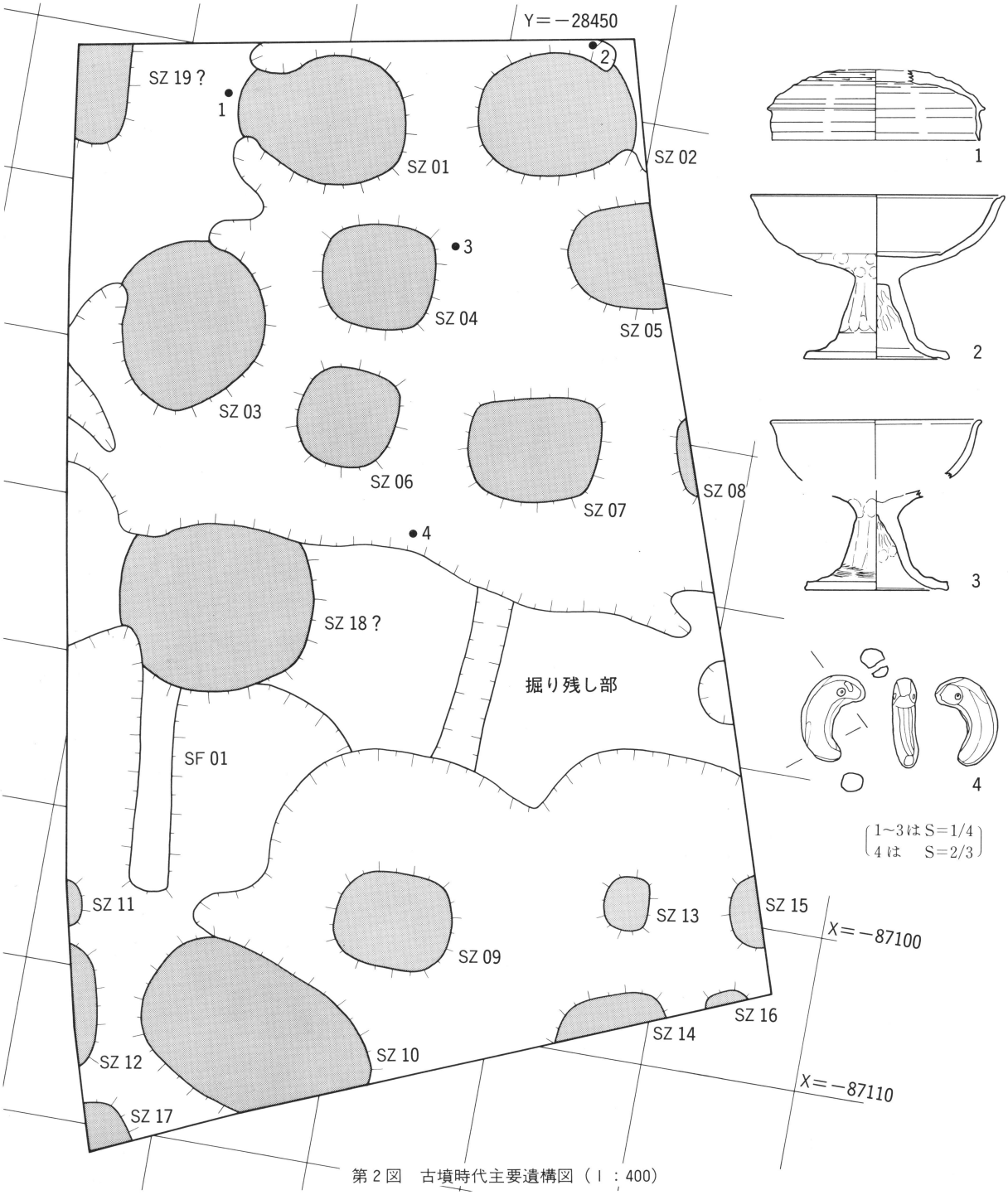
調査区北半部と南半部では古墳の形状や配置が異なっている。北半部の古墳（ＳＺ01～ＳＺ08・ＳＺ18・ＳＺ19）は比較的高い地点に立地していることから、やや墳丘を高く盛り上げられており、形状や配置が規格的になっている。一方、南半部の古墳（ＳＺ09～ＳＺ17）は墳丘が不定形で小さく、配置も散在している。北半部と南半部の古墳群の間には周溝を掘り残した部分があり、古墳群を分割している。掘り残し部には、溝と土坑の他に、南北に細長い道路状の一段高い高まり（ＳＦ01）が認められる。

古墳時代の遺物は、調査区北半部から多く出土している。古墳周溝内からは土師器高杯（２・３）・甕や勾玉（４）や木製品などが、墳丘上の包含層からは須恵器杯蓋（１）・甕の破片などがそれぞれ出土した。これらの遺物から、この古墳群は５世紀後半から６世紀前半に造営されたものと考えられる。

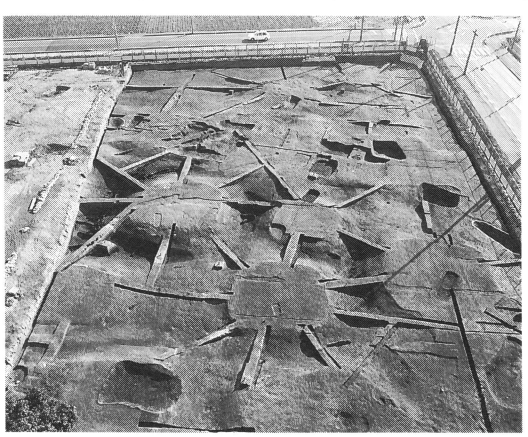
**中世以降**　中世以降の遺構には方形土坑30基と溝１条などがあり、大きく２時期に区分できる。

鎌倉・室町時代の遺構には方形土坑が24基存在する。方形土坑は長辺が３ｍ前後の長方形を呈しており、比較的垂直に掘り込まれている。ＳＫ02やＳＫ23などのように均質手の灰釉系陶器椀（５）が１個体分出土する場合もあった。これらの遺物から方形土坑群は13世紀後葉から14世紀前葉のものと考えられよう。

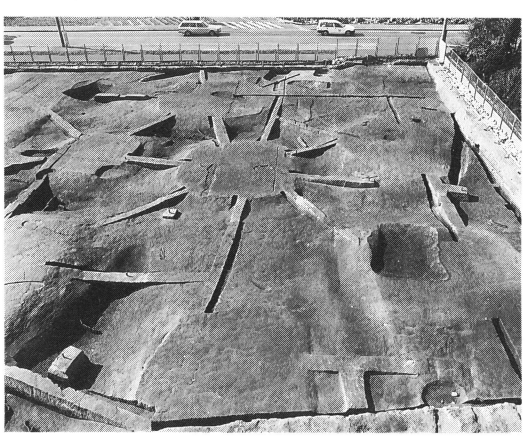
戦国・江戸時代の遺構には、方形土坑６基と溝１条がある。この時期の方形土坑は長辺が４ｍを超えるような大形のものが多く、平面形は鎌倉・室町時代のものに比べ不定形で、階段状に掘り込まれている。ＳＫ25の上層からは馬骨が出土した。ＳＫ07は出土した土師器皿（６）から15世紀末～16世紀前葉、ＳＫ96は出土した瀬戸美濃窯産陶器皿（７）から16世紀末～17世紀初頭に位置づけられることから、戦国時代を通じて方形土坑が営まれていたことが判明した。人骨などはまだ確認されていないが、鎌倉・室町時代のものと同様、墓坑であったと想定される。




第２図　古墳時代主要遺構図（１：400）



古墳時代全景（北から）



ＳＺ04など（東から）

**まとめ**　今回の調査成果をまとめると、以下のようになる。

1．古墳時代中期から後期にかけての低湿地部での群集した古墳群を検出した事例は珍しく、古墳は低墳丘の周溝墓の形状となっている。既に存在が明らかとなっている同時期の県指定史跡検見塚ＳＺ1002やＳＺ1001との関係が注目される。

2．鎌倉・室町時代の方形土坑群は、過年度に調査された土坑群との関連が問題となる。該期の墓域が当地点まで展開していたと考えられる。

3．戦国時代の方形土坑が確認されたことは、該期の墓制を考える上で重要である。この地点が近在する清須城下町に伴う墓域であった可能性が考えられる。

（福岡晃彦・宮腰健司・鈴木正貴）




第３図　中世以降主要遺構図（１：400）



方形土坑群（東から）




（すべてＳ＝1/4）